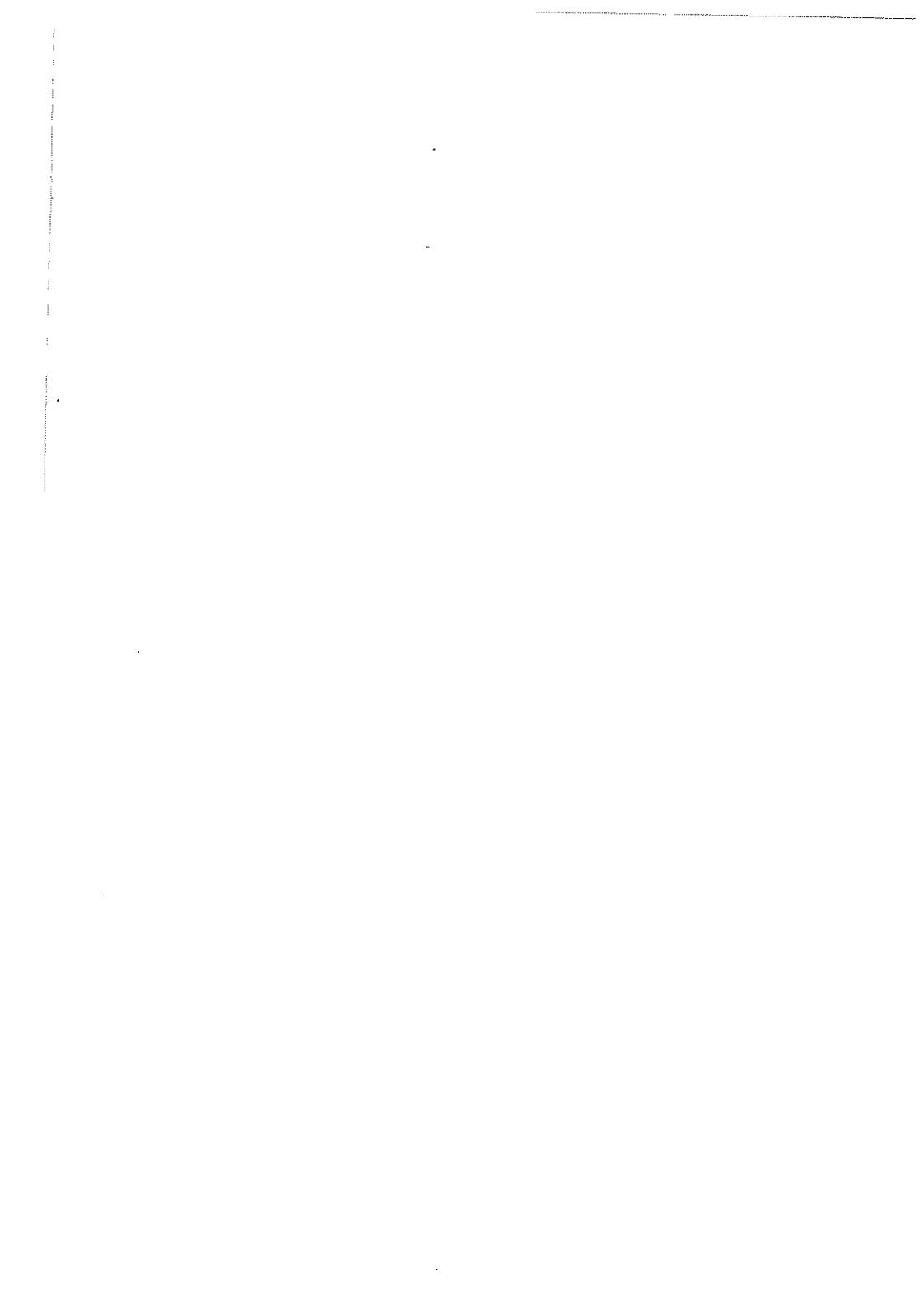




連続フォーラム「チョゴリときもの」

～統一と和解をめざす祖国——在日は今～

財団法人 京都市国際交流協会



はじめに

二〇〇〇年六月十五日という日は在日の人たちにとって忘れない日となつた。いうまでもなく、南北首脳会談が平壤で開催された「和解の第一歩」の日となつたからである。大韓民国や朝鮮民主主義人民共和国の人々にとってもそうだったが、異国の方で過ごし、また異国の方で生まれた二世・三世の人々の祖国へのさまざまな思いや、解放後の在日の生きてきた苦闘の日々を記憶にもつ在日にとっては、本国の人々とはまた別の感慨があつたことは想像に難くない。今年度のテーマが「統一と和解を目指す祖国——在日はいま」とされたのも当然のことであつた。このたびの和解への思いが世代によつてさまざまに違つてゐるにちがいない、という想定で一世、二世、三世の方々に登場していただいたが、どの世代にとっても和解を率直によるこぶとともに、統一への期待がいかに大きいかを思わせられたフォーラムであった。今回は市内在住の在日学生によって演じられた寸劇は在日と在日を友とし、また在日の問題をあまりきずいていない日本の青年等を登場させて、日常に潜む日本の青年たち、在日の青年たちのさまざまな思い、出会いのありようをわかりやすく示してくれるものだった。また「子どもに教えること」をテーマとした三回目のフォーラムでは民族学校の教師の報告のほかに市立嘉楽中学校のふたりの教師の在日の子どもをめぐる教育実践の報告がビデオを用いて報告された。このように今回のフォーラムは多彩な方法で設問に対してもうけられ、または学校や職場でのありようを照らしだすものとなつた。しかし最後の回の在日一世および年配の二世の語りは若者とちがつて聴衆の心に深く感銘を残すものとなつた。「いまはこうしてしあわせです。」とにかく語られている。それはうちにちがいないのだが、その人生の大部分、それも若く、平和の世ならば、それぞれに未来に希望を託して伸び伸びといきたであろうその時に、一世たち、また幼年時を解放前後の苦しい時期に迎えた一世たちはどんな日々をおくつ

ていたのか。ここは想像力を大いに働かすことが必要だ。

「今はしあわせ」と語られるその背後には「しあわせでなかつた長い長い時間」が存在していたのだ。また、苦難の日々を支えたものは家族にかける愛情と家族の笑顔だつただろう。地域で暮らす同胞の力も本当に心強かつたに違いない。それらの支えがあつたからこそ、なんとか家庭を持ちこたえ、元気で老年期を迎えたのだ。このような一世のお話を聞かせていただくなびに私はいつも自然に頭が下がる思いがする。

その表情のひとつひとつが実に穏やかで、お話はどれをとっても心にしみるものがあるからだろう。その人たちにとっては他の世代とはまた一段と深く祖国の和解と統一への期待が大きいだろう。今まで何度も和合の会談はすぐに幻となつたこと、祖国の分断が在日社会にも深刻な影響を及ぼしたこと、などを考へると、よけいにこの度の首脳会談には強い印象をもたれたに相違ない。

この人たちこそ、生きている間に統一されないまでも着実に和解が前進してゆくことを、わが子の成長を見守るように期待されているにちがいない。

日本人としてはこの和解と統一への歩みが更に進むように側面から行動することが望まれる。それはいうまでもなく日朝国交交渉の再開と妥結——それはいうまでもなく戦後補償の課題を解決することであり、もうひとつは「つくる会」の教科書のような「日本がよければそれでよい」という手前勝手な歴史観の登場を許さないことである。昔も今も、そしてこれからも日本とアジアは隣国であり唇齒補車の関係にあるからだ。

そして在日の存在がもつとみぢかに隣り合つた民族の存在を知らせてくれている。

目 次

「チ・ヨ・ゴリときもの」～統一と和解をめざす祖国——在日は今～

第一回 『在日の青年として』	7
第二回 『在日を生きるとは』	49
第三回 『子どもに教える』こと	77
第四回 『祖国を思つ』	119

第一回『在日の青年として』

パネリスト

洪昌明氏

(在日三世・在日本大韓民国青年会京都地方本部会長)

ホンチヤンミヨン
オカムラ

岡村昌明氏

(在日三世・大学院生)

ナツエ

夏枝氏

(京都造形芸術大学教授)

コーディネーター

仲尾宏氏

11001年2月16日実施



第一回『在日の青年として』

第一部

司会 本日は『チョゴリときもの』にお越しいただきましてまことにありがとうございます。ただいまより今年の『チョゴリときもの』を開催させていただきます。

今年のテーマとしまして、皆さんのお手元にありますように『統一と和解をめざす祖国——在日は今』というタイトルで企画してみました。本日十六日金曜日、第一回目は『在日の青年として』というテーマでお話しいただきます。

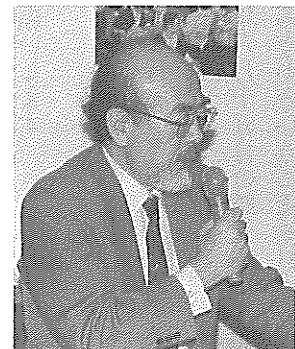
コーディネーターはいつもの通り仲尾宏先生にお願いしております。本日のパネリストはお二人で、まずお一人目が洪昌明（ホン・チャンミョン）さんでいらっしゃいます。そしてもうお一人が岡村夏枝さん。

このお二人から『在日の青年として』のお話をいただきたいと思います。それでは先生、よろしくお願ひします。

仲尾 みなさん、こんにちは。毎年、雪まじりの寒い日がこの『チョゴリときもの』の日になつておりまして、今年もまた大変寒い中をお集まりいただきましてありがとうございます。

今年のテーマは、今鄭（チヨン）さんが言われましたように『統一と和解をめざす祖国』、つまり昨年六月十五日の歴史的な南北首脳会談をうけて、多くの在日の人達がどのような思いを持っているのだろうかということを日本人としても知らなければいけないし、在日の方にとってそのことの思いを日

本人に伝えていただけたらという思いで企画しました。



仲尾 宏氏

大変嬉しいニュースでありました。韓国と朝鮮に関して少しでも関心を持っている者にとっては本当に嬉しく思いましたけれども、まだまだすぐにも統一ができるという情勢ではございません。それは何年先になるかはわかりませんけれども、少なくとも統一をめざして和解をしようということだけは決定的になったと思います。何遍かの振り返しもあるかもわかりません。特に世界情勢の中での出来事でありますから、そういうた振り返しはあるかも知れませんけれども大筋はまず変わらない。その事を最も敏感に感じられたのが、実は在日の人達だったのでなかろうか。多くの在日の人々がそのように心から喜んでおられます。

今日、皆さんのお手元に、地図と地図の上に書いた年表をお配りしております。いわゆるがなですが、少しだけ説明をさせていただきます。まず右側の年表ふうのものですが、これを見ていただくと一番上は一九一九年から始まっています。一九一九年という年は三・一独立運動、あるいは当時は日本では万歳事件などと呼んでおりました。東京のY.M.C.Aで朝鮮から来ていた留学生達が独立宣言文を起草して、それを密かに祖国に持ち帰り、そして約百万人の人達が万歳、マンセーと叫んで日本からの独立に起ち上がった日であります。その少し前、左の地図の真ん中の左端に「日韓併合」当時という地図がありますが、一九一〇年に日本が韓国を併合いたしました。大韓帝国を併合いたしました。それは一方的な併合であったので、この「日韓併合」といういい方は実は正しくない。本当は韓国併合と言うべきで、それが今、教科書でも研究者の間でもほぼ統一した呼び方になっております。

そして一〇年からの植民地支配が始まつたわけですが、それからちょうど十年後、一九一九年に独立

運動が燃え上りました。しかしそれは総督府の権力によつて過酷に弾圧され、数千名が投獄され拷問の後、命を断たれたということがあります。その後、そこにありますように米取り政策、人取り政策、つまり日本への米の移送を強制する、そして人取りというのはいわゆる強制連行であります、そういう経過を経て一九四五年八月十五日、やっと朝鮮半島は解放されたわけであります。

その直後、すぐにも独立して新しい祖国を建設する、という動きが高まりました。そしていつたん、朝鮮人民共和国の独立が宣言されました。その頃すでに日本軍が撤退した後に北ではソ連軍、南ではアメリカ軍の占領が始まつており、占領と言えば少し大げさですが、駐留が始まつておりまして人民共和国は認めるところとならなかつた。

そして一九四八年に大韓民国が南北分で単独選挙を行うことによつて成立了。それに対抗する形で同じ年の秋に北でも朝鮮民主主義人民共和国が成立いたしました。それがそもそもの分断の始めであります。さらに不幸なことに一九五〇年六月十五日、韓国では韓国戦争と言つていますが、朝鮮戦争が始まりました。同じ民族が血で血を洗う内戦になつたわけです。もちろんこれは国際情勢が反映しております。当時の冷たい戦争がこの朝鮮半島の一隅で熱い戦争になつたということでありました。そして南へ北へローラーをかけたように戦場が行き来し、南ではアメリカ軍が上陸する、北では中国の義勇軍が参戦するという形になりました。

日本はその時、後方基地がありました。後方基地だけれどもたくさんの弾薬、いろんな軍事用の物資を生産しまして、アメリカ軍や韓国側に送つたわけです。それで日本は特需景気、朝鮮特需といわれて、奇跡的な復興がそれによってできたという非常に皮肉な出来事になりました。つまり戦後日本経済の出発点はその戦争による特需がなければあり得なかつたのです。そういうことでこの朝鮮半島の分断と戦争に日本は全く無関係であつたわけではありません。

それから在日の方にも直接影響を及ぼしました。南の政府を支持する人達は義勇軍を組織して従軍しました。また北の方を支持する人達は、自分たちの祖国が日本で作った弾薬や軍需用品によって蹂躪されるのはたまらないと、日本国内でそういった軍需工場や兵拠施設にデモをかけるという事件、吹田事件やその他の事件が起こっておりました。

そういうことで悲劇的な戦争が続きましたが、一九五三年に停戦協定が成立いたしました。そして地図の左上にありますように、ソウルの少し北の方に休戦ラインを設け、その両側を非武装地帯とすることによって一応軍事的な衝突を当面は回避することになったわけであります。西半分は臨津江（イムジンガン）という川が流れております。私は板門店（バンムンジョン）までは行つたことはないのですが、すぐ手前の統一展望閣とか自由の橋のある所まで行きますと、そこには南の方の家族が別れ別れになつた北の家族のためにお祈りをするという台もできております。川を挟んで手にとるように北がよく見えております。鉄道は今そこで分断されています。

そういう分断状況が固定化されました。けれどもとりあえずは戦争状態がないということであります。それは在日の人にも大変大きな出来事でした。私はまだ高校生でした。実は私が高校生の時に最初にデモを行つたのは、この休戦協定成立の祝賀デモが円山音楽堂であつて、それから四条通りでデモがあつたのに参加したことをかすかに覚えております。提灯行列の夜のデモでした。それから何ともう五十年以上たつております。そして、この間いろんな動きがありました。

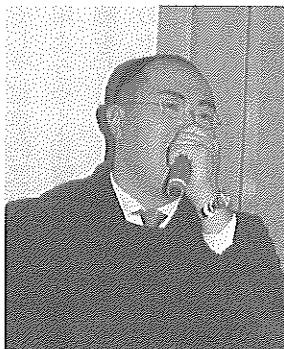
右の年表ふうのものを見ていただきますと、六五年に日韓条約が結ばれる。そして日本はとりあえず南北と国交を回復するということになりましたが、北の方との国交回復交渉は遅々として進んでおりません。それから後、七一年には南北赤十字会談、七二年には南北共同声明がありまして和解の動きが始まつたかのように見えましたが、結局それは淡い期待に終わりました。この間、南北の対立は非常に緊張を

生んでおります。しかもそれは二つの政府の意向だけではなくて、先ほど申しました国際情勢が反映していると思います。双方ともに非武装地帯のまわりに膨大な軍事力を展開しなければならない、そういうことた国家経済の中での軍事費の比重、これが双方の国の経済を非常に歪めることになつてきましたということも事実であります。それからお互にかつて戦い合つた仲ですから、お互にお互いの存在を認めたくない。例えば南の方、韓国では北を国家と認めなくて北韓、北の韓国であるという言い方をしますし、北の方では南朝鮮という言い方をして韓国という存在を認めていなかつた。こういう状態が続き、当然それは人々の意識にも反映しております。日本の中でも在日の民族団体が二つに分かれ、祖国の分断と軌を同じにして誹謗し合うという不幸な関係が続いてまいりました。こういうことがいつまでも許される訳はない。つまり一つの民族が二つに分かれて政府が別々にあるだけではなくて誹謗中傷し合う、そして軍事的緊張が続いている、これは世界史的に見ても非常に異常な出来事でありました。それが昨年ようやく和解に向かう流れができました。そして日本の在日の方々の中でも大韓民団と朝鮮総連が和解をしあおうという動きが中央でも地方でも動いてきております。今日お話にもでると思いますが昨年の十二月三十一日の大晦日には、京都で南北のそれぞれの立場を越えて在日の青年が手を取り合おうではないかというカウントダウンのイベントが催されて、大変多くの人が集まり大きな成功をおさめました。

そういうことの中心であつたお一人が、今日来ていただいている洪さんであります。今日は若い世代の方に、今私が概略を申しましたような戦後の不幸な分断の時代をこれからどのようにして乗り越えていこうかと、あるいは乗り越えられるだろうかという率直な思いを語つていただけたらと思っております。もう一人は岡村夏枝さん、この方は今、通称名、日本名を名乗つておられますがこの方も在日三世の方でございます。その名前の名乗りなどについてはそれぞれの思いがおありでしょうし、またお話の

中で出していくだけだと思います。

それではまず洪昌明（ホン・チャンミョン）さんから約二十分くらいお話しをいただこうと思います。
よろしくお願ひします。



洪 昌明氏

洪 皆さんアンニヨンハシムニカ、こんにちは。私の名前は洪昌明と言います。こう見えて年令はまだ二十五で、私はいま在日本大韓民国青年会京都地方本部で専従の会長をしております。民団の参加団体になります。

まず私は父親が在日韓国人一世で母親が日本人であります。そのために今まで法事（チエサ）とかはなかつたですし、当然、韓国語が飛び交うとか家庭料理の中で韓国料理ができるという環境は全くありませんでした。私が初めて韓国人であるということを知ったのは、十五歳の誕生日前に外国人登録をしに行きなさいと言われて、初めて自分が韓国人であるということを聞きました。それまでは当然日本人であると思っていましたし、今までそのように育てられてきました。

なぜそういういわゆる歪んだ環境になってしまったのかと言いますと、例えば私の父は三男なのです
が長男、次男が事故で亡くなり、次男は電気工事をしていて電線に引っかかって死んだというような厳しい家庭環境がありました。他にも妹が二人いて働きながら妹を学校に行かしてはいたとか大変辛い思いをして、自分の息子にはそのような辛い思いをさせたくないというような思いがあつたらしくて、なかなかその事を言えなかつたということを後で聞きました。

私の母親の父、私からしたらお祖父さんは昔、日帝時代に日本の近衛兵だつたらしく、母親の実家の

方へ行きましたら天皇陛下と一緒に何千人が一緒に写っている写真がありました。写真ではおぼろげながらこの人がお祖父さんだと顔を覚えているのですが、私が子どもの時に親戚同士が正月に集まつても、お祖父さんはその時はもう寝たきりだったのですが、私はその時のお祖父さんの顔を思い出せないといふか、実際にお祖父さんの顔をじかに見たことがないというか、今考えたら部屋に入れてもらえなかつたのです。それはお祖父さん自身に罪の意識があつて会うのが嫌だったのか、純粹に朝鮮人、韓国人が嫌いで部屋にも入れてくれなかつたのかはもう定かではありません。

父方の方はお祖母さんお祖父さんとも私が生まれる前に亡くなり、父親は当然言いませんでしたし母親は日本人だったので、実際に民族的なものを伝え聞くということはほとんどなかつたのです。私が初めて外国人登録を行つた時はまだ指紋を探られたのですけれど、何で私が韓国人であるということを十五年間も黙ってきたのか、何人でもいいけれど十五年も隠す必要がどこにあつたのかということでだいぶん親とのやりとりがありまして、それが私の暴力という形になつてしまい家庭がだいぶん乱れるということになつてしましました。

私は今、韓国青年会で常勤をしているのですが、遅れてきた民族心ではないですけれども、なぜ私が日本の中で在日三世として、韓国人としてこの日本にいるのかと、ましてや言葉も喋れない韓国人ということをよく考えていましたら、やはり私は本名を名乗る。私は十五歳で高校に入りましたがあまり行かなくて、通信制の朱雀高校へ行き働きながら学校へ通つたのですが、仕事、バイトをしながらそこで通名を名乗っていました。私は韓国人であるということを平気で喋りながら生活してきました。その後、正社員として就職した時も通名で就職させていただいたのですが、その時も社長にも私はこんな活動をしていますとか、このような環境があつてなかなかとか、そういうことを常に隠すのではなくて、自分の中での胸を張るというのも変ですがカミングアウトするというのか、別に言うことも隠す必要もな

いのでそのようにしてきました。

そして二十歳の成人式の時に民団の成人式があるという案内が来て、民団という組織に関わることになったのですが、正直その時に同じ悩みを持つであろう在日同胞の友達がまわりに誰もいなかつた。ましてやそれを聞いてもらえる先輩とか、それを言いたい後輩とか、同年代の人が誰もいなかつたですね。その時に初めてこういう団体があるということで、私も今青年会京都で会長をするというまでになつたのです。ここで一つあると思うのですが、例えば韓国人だからこう生きろとか、日本人だからこう生きろとか、そういうステレオタイプで押しつけられるとか、今までにはそういう考え方があつたと思うのですが私はそれ 자체を否定したいのです。やはりそれぞれの人の生き方があります。韓国人だから韓国人らしく生きるのもその人の自由ですし、らしく生きないのも各人の自由だと思います。ですから逆説になるのですが、私の家庭環境がそうだったからこそ今、私の立場が反対にここにあるのかなと思うようになりました。そういうことを言えば怒られるかも知れませんが、父の生き方も確かに私が聞いてもこれはどういうことだと思いました。十五年間も言わなかつたという理由が、ただ十五歳の外国人登録のぎりぎりの時までなぜ言えなかつたのかという理由を考えていきましたら、父も父なりにいろいろ考えた末にやつたわけで、それ自体が決して良いことは絶対言えないでしょうが、そういう選択しかできなかつたというのが事実です。そういう意味では私の中では小さい頃から韓国人であるとか、民族的なものとかは一切なかつたです。十五歳以降、ここ十年の間、本名を名乗って仕事をしたいですし、日本人の血も流れていますが韓国人だということがやはり私の中では強いので、それだったらやはりもつと民族的な団体に入つて仕事をしたり今日のようにお話をしたりする機会があれば私もしたいなと思いまして今の立場があると思います。

先ほど仲尾先生からお話をがありました、昨年の十二月三十一日の夜八時から明け方七時まで、都メツ

セでワンコリアカウントダウン21というイベントをしました。朝鮮総連系の朝鮮青年同盟および留学生同盟、それと韓国青年同盟、韓国学生同盟と我々民団系の韓国青年会の五団体が、初めてこのように一万人規模を動員するようなイベントをしました。誤解があるかも知れませんが、実はこのイベント自身のこうしていこうという方向性が出たのは一九九九年の四月頃で、当時の五団体の長などが集まり二十世紀に向けて我々同胞団体が何を示していくのかというような話し合いをしました。今回、二十世紀の総括と二十一世紀に向けてどのように我々が提示できるのかということでワンコリアカウントダウンというイベントをしようではないかということになりました。

確かに昨年の六月十三日から十五日までピョンヤンで行われました南北首脳会談以後、ムード的にも統一ということが我々の団体でも語られるようになりましたし、押し上げムードを作ったのは事実ですが、それよりも京都ではさきがけ的に約二年前からこのような話し合いが行われてきました。例えばうちの青年会で言えば中央本部からは組織決定として反対というか、こういうイベントはしないでくれと正式申し入れに来ました。それは例えばどここの団体が入るからとかそういう昔のこと、いまだにしがらみがありすぎて乗り越えられなかつたのですが、しかし京都ではもうそのようなことはなしということで、五団体が手に手を取り合ってこのイベントの実行委員会に参加することになりました。

今考えたら大変面白いことなのですが、例えば今日ここにチョチヨンの委員長も来ておられます、朝チヨチヨンの委員長に会って、昼に留学同の委員長に会って、晩に五団体の実行委員会をする、一日三回他団体の人とそのような会合を持つということは今まででしたら異常です。まず交わることがありませんでした。そういうことがなかつた中でこのイベントを通じて私自身が感じたことは、いわゆる民団とか総連とか韓統連とかいろいろな団体がありますが、その団体が本当に我々在日同胞の権益とか声を実直に伝えられる団体であるのかということです。在日団体の看板を背負っていますけれども、本当

にそのような看板を背負えるほど今、声を反映できているのかと、本当に組織だけの組織であって、一般的の同胞の方々の声を本当に聞けるような団体になっているのかということで、そのような話もしていました。我々の組織でしたら、例えば個人資格で私が参加することも可能だったのですがやはりそうではなくて、いろいろな反対やあたたかい激励もありました。あたたかい罵倒とかもね。が、やはり私たちが京都から何をしていこうかとなつた時に、そのようなしながらみを飛び越えていくのが我々若者の役目ではないかと。次にその飛び越えた所で議論がおきる、これも大事なことなのですね。今までは議論さえも起きなかつたのですから、本当に議論のキャッチボールができる場を作つていけたことも大変意義があつたと思います。このイベントをする前は敵性団体ということになつていますからうがつた見方をしていた部分もあつたのですが、イベントを通じて見れる部分もありますし、イベントをしたことによつて今まで見えていなかつた問題点とか、乗り越えていかなければならぬ問題点とかがいっぱい出てきましたので、このイベントは本当に意義が大きかつたと思います。

また、いつもは在日同胞団体がイベントをしたら同胞の方だけが参加されるのですが、このイベントはそうではなくて多くの日本の方に参加していただきました。後援団体には京都府、京都市およびこちらの京都市国際交流協会も参加していただきましたし、本当に京都市民、京都府民の多くの方のご協力があつて成功することができました。

今度、この実行委員会を発展させていくために四月には京都コリアン青年学生協議会というのを立ち上げて、これからも皆さんと一緒にどのような問題があるのかということを話し合つていく場を作つていただきたいと思つております。どうもありがとうございました。

司会 洪さん、どうもありがとうございました。大変大胆、率直に今の問題点も投げかけていただい

て本当にありがとうございました。では続いて岡村夏枝さん、お願ひします。



岡村夏枝氏

岡村 はじめまして、岡村なつえと申します。去年の『チョゴリときもの』では私は皆さんいらっしゃる席に座って在日の高校生の話を聞いていた立場で、一年後まさか自分がここでお話ををする立場になるとは思っていなかつたのですけれど、このような機会を与えていただいて本当に嬉しく思います。

自分が在日であることを考え出してからまだ一年くらいしかたっていないので、整理できていない思いがいっぱいありますが聞いてください。

今、私は京都市立芸術大学大学院一回生で染織を勉強しています。生まれたのは大阪府東大阪市で、幼稚園まではそこにいたのですが、幼稚園から小学校、中学校、高校と大阪の八尾市で生活していました。そこには比較的在日の方が多かつたので、自分が在日であることはごくごく自然に受け止められていて、特に親もそんなに意識していなかつたと思います。在日らしくしなさいとか、そのようなことを言われたことは一度もありませんでしたが、いつしか自分が他人と違うところを持つていてるなということは知らず知らずのうちに感じていて、自分が在日なのだということは生活の中で何となく感じることができました。

そういう環境で育ち、小学校でもまわりの友達にとって在日がいる環境がけつこう普通のことだったので、友達も私を特別視する感覚はなく育ちました。ですから小学校三年生の道徳の時間に隣の国の人を勉強しようという時間があり、韓国の生活様式や言葉を少し勉強したことがあったのですが、そ

ういう時には家にあるチマチヨゴリを持っていて皆の前で見せたり、それを自分ではけっこう得意気な感じて見せていたように思います。友達もそれを見ていいな、きれいだなという感じで言ってくれていたので、いいやろうという感じで話をしていたのを覚えています。ですからその頃は自分の中では在日であることをマイナスイメージとして受け止めていなかつたのだと思います。まわりの友達もそうだったと思います。

でも小学校高学年になって在日の就職差別や結婚差別についての実態をテーマにしたビデオなどを見せられるのですが、その時に私はすごく嫌な気分になつたことを覚えています。なぜ嫌な気分になつたのかなと考へると、今まで自分が在日であるということは他人と違う点であつたとしても何も特別なことではないと思っていたのに、そういうふうに特別なものあつかいされて、さらにそれがマイナスイメージなんだよというふうに言われている気がして、ビデオを見たあとに感想を書きなさいと言わたった時に、すごく嫌な気分で書けなかつたのを覚えていました。そういうことはあったのですが、友達とは毎日樂しく生活していました。

中学校に入つて自分が在日であることでおこつた問題としては、卒業証書の問題がありました。小学校の卒業証書は、卒業証書を作る時に先生に本名で書くのか通名で書くのかということを聞かれるのですが、私は四人兄妹で上に兄が二人いて本名で卒業証書に名前を書いていたので、私もそういうものなのだと思つて卒業証書は本名で、という感じで書いていました。中学校もそういうノリで卒業証書は本名でと言うと先生が、じゃ、あなたはこれから本名で生活するのねと言われたのです。そんな気は全くなくて、自分で本名は特別な時に使うものという感覚があつたので、いや別にそういうつもりはないので、そう言われるのだったら通名で書いてくださいと言つた記憶があります。

高校の時には、自分が在日であるということはごく自然な形で伝えられていたのではないかなと思い

ます。ただ自分が在日であるということを特別にカミングアウトするわけではなかったので、友達とそれについて話をすることとはなかったのですが、うちのお母さんの作るキムチはおいしいねん、といふような話はしていました。それを友達が食べに来たりとか、そういうふうにはしていました。そういう感じで日々暮らしていたので、自分が在日であることはどういうことなのかということはあまり考えずに暮らしていく大学に入ったわけです。

先ほども申しましたように私は芸大に通って制作活動をしています。初めはものを作るのが好きで芸大に入ったのですが、その頃はできるものに満足していて自分がどういうものを作っていくのかということはあまり考えずに、できた、楽しいという感じで考えていました。ものをどんどん作っていくうちにそれだけでは物足りなくなつて、ものを作ることで人にメッセージが伝えられるようなこと、自分はこれからどういうものを作つて行きたいのか、どうしたいのかということを考え出しました。その頃に自分についてもつと知ろうと思いました。自分というのはいろんな要素でできています、女性である自分とか、二十歳そこそこである自分とかいろいろあるのですが、今まで考えてみなかつた自分を作つていれる要素を考えてみようと思いました。それで自分が在日であるということがどういうことなのかをテーマに制作を始めました。

そういうふうにして、自分が在日であるということと向き合つて最初にできた作品がこちらの赤い作品なのですが、タイトルは『あるマイノリティーに捧げる婚礼服』です。自分が在日であることを考え出した時にいつも苦しくなることは、自分が韓国人なのか日本人なのかということで、どちらかに属さなければならぬ、自分はどちらなのかという二つの選択肢の中で考え方として、それを考へれば考えるほどとても不自然に思えてきました。結局それは韓国人、日本人というマジョリティーの考え方で、マイノリティーである在日の考え方はどこにもないなと思った時に、どちらかである必要はない、在日

というマイノリティーとして存在していればいいんだとすごく気分が楽になりました。私は染織をやつていて民族衣装などがとても好きなのですが、民族衣装というのはその民族の生き方や考え方反映されたもので、では在日のための民族衣装があつてもいいのではないかと思いこの作品を作りました。これを作ったのはちょうど一年前で、その問題について考え始めたところだったので、とりあえず気のままに作つた感じです。この作品は着物地でできていて、東寺さんで古着の着物をたくさん売っているのですが、そういう所に行くのがとても好きで、そこでかき集めてきました。そこで買った着物の古着をつなぎ合わせてパッチワークにし、その上に自分で刺繡をほどこしてチマチョゴリ、ハンボックの結婚衣装のスタイルをもつてきて作りました。これは卒業制作だったのですが先生にも評価されて賞をいただきました。

これを作った後にまだまだ自分の中で整理されていない思いがいっぱいあり、それが名前の問題でした。在日として生きていてあなたは韓国人なの、日本人なのと聞かれているという思いにさせられる時があるのですが、そのような思いをする時は書類に自分の名前を書く時です。特別な書類を書く時には本名で書かなければいけないのかなと考えたり、通名でいいのかなと考えたり、親に聞いたらしながら名前を書いていました。書く度にどちらの名前をつかうのか、いつかは自分で答えを出さなければならないのだろうなと思いながら名前を書いていました。私の本名はオウナツエでオウというのは吳と書くのですが、その吳という名前は私のお祖父さんの時代に創氏改名で強要された名前であり、強要されたという事実がお祖父さんにあって、その名前を使うべきなのかも知れないのですが、私はずっと岡村夏枝で生きてきて岡村夏枝もとても大事にしたいという思いがあります。ですから、どちらかを選ばなければならぬとなると、私の中ではとても大事なものを捨てなければならないという感覚になります。私はそれがすごく嫌でどちらかを選ぶ必要はないのではないかと思え、たとえば創氏改名で名前を強要

された在日一世の歴史があるように、在日三世としては生まれてから通名があつて普段はそれを使うというリアルさと、特別な時に本名を使うというリアルさがあるので、それはそのものとして存在しているではないかと今は思っています。それで今まで使ってきた岡村夏枝という名前とパスポートなどでは呉夏枝という名前を使うようにしています。ですから結局呉という名は自分のルーツになるものなので大切にしたいし、でも岡村夏枝として生きてきた今までのことも大切にしたいという両方の思いがあります。

そういうことを考えて作った作品がこの上の作品です。これは白い薄いオーガンジーの生地でチマチョゴリを作つて、チョゴリの方には家系図をプリントしてあります。韓国では家系図があり代々引き継がれていきます。何百年も前のものが自分の家にあってそれを見た時、おー、これはすごいとゾツと思いました。何百年も受け継がれるものが今の時代にあるのだと思い、それをモチーフに何か作つてみたいと思ってそれをプリントしました。よく見ると代々の名前が書かれているのですがその上に自分で刺繡をほどこして作りました。ですから名前に関しては今はそういうふうに思っています。

それが去年の春頃でしたが、まだまだ自分の中で韓国に対する思いがあつたので、去年の夏にこちらの交流協会の企画で韓国ホームステイの旅というのに参加しました。それまでに二回ほど観光で韓国に行つたことがありましたが、行つて帰るたびに、ああ自分はやはり日本人だと思って帰つて来ました。しかしそのまま帰つた後は自分は在日韓国人なのだなということを実感できました。というのは、今までは日本という国は自分が生活をしているからリアルで日本人という感覚があつたけれど、韓国には観光で行つて向こうの人と密に接して生活をすることがなかつたので、韓国という国がリアルに思えなくて自分は日本人なのだと思っていたのだと思います。ホームステイを行つた時に向こうの人と生活したり話したりすると、あつ、自分のルーツがここにあるのだということが実感できました。そ

ういうふうに思えた時に自分が在日であるということが改めてリアルに実感できて、日本人でもない韓国人でもない在日なのだということに自信を持てました。ホームステイに行くことでそういう思いをすることができました。

どうして在日はこんなに悩まなくてはいけないのか、もちろん在日でなくともそれぞれに悩みがあると思うのですが、アイデンティティの問題でなぜこんなに悩まなくてはならないのかと考えた時、次にきた作品がこの水玉のチョゴリです。水玉模様のチョゴリに、前には宝石箱をイメージした箱に写真が張つてあります、私が生まれた時に母に抱かれている写真を張つてあります。自分で韓国人である、在日であるということをマイナーなイメージとして受け止めており、やはり人には言えないタブーなことだと何となく自分で感じていて、でもマイナーな部分というのは誰でも持つていてると思います。しかしそれを隠したがるというか、マジヨリティー的な考え方はどうしても依りたいと思うのだと思います。しかし私はそういうマイナーな部分というのは隠されがちですが誰でも持っているものではないかと思います。自分の中でマイナーな在日であるという部分と、例えば赤ちゃんとしてこの世の中に生まれるという誰でも経験することを並べて提示できたら面白いかなと思ってこの作品を作りました。この作品を作り終わつた後、次にどういうものを作っていくのかということはまだ考えられていません。自分の中で自分が在日であるというのはどういうことなのかと考える上で一番大事にしたいことは、私のお祖父さんお祖母さんお父さんお母さんがしてきた思い、歴史であつたり思いであつたり痕跡であつたり、そういうものをしっかりと私達が受け止めたい、私が受け止めたいと思っています。自分でそのことを引きずつしていくのではなくて、お祖父さん達が経験してきたこと、思つてきたことを受け止めて次に自分達がさらに何かできればいいなというふうに今は考えています。

これから自分がどういう立場をとつてこの問題とつき合っていくかというのはまだ答えが出でていない

のですが、今の時点ではそういうふうに思っています。

仲尾 ありがとうございました。今までこのフォーラムが始まってから数十名の在日の方々に登場していただきました。けれども通称名、日本名でレポートしてくれた方は初めてです。とは言っても、このフォーラムに登場していただいた方の中でもここでは本名ですが、日常の生活では実は通称名、日本名を使っていらっしゃる方も少なからずありました。そういう点で通称名、日本名で登場していただいだのは本当に初めてなのです。そういうことも含めて皆さん方、お二人といろいろ語り合いたいというお気持ちが多いと思います。直接語り合っていただく時間がとれませんので、いつものようにお配りしてあります質問用紙にお一人おひとりそれぞれに、あるいはお二人共通でもいいですからお尋ねになりたいこと、語り合いたいことを感想を含めて書いていただきます。それを後で整理回収してお二人に答えていただくと、このようにしたいと思います。

こちらの正面に張ってあるのは、行かれた方もたくさんいらっしゃると思いますけれども、洪さんが関わられたカウントダウンの写真です。休憩時間の間に岡村さんの作品を含めて近くでよくご覧ください。

司会 ありがとうございました。先生がおっしゃったように皆さんのお手元にご質問、ご意見用紙がございますのでそれにお書きください。この箱を前の方に置いておきますので休憩の間にこちらに入れておいてください。休憩の間に整理をしまして第二部では質疑応答に移りたいと思います。三時十分くらいに始めたいと思います。よろしくお願ひします。

第一部

質疑応答

司会 大変お待たせしました。皆さんからたくさんのご質問、ご意見をいただきましてちょっと時間がかかりました。申し訳ございません。それでは皆さんからいただきましたご意見、ご質問用紙を基にして質疑応答に移りたいと思います。よろしくお願ひします。

仲尾 それでは始めます。全部で十三件、十三人の方々からご意見どん質問をいただきました。今は感想が大変多かったように思いますので全部読ませていただきます。

まずお一人目。

一、「若じお二人の率直で堂々としたお話を伺えて本当に嬉しく深い感銘と感動と新しい勇気をもらいました。本当にありがとうございました。十二月三十一日のカウンントダウンに参加したかったのですが果たせず残念に思っていましたが、今日、写真の数々を見せていただいてありがたいでした。在日の方々が在日であるからとか日本人であるからではなく、個々人として堂々と生きていってくだされるようなこの京都、日本でありうるよう私たともまた前に向かって努力を続けたいと切に願っています。今後ともよろしくお願ひいたします。」

これがお一人目の感想文です。その次、二人目の方、洪さんへの質問。

一、「お父さんが在日一世、お母さんが日本人だということですが、現在の国籍はどちらの国の国籍

なのでしょうか。国籍法のことをあまり詳しく知らないので申し訳ないのですが、洪さんの場合、ある年令に達したら自動的に父方の、つまり韓国籍を取得したことになるのでしょうか。もし二つを選べる状況だったのなら、なぜ今の国籍を選んだのかお聞かせください。」

洪さんにお答えいただく前に国籍法のことを簡単に申し上げますと、今の日本の国籍法は父または母が日本人であれば子どもは日本国籍になることになっております。つまり父母両系主義で、かつては父がという限定でしたが、現在では父または母ということになっております。満二十歳になって二十二歳までの間に、どちらかの国籍を放棄しどちらかの国籍を選ぶという選択権が与えられているということになります。前置きはそれくらいにして、あと洪さん、お答えください。

洪 私はずっと韓国籍のままでし、選ぶ時も韓国人であると言つ意識がありましたので今も韓国籍です。

仲尾 洪さんの場合は出生、お生まれになった時にご両親のお話し合いで韓国籍を取得するという選択をされたわけですね。そういう場合は、お母さんが日本人であっても韓国籍を取るということは可能なのです。それからお二人へ。

三、「選挙権の話なのですがもしその権利があれば投票に行かれますか。あと二重国籍制度で選挙権を得ると、現在審議中の法案、永住外国人への地方参政権付与法案とでは感情の面ではどう違うのでしょうか。ぜひお聞かせください。」

こういう質問です。お二人にそれぞれ答えていただきますが、この二重国籍制度で選挙権を得るとい

うのは、現在日本はそういう二重国籍をできるだけ排除しようというので先ほどのようになつてあります。もし二重国籍制度、両方の国籍を二十歳の時に持てるということであればどうかと、こういうご意見というかご質問だと思います。それから現在審議中の法案は日本国籍でなくとも外国籍であつても住民として地方参政権を付与するという案ですね。その二通りについてのご意見をお聞かせください」ということなので洪さん、岡村さんそれぞれご意見をお聞かせください。

洪 まず地方参政権の問題で、先の臨時国会でも審議されたのですが今、与党三党の中でプロジェクトチームができまして、外国人に対する地方参政権を与える代わりに日本国籍を取得するための要件を簡素化するというとんでもない代案が出てきています。その中の一つ、試案として三つあったのですが、永住外国人、特別永住者に限ってサンフランシスコ講和条約以前に戻して強制的に日本国籍を与えるということなのですが、そのようなことは全くの暴挙でありますし、永住、定住外国人の地方参政権の問題も日本の眞の国際化をめざすためにある法案だと思います。今は在日イコール韓国、朝鮮人になっていて、確かに我々在日韓国人が統計の数字上では一番多いのですが、今後それがイコールでなくなる時も十分考えられるでしょうし、これは戦後補償の問題とゴチャゴチャになって考えるのではなくて、本当の意味での外国人政策、および日本の眞の国際化のために必要な法案だと私は思います。

仲尾 ありがとうございました。今、洪さんが最初に言われたのは、永住外国人に対する地方参政権付与に対する反対意見が国会の中でもあって、それは日本国籍をとつたらしいのだというところから帰化の方法を簡素化しようという案が現在出てきているわけですね。それに対する洪さんのご意見でありました。それでは岡村さん。

岡村 選挙権のことに関して私は実はあまり深く考えたことがないのですが、国籍という考え方自体がマジョリティ的な考え方で、在日のことは考えていない考え方だなどは常々思っております。もし自分に選挙権があればきっと選挙には行っていると思います。そんな感じでいいでしょうか。

仲尾 はい、ありがとうございました。

それではその次、三人目の方。これは感想ですが読み上げます。

四、「現在ハングルを勉強しています。南北統一の機運もありキム大統領のノーベル賞もあり、日本では韓国、朝鮮に関心を持つ人が増えたようですが、日本人として在日の人を受けた傷をどのように受け止め考えていけばいいのか、何をしたらいいのか考えてしまつこともしばしばです。在日を大声で話してください。」

こういうご感想です。その次いきます。

五、「[...]のような機会は初めてなので在日の方がどんなことを思われているのかわからないという感じです。お話を伺つてきちんと議論ができることが大切なのかと思いました。こういうのはもっと一般の人も気軽に話せるような機会がある方がいいのではと思います。」

確かにその通りです。それでこの国際交流協会ではこれで八回目ですか、毎年続けております。毎回このようにたくさん来ていただいているのですが、もっと言っておられるようなことを続けるためにもこの企画が毎年素晴らしいものであることを期待いたします。

その次の方、最初は感想あと質問です。

六、「私は田頃、人を血でわけたり（血統ですね）土地でわけたり（国）して認識する」と、また型にはまって行動すること（なになにらしくという）をとてもおぞましいことと思っています。民族といふことについても自分自身の民族性など考えたくない感じです。しかし日本人の親を持ち日本で育ち文化的な環境の中で日本人である」とはもちろん否定できませんが、（これは）自分のことをおっしゃっているわけですね）自分の中ではなんら積極的意義を持つものでもありません。（カッコ気持ち悪いと書いています）その意味では血統や国籍やという」とよりも、自分がなにでありたいか、どう生きていきたいかという選択肢として民族性があることは積極的に認め受け入れられます。だから岡村さんの話はすこくよくわかりました。」

以上がご感想です。次は洪さんへの質問。

七、「一方」については考え方からは南北統一云々と在日コリアンの方々の生き方が結びつき、一喜一憂するというのはあまり理解できません。洪さん詳しく教えてください。」
お願いします。

洪 今ご質問があつたのですが、いわゆる戦争の傷痕というのですか、今本国の朝鮮半島の中で三十八度線にわかれているのですが、戦争中に避難された方で離散家族といわれている方が約一千万人おられると言られています。そのような離散家族という現状は在日同胞の中でも存在します。例えば同じ家族の中でもある方は総連を支持し、ある方は韓国系の民団を支持するなど、日本の中でもそのような悲

しい三十八度線は実際に今でもあります。そのようなことを考えて、すぐ結びつかないと思うのですがやはり南北が統一されるのを望むのは我々在日同胞が持っている気持ちだと私は思います。

仲尾 ありがとうございました。ではその次です。六人目の方。

八、「在日韓国人の中にも南北朝鮮の壁があつたとは知らなかつた。（これは今、洪さんがおっしゃったことで、実はあつたのだということを教えていただきました）二つの祖国アイデンティティを持つことができてうらやましいと思う。それぞれの立場での考え方、もの」との捉え方ができると思うから（これがうらやましいということの理由であるようです）。通称名、本名、どちらを用いるかは本人の意志で決めてよいと思う。両方ともその人個人につけられたものであり、どちらを用いるか強制されるべきものではない。もし子どもができたら事実を伝えてほしい。洪さんのような思いをしないでよいように。」

と、こういうことがあります。本当に洪さんも大変なショックだったと思います。私もかつて聞いた青年ですが外国人登録の時点で親からお前は実は韓国人だと言われた、その時にその青年、男の人ですが、これはやばい民族に生まれたぞと思つたそうです。今でもその言葉を覚えているんです。で、どうしようか。まず絶対喧嘩に強くなつておかなくてはやばいと。満十五歳で中三の時ですがとにかく喧嘩をどんどんやりだして、気がついたら学校一のワルになつていたと、そのうちに他の学校へも出かけていってガラスを割りに行つたとかね、そういう話をされた方がありました。これは本当にショックだったでしょうね。親との気持ちがずれてしまつていてことと、日本で日本国籍を持つていない韓国人、朝鮮人であるということがどういうことが子ども心にわかっていたから、よけいそういうショッ

クを受けられたのでしょうかね。そういうことを今日洪さんのお話を伺いながら私もあらためて思い出しました。その次。

九、「我々も差別偏見を捨てるように努力しないといけない」と
これは日本人としてという意味でしうね。

十、「国籍問題、参政権問題について感じられることがあれば教えてください。」

こういうことです、これは先ほどの洪さん、岡村さんのお話の中でほぼ出ているのではないかと思しますし、また後から追加があればお一人、おっしゃってください。七人目の方。

十一、「岡村夏枝さんへ。一年前まで在日としての問題を考えられたことがあまりなかったようなお話をでしたが、洪さんが十六歳の外国人登録時に韓国人としての自分に初めて出会われたようには、岡村さんにとつて外国人登録は問題にならなかつたのでしょうか。そのような仕事に携わっている時期、いつも聞いてみたい話してみたいと思ってできませんでしたから。」

ということで、外国人登録のことをどのように受け止められたかという質問です。よろしく。

岡村 私の話なのですが、そうすることが当たり前と思っていたので特に何の不思議もなく、十六歳になつたら市役所に行かなければならぬと思っていました。だからその時はそれが何を意味しているのか、どういう意味を持っているのか考えていくくて、その頃は在日は特別なものと思わされていたので、特別なものだから特別なことをしなければいけないというふうに自分の中で思っていたのだと思ひ

ます。今ではおかしいことだとは思いますが、その頃はそう思っていました。

仲尾　はい、ありがとうございました。ちょっと付け加えますと、ご存じの方がが多いと思いますが、日本国籍を持っている場合は生まれた時に住民基本台帳法に基づいて住民登録を親がします。そして住民として認知されたわけですからそこからいろいろな権利が発生しているわけですね。例えば予防注射の案内、就学通知、あるいは選挙権、あるいは老人福祉のさまざまな課題、これらは全部住民登録からきてるわけです。外国籍の方は外国人登録をしなければならない。ところがこの外国人登録法というのは、外国人の公正な管理に資することを目的とする、という条項があります。外国人管理のための法律であって、外国人の権利に直接にはつながりません。ですから日本人が住民登録から得ているような権利は本来、外国人登録から出てこないのですね。むしろ義務としてあるわけです。義務として登録しなければならない、義務として家族関係あるいは身分に変更があれば一々届けなければならない。届け出るだけではなくて、それは昨年改正はされましたけれど、勤務場所、勤務先の住所まで一々登録しなければならないということになります。だから途中転職したらその度にしなければならなかつたというものなのですね。これは昨年の法改正でなくなりましたけれど、それでもまず常時携帯義務があります。お二人今おそらく持っているらっしゃると思うのですが、写真を張りつけてラミネートカードでプリントしたものですが、それをいつも持つていなければいけない。これを持たなければ、今回特別永住者については刑事罰を外されましたが、重い行政罰です。昨年までは刑事罰、つまり前科一犯ということになるわけですね。そういうことがありました。現在でも外国人登録証を持っていない、つまり不携帯であれば、それは刑事罰からは外されて行政罰ですが、もし警察官などに見せると言われて提示義務を拒否したらやはり刑事罰なのです。だから結局は同じことなのですね。そういうことからもわかるようにこ

れはあくまでも外国人の管理のための法律であります。それから八人目の方へいきましょう。

十二、「お二人へ。私には私の今の自分を作ってきた要素があり、それは自分から切り離そうとしても切り離せません。お二人にとって在日であるということはそういうことなのだと思います。そのことを自然に出せればいいし、それを妨げることがあれば私たちの戦いが、大層な言い方ですが、それが始まるのでしょうね。

洪さんへ。意見が違っていた在日の仲間が会つて議論をおこすことが大事といつ」とに賛成します。そこ今までどんなことを議論し始めたいと思われますか。ワンコリアカウンタダウンの次は何をしたいと思われていますか。」

この二点の質問です。

洪 まだ民団も総連も本国の影響が多少なりとも強いと思うのですが、やはりそうではなくて反対に我々在日から本国政府に何を発していくのかとか、日本だけでなく全世界に何を発していくのかとか、そういう話を今しております。

次にどういうことをしていきたいかという話ですが、たとえば去年の十月十六日に京都府知事および京都市長あてに民族教育および民族学校の処遇改善の件で五団体共同で要望書を出しました。このような動きをまた五団体でしていきたいと思っております。また先ほどお話ししましたように、四月には京都コリアン青年学生協議会を立ち上げてここで年一回、二回、在日だけでなくここに来ておられるような日本の方たちも一緒に集まつていただきフォーラムとかを作つていきたいと思つております。

仲尾 ありがとうございました。それではその次へいきます。まず私への質問です。

十三、「在日韓国朝鮮の人が帰化する場合、韓国朝鮮名で日本国籍を取れますか。取れない場合どのような環境条件を満たして取れますか。」

帰化の条件です。これも国籍法で規定されていることで、まず国籍法はどういう場合に帰化を認めるかということですが、結論としていいますと法務大臣の裁量によるのです。ですからこういう条件があれば帰化できますよということではなくて、全て法務大臣が最終的に判定するということになります。そこで一応の基準として挙げられているのは、まず素行善良であるということです。素行善良であるといふのは刑事罰を一回でも受けていたら駄目だということなのでしょうけれども、たとえば交通違反で何べんひっかかるか、スピード違反を何回やったかとか、あるいは中学高校の頃つっぱっていて停学処分をくらったとか、タバコを吸って停学処分をくらったとか、そういうことだつて素行善良であるのかないのか、どこに基準を置いたらいいかわからないでしょう。それは全部法務大臣が決めることになっているのです。それがまず第一ですね。それから安定した収入と資産があること。これについては貯金通帳から登記簿からなにから全部調べあげるそうです。そして勤務先にも聞き合わせをする、「近所へも聞き合わせをする、そういうかつてのお見合いどころではない大変な人権侵害を伴うのが現在の帰化にあたつての条件の調査方法なのです。それで全部終わると日本国憲法を守り日本政府を暴力で転覆しないという宣誓をさせられるということがあります。私は帰化をした何人にも聞いていますが、最後の宣誓の儀式が一番屈辱的だったというように言われておりました。

先ほども話が出ましたが、今そういう厳しい帰化条件を旧植民地の出身者、つまり朝鮮、台湾出身者については届け出制にするとか、帰化条件をやさしくしようという動きが出ています。これは先ほど

も言いましたように地方参政権付与の問題に絡んで出てきているのですね。そういうことを提案している本人は悪気がないのです。実は今年の一月に洪さんの属しておられる民団の新年祝賀会がありましてそこに私も招かれて行きました。そしたら自民党の野中前幹事長が来ていまして、彼は今選挙権の問題について引き続いて頑張るけれども、それと同時にそれと切り離して、今のような帰化制度は大変問題があり人権侵害をおこしているのでこれは何とかしなければいけないと思う、ということを言つていました。だから彼は善意のつもりなのです。しかし在日の方々の立場に立てば、先ほど洪さんが言つていらつしゃったように、これはとんでもない話だという受け止め方がむしろ支配的なのではないかと思います。洪さん、そう考えていいですか。

それから日本名の問題ですがかつては帰化するのだから、日本人になるのだから全てを日本人らしくするのは当たり前だということから日本名を条件にしていました。ところが一九八一年に難民条約が批准されまして、ベトナムからの定住者を受け入れることになりました。ベトナムの人は日本で住むことがわかつていますから、中にはもう日本国籍を取りたい、帰化するという人が出てきたのです。ところがその時、法務省は日本人らしくしるということを言つたのです。韓国朝鮮籍、台湾籍の方は戦争中の創氏改名がありますから通称名をすでに持つておられる、そしてそれを使うということにわだかまりを感じていなさい方もいらつしゃる。ところがベトナムの人にはそんなものがないでしょう。ファンさんとかいう人が何で山本や鈴木、仲尾という名前をつけなければいけないのか。これは文化的にも繋がりがないのですね。そういうことでベトナム人が裁判をおこされて、やっとベトナムの名前のままでカタカナで表記するということが通ったのです。それから韓国朝鮮籍の方でかつて何らかの事情で家族ともども帰化をした、その時に日本名になってしまった、けれども後から考えたらこれはどうもおかしい、そうしたくない、やはり自分の名前というものが自分の民族性を明らかにする大きな要素だというお考え

の人があって、法務省へ行ったり区役所へ行ったりしたけれどもそれは駄目だと言う。それで裁判をおこされました。大阪の定時制高校の教員をしておられるチャン・ヨンイさんという方、それからもう一人は京都の南区でマダン音楽の先生をしておられるパク・シルさんという方が裁判をされて勝ったのですね。それでやっと日本名を強制することは間違いだという判例が出ました。けれども全てのケースでそう言っているわけでもなさそうなのですね。しかし一応判例上はそういうものが定着したというのが現状です。そういう点で言えばボクシングの日本名、通称名で言えば徳山さん、本名はあなたと同じ洪さんだそうですね。マスコミもほとんどの新聞は彼は朝鮮籍であるとは書いていますが、本人が徳山という名前でいっているのでしょうか、徳山という形でいっていますね。ですからスポーツ界、芸能界でも引き続きそういう問題はあります。

それからその次は洪さんへの質問です。

十四、「日本国が在日韓国朝鮮の人との間に謝罪と補償問題で解決された場合、日本国籍を与えた場合、日本国籍を拒否しますか。」

この場合は謝罪と補償問題が一応解決した場合という仮定の話ですが、その次、日本国籍を与えた場合というのは、日本の法律によつて韓国朝鮮籍の方々の国籍を日本国籍に変えてしまうということだと思います。そのように仮に解釈したとして、洪さん、いかがですかという質問です。

洪 パスポートには天皇家の菊のシンボルが入っているので、そのようなものは持ちたくないですし心地的に今の韓国籍のままでいたいので日本国籍は拒否します。

仲尾　はい。これについてはこういうことがあると思うのです。まず一九〇〇年の韓国併合の後、朝鮮半島に住んでいた人は一斉に大日本帝国臣民と一方的に国籍を変えられたわけです。そして戦後の一九五二年のサンフランシスコ講和条約発効の時に法務省は通達を出して、旧植民地出身者は全て日本国籍を喪失するものとする。これは本人の意向を聞かないで一方的に大日本帝国臣民であったという事実も含めて否定したわけですね。ある意味ではまた国籍を奪ったわけです。今度また与えるということになると、三度目の一方的なことによって国籍が変えられるということになります。それに対する拒否という意味でおっしゃったのではないかと思います。そう解釈していいでどうか。

それではその次岡村さんに。

十五、「日本で生まれ育ち日本語を語り教育を受けて日本で就職し日本に永住する場合、文化的には日本人だと思いますが日本国籍を取るうつと思いませんか。仮に日本国籍を有した場合、韓国朝鮮文化をどのように形で守り育てていけばよいのでしょうか。」

これも国籍の問題に関わっていますね。よろしくお願ひします。

岡村　今はまだそういう思いません。日本国籍を取ることが便宜上は便利なかも知れませんが、そういうことだけで取ろうとは思いません。私の父親の兄弟は父以外は皆日本籍を取っているのですが、自分の両親は韓国籍を取っています。父はずっといろんな思いを持ちながらも韓国籍を持っていて、それはきっと自分の思いと私のお祖父さんであるお父さんのお父さんの思いもあってそうして来ているのだ話を聞きました。その話を聞いた時に私もそれに賛同したというか、やはり自分のお祖父さんが思つて来た思い、そういうものを私も受け止めたい。私が今できること、やりたいことはそのお祖父さんお

祖母さん達の思いを受け止めることで、日本国籍を取るのではなく韓国籍であることがそういうことかなと思っているので、今はまだ韓国籍のままでいようと思っています。でもこれからは自分の生き方も関わってくると思うのでまだわからないですけれど、今はそう思っています。

仲尾 後半の質問ですが、もし仮に日本国籍を取った場合文化はどのような形で伝わるのでしょうか。

岡村 多分、文化というものは人が必要としているものは残っていくだらうし、必要としていなければすたれていくものだと思います。ですから必要なものであれば残す人は絶対いると思います。私が韓国に興味を持ち出したのは国籍の問題もありますが、布とか染物とか刺繡などの染織が好きで韓国の刺繡やチマチョゴリにとても魅かれました。それらもやはり韓国に関心を持ち出したことについて多大な影響を与えていました。ですからそういう人間がいれば多分ずっと受け継がれていくと思うし、例えば日本人でもタイが好きであればタイの民族衣装や文化などを生活に取り入れ、そうして残していくのだと思います。ですから日本人になったから韓国の文化を捨てられるのかというわけではないと思うし、日本人でも韓国の文化が素晴らしいと思えば残していくべきだと思います。また韓国人でもタイの文化が素晴らしいと思えば韓国人がタイの文化を残していくべきだと、そういうふうに思っています。

仲尾 岡村さんはそういう意味では韓国の文化が素晴らしいと思い、これを守り育てよう、続けようということがほぼ決まったわけですね。

岡村 はい、自分の中ではそう思っています。

仲尾 というご感想です。次、十人目の方は感想ですね。

十六、「初めて」のようなフォーラムに参加しました。今まで一世、二世の問題を聞く機会はありませんが、あまりにも重すぎでどうすればとか、どのように話しかけていけばいいのかわかりませんでした。でも最近いろんな所でチョゴリを見かけるようになりました。成人式、卒業式、電車の中、とても素敵だと思います。チョゴリを着て町を歩くことはある意味でとても勇気のいることだと思います。だからかも知れないけれど羨ましさまで感じることもあります。今日のお二人の話を聞いて全く正反対の幼少期を過ごされたのだと思いました。先祖に韓国人の人を持ちながらも自分たちが生まれた所が日本だったために、自分史をひもといていくうちに歴史の重さを実感されていったのでしょうか。通称と本名といふ二つの名前の端境で心の葛藤が大きいように感じました。洪さんは自分を知ることにより本名に拘りだしたよう見えるし、岡村さんは本名を特別なものと感じ儀礼的なものと捉えているように見えました。これから四世、五世と続くなかで自分らしく前向きに明るく生きる」とによって祖国が一つしかない私たち、それも島国（日本人のことですね）、を羨ましがらせてほしいと思います。」

こういふ感想です。次は十一人目の方、洪さんへの質問です。

十七、「五団体が一緒になつて話し合われたそつだが会議の過程で意見の隔たりはどうであつたか、またそれを乗り越えるための一致点は何であつたのか教えてほしい。どんな考え方の一致点を生んだのか。」まず、洪さんからお願ひします。

洪 例えは先ほどお話に出ました参政権の問題でしたら、五団体ありますて我々の団体は賛成だけれど他の団体は反対であるとか、個別のこととを挙げていったらなかなか一致点を見出せない所もいろいろあります。ただ二十世紀は植民地の世紀であり分断の世紀であった、それを総括するために我々青年団体が先駆者として発するためには何をしていくかとなつた時に、やはりこのような議論をする場をまず持つていこうと。そこで初めて我々がどのように思つてゐるか、相手の団体がどのような考え方を持つているかということが出できました。途中ちょっととの中断はあったものの、約二年間の過程を経て四月に協議会を立ち上げることになりましたが、このようなことは京都だけではなく他の各地方でもおこつていいほしいと思います。

仲尾 はい、ありがとうございました。つまり意見の異なりはさておいて、一致できる所から協力しようということになりつつあるということですね。

次は同じ方で岡村さんへの質問です。

十八、「韓国にホームステイして自分のルーツはここにある、と感じたと言われましたがどういつ場面で特にそう感じられたのか教えてほしい。」

岡村 そのホームステイに参加したのは二〇名の女性で、私ともう一人を除いては皆日本人の方でした。向こうで韓国の方と接する時、日本人の友達が感じられないものを私はリアルさをもって感じることができる瞬間があつたことと、抽象的な言い方かも知れませんが、韓国の人も自分が在日だと言うとなにがしか親しみを感じていていう態度をとつてくれていました。私を日本人として扱つていたけ

れど在日の同胞として見てくれて、やはり日本人の友達よりも何か親しみを感じてくれているのを何となく感じました。六十歳半ばのコウさんという一人暮らしの女性のお宅にホームステイをさせていただけたのですが、私は自分のお祖母さんに接するような感じでコウさんに接したのですね。それは自分の中では尊敬の意味などを込めた礼儀でしたし、私は他人と楽に話ができる人間なので、向こうにしてみれば多分受け入れやすいタイプだったと思うのですが、それ以上に私のことを受け入れてくれていると生活している間に感じたのですね。どういうところでそう感じたかというと、私の態度や礼儀がお祖母さんが思っている以上に自分にしつくりきているのだろうなと私が感じることができ、知らず知らずのうちに私は韓国の礼儀や態度が身についていたのだなと感じ、ここに私のルーツがあるのかも知れないなど感じたのです。そのお祖母さんは私のことをとても気に入ってくれました。在日であってそういうものを持っていることと、いろんな話をしたので私個人のことも気に入ってくれたということもあると思います。そういう生活をする中で自分の礼儀や態度が向こうに通じるもののがなにがしかあるのだなと実感できました。

仲尾　たいへん良い話ですね。貴方が自分で意識しないでも、ちょっととした身振りとか生活習慣の中で韓国人だということが失われていないうことですね。ぜひ、将来子どもさんができたら伝えてください。

岡村　はい。

仲尾　この方はもう一つ意見もあります。

十九、「昨年二ヵ月間、ソウルでホームステイしながら韓国語を学びました。言葉と文化を学ぶ」と
によつてよりいつそう韓国に親しみを覚えました。日本に戻つてからも韓国語の学習を続けていますが、
語学塾に通う在日の人達とも交流の機会があり嬉しく思つています。」

「こういう」感想があります。十二番目の方、本名と通名について。

二十、「私は日本人ですがいつも感じるのは岡村さんが語られた名前の問題です。少しだけ学習しましたので創氏改名のことは理解できるのですが、戦後五十年以上過ぎ、日本の状況も大きく変わつてい
るのでもうこのあたりで本名に統一されではいかがかと思うのですが、日本の制度の中でこれを制約す
るもののが何があるのですか。仲尾先生にお尋ねします。」

こういう質問です。

創氏改名のことは皆さんもうご存じのように、一九四一年に日本人らしい名前をつけろと総督府が命
令を出して、それも一定期限のうちに変えなければならぬということがありました。ですから例えば
キム・デジュン大統領も日本名があつたはずです。今、日本国籍を持つておられない韓国朝鮮籍の方々
は、日本名をつけろという強制はありません。ただこういう現実があります。外国人登録をする時に本
名の下にカッコ書きで、通称名があれば一つだけ、それも簡単には書いてはいけないのですが一つだけ
書くことができる、ということになつてゐるようです。それで通称名で生活している方はそこにカッコ
書きで書くということになります。

こういう例もあるのです。私の大学の職員で在日の女性でしたが、お父さんが仕事の関係でやむなく
通称名を使っておられてお父さんの登録証には本名と通称名が両方あつた。彼女は本名だけでいってい

たので、切り替えの時に通称名を使うつもりはなくてそこに何も書かずに帰つて来た。一、三日して手続きが完了したので取りに行つた時、自分の知らない通称名が書いてあつたというのですね。それはなぜかというとお父さんの通称名がこうだということを区役所の人は知つてゐるわけです。ですからこれは書き忘れたと思って書いてあげたと。彼女は私が名乗りたくない通称名を勝手に役所の人が書いてしまつたと今でもカンカンに怒つています。これは行政の方にお願いしたいのですが、そういう問題ではないのですね。本人が通称名でいこう、あるいは名乗つてあるという場合になされるのであって、決してカッコ書きに必ず通称名を書かなければならぬということはどこにもありません。

そうは言つても、こういうこともあるのです。通称名でなければ仕事が出来ない、就職出来ないといふ強制がまず働いています。貴方は在日だけれども採用する、ただし会社の中では日本名でいってくれとあります。そしてアパートやマンションを借りる時に、表札は日本名にしてくれという所が少なくありません。そういう日本名を強要するという同化の強要があるのです。

それから行政関係についてもいえます。例えば健康保険証、これは本人の身分を明らかにする大変大切なものです。あれは通称名でいいのです。ですから病院でパクさんとか洪さん、キムさんというような呼び出しはあまり聞かれたことがないでしょう。健康保険証が通称名でいっているからそんなるのですね。それからまだあります。印鑑登録は通称名でいいのです。商業登記、不動産の登記もそれでいいのです。ですからそこまで通称名でいけるならば通称名にしてしまえ、面倒臭い、あるいはそれこそ、そこまでいくんだったらもう帰化しようと、こういう人が出てくるのもやむを得ないです。そういう暗黙の同化を強要する行政上の要因も存在していることも確かなのです。

このような通称名があるというのは本当に世界中どこにもないでしょう。フジモリ前大統領を考えください。民族名、日本名できていますね。アメリカの三世、四世の日系の人も皆そうです。ペルーや

ブラジルから今日本に働きに来ておられるたくさんの方々、全部本名ですよね。そういう点では通称名というものは本当に妙な制度なのですね。世界にまれな制度だと思います。そういう日本社会の現実がある、それが反映しているということがあると思います。

それからその次、学校について。

二十一、「京都市では朝鮮学校、韓国学校がありますが、在日の方は日本の小中高校と朝鮮韓国学校とどちらでも入学の選択が出来るのですか。」

という質問です。

これは出来ます。外国籍の方は義務教育ではありませんから就学通知は行きません。ただし就学案内というものが行きます。これは外国人登録簿を引っ張り出してそこから教育委員会がそれぞれの地域ごとに学校へ伝達して就学案内が来ます。これは案内ですから義務ではないのです。ですから小学校の段階で、朝鮮学校あるいは韓国学校の小学部へ行くという選択が出来るのです。ただし現実は八割の人々が日本の小中高校へ進学しています。これは民族学校が財政的に非常に大変だというのが一番大きな原因です。このことにつきましては二回目のフォーラムで韓国学校、朝鮮学校の先生方に来ていただいて子ども達に何を教えるかということをお話しいただきますので、その時にこの朝鮮学校、韓国学校の現況、並びに子ども達への思い、子ども達がどういうことを感じているかということを直接お聞きできると思いますので、今日の説明はここまでで止めさせていただきます。

最後、十三人目の方はご感想です。

二十二、「今日初めて参加しました。小学生の我が子に在日としての悪い拘りを持たずに成長していく

てほしい。そのためには背景をきちんと知ることが必要だと感じ、娘達のためである」ことが私自身にも繋がっていきます。大変勉強になりました。残り三回を休むことなく出席したいと思います。ありがとうございました。」

「こういうご感想です。

以上で十三人の方々のご感想並びにご質問を終わります。少し時間が超過しましたけれども、大変熱心なご質問並びに素晴らしい感想をお寄せくださいましてありがとうございました。

司会 ありがとうございました。今、皆さんその後にこういう冊子が置いてあります。一つは国際交流ホームステイ感想文集、もう一つはワンコリアカウントダウン²¹、これは先ほど洪さんがおっしゃっていたカウントダウンの内容ですね。もう一つ、韓国ホームステイ感想文集は、岡村夏枝さんが表紙をデザインしたものです。

次回のご案内ですが、次回は本日のようなパネルディスカッションではなくて演劇を企画しております。在日の三世、四世の大学生の方々が直接シナリオを作つて『在日を生きるとは』というテーマで演劇を用意しております。第二回目の演劇にもぜひ来ていただきますようによろしくお願ひします。本日はこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。

第二回 『在日を生きるとは』——演劇

パネリスト

金光志氏

(在日三世・大学生)

愛純氏

(在日三世・大学生)

（京都造形芸術大学教授）

コーディネーター

仲尾

宏氏

二〇〇一年三月一日実施



第一回『在日を生きるとは』——演劇

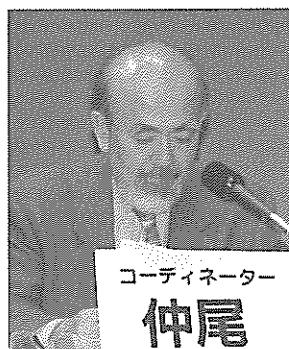
第一部

観劇

司会 間もなく開演いたします。ホワイエの皆様はお席にお着きください。

第一部

質疑応答



コーディネーター

仲尾

仲尾 宏氏

仲尾 皆さんこんには。この『チヨゴリときもの』のフォーラムで毎回コーディネーターを務めさせていただいている仲尾宏です。

今日はいつもと変わった、しかも素晴らしい経験を皆さんにしていただいたと思います。つまり今の在日の問題を在日の若者がどのように思っているのか、先ほど聞きますと出演された方で日本人は一人もない。京都市内の大学の学生、立命館大学、同志社大学、京都産業大学の学生の皆さん自分が自分でシナリオを考え、自分達で演技をしてくれました。ですからその中には日頃のいろんな思いが典型的に入っていたり、あるいは周りの日本人が在日をどのように見ているのか、そういうことを含めて演劇として取りあげていただきました。それに対しても皆さんが大変多くの感想をいただいております。質問やご意見めいたものもありますが、そ

ういったものをこれから全部皆さんにご披露させていただきます。会場の皆さん方、今日のキャストの方々を含めて、こういう意見があるのだということを知つていただけたら、先ほどのドラマを見た感想がより深まるのではないかと思います。今日、出演していただいた方からお一人に代表して出ていただいて、少し感想を述べていただこうと思います。

最初に自己紹介をしていただこうと思います。金愛純（キム・エスン）さんからお願いします。

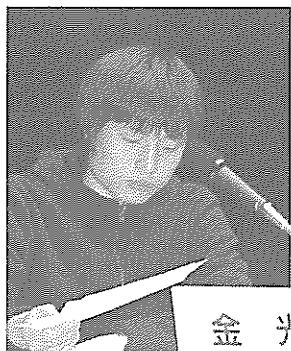
愛純 金愛純と申します。私は立命館大学経済学部の二回生です。普段は学校に行っている他に、今日劇と一緒にした人と在日についての歴史とか朝鮮語を勉強したりしています。

仲尾 はい、ありがとうございます。では金光志（キム・クアンジ）さん。

光志 金光志です。京都産業大学の法学部で今年三回生になります。愛純さんと同じで今日一緒に劇をした方々と団体に行っています。

仲尾 はい、ありがとうございました。今回は質問は少なくて感想をたくさん寄せていただきました。まずその感想を全部読ませていただきます。一番。

一、「立派な劇、」と苦労さまでした。若い皆様の主張がよく伝わり



金 光志氏



愛純氏

金 愛 純

金

愛

純

愛純 金愛純と申します。私は立命館大学経済学部の二回生です。

普段は学校に行っている他に、今日劇と一緒にした人と在日についての歴史とか朝鮮語を勉強したりしています。

仲尾 はい、ありがとうございます。では金光志（キム・クアンジ）さん。

光志 金光志です。京都産業大学の法学部で今年三回生になります。愛純さんと同じで今日一緒に劇をした方々と団体に行っています。

仲尾 はい、ありがとうございました。今回は質問は少なくて感想をたくさん寄せていただきました。まずその感想を全部読ませていただきます。一番。

一、「立派な劇、」と苦労さまでした。若い皆様の主張がよく伝わり

ました。私は五十路に入つておりますが前世紀の不幸な両国関係を辛く思います。大学生の皆様がさまざまな問題を抱えながらも、発刺と生きておられる様子に敬意を表します。ちなみに娘はキムスエの大学院生とお付き合いをしております。とても優れた方です。淡路・神戸震災では在日の大きな働きが報じられましたし、先般のイ・スピヨンさんにお世話をになりました。ワールドカップを仲良く開催してください。今日はありがとうございます。」

次二番目の方。

一、「何を書けば良いのか、何から書けば良いのか。自分に対するテーマなのか、自分に対する答えなのか。何をわかつたのか、何をわからなかつたのか。日本人で何か、在日で何か。いろいろ考えさせられました。いろいろな考えがまとまりず、何時まとまるのかもわからない。生きている間中、ずっと考えていても答えは出ないのかも。一瞬、一瞬で答えが違う。なぜか、人間だからか。」

こういう自問自答のご感想が入つております。これはそれぞれの一句、一句について日本人も在日の方も考える問題が多数含まれていると私は思いました。次、三人目の方。

三、「劇については素人の方々であるけれど、毎日自ら問わずといられない題材を舞台で上演されて、その思いをきちんと受け止めたいたいと思いました。国籍と人権という大きな難しいことをもう一度自分なりに整理する必要があると思うのですが、なかなか難しい作業で簡単にはいきません。ただどこの国籍でもどこの国で生まれ暮らしていても、その人の可能性、人権を最大限保障することが大切だと思つのです。極端に言えば国籍がなぜ必要なのか、もしかしたら国籍という考え方自体が要らないものなのではないかと思われます。ともあれ世界中が国として分割して営まれている現状であれば、国益、民族の存

在意思、人権、それ等の兼ね合いを自分の目、耳で確かめ変えていくことが大切だと思います。引き続
いて勉強していきたいと思いました。」

こういう感想です。この人は国籍ということをどう考えたらいいのか、なぜ必要なのか、国籍がひょ
とすると要らないのではないかというようなことをおっしゃっていますが、お二人、この辺りはどうで
しょう。一言で言うのは難しいかも知れませんが、国籍ということをどのようにお感じになっているの
かちょっと感想を言っていただきましょうか。愛純さんから。

愛純　国籍がなぜ必要なのかということは普段から感じることですけれど、やはり自分が悩んでいる
ものが国籍とかそういうものに還元しているなと思うと、ちょっとわからないのですけれど複雑な問題
だと思います。

仲尾　はい。光志さん、いかがですか。

光志　僕は韓国籍なのですが、国籍のことを考えると長所も短所もあるのだろうと思うのです。僕か
ら見ると国籍は短所ばかりがよく見えます。劇の中でもあったように参政権がないとか、公務就任権と
いう公務員になれないというようなことがあって、必要ないとは言えないですが国籍があつて自分が生
きづらい状況にあるのだつたら必要ないと思うのですけれど。

仲尾　はい、ありがとうございました。国籍で悩まなければいけない、国籍が短所になる、これは日
本国籍を持っている日本人であればおよそ考えられないことですね。そういうことを考えなければなら

ない人達が日本の中にいらっしゃるということの重さ、私はこの人のご感想からあらためてそれを考えました。どうか皆さんもそのことを少しお考へいただけたらと思います。

その次へまいります。

四、「まず本日の演劇について、若い学生さんのセリフ等、實に素晴らしいものでした。私にも釜山に友人がおります。自宅にも家族全員で来られました。日本人に忘れられた素晴らしいマナーに感心しました。個々には非常に仲が良いのに、民族とか國家になるとなかなか難しいものが現実にあります。しかしあなた方のような若い学生さんが中心になってやっていけば、韓国朝鮮だけでなく全ての民族が仲良くなる日も遠くはないかと思います。そういう意味で今後ともいかなる苦難があつても頑張っていただきたい。日本人の中にもあなた方に共鳴する人はたくさんいることを忘れないでください。」

こういう激励の言葉が入っております。ここでは全ての民族が仲良くなる日も遠くはないというふうに希望を持つておられますし、私もそう思います。しかし民族が違うということは、いろんな日常生活のレベル、あるいはアイデンティティと申しますが自分の立っているところを考えると、そう簡単ではないのですね。仲良くしているように見えても時にはいろんな意味で摩擦があるということはあり得ます。例えば旧ユーゴスラビアの中の民族紛争もそうですね。お隣に昨日まで暮らしていた人が民族が違うというだけであのような悲劇に発展することもあり得ますので、そのようなことにならないためにもわかり合うということの大切さをあらためて教えられた気がします。

五、「手作りの演劇ありがとうございました。頭だけ、表面だけでこの問題を捉えるのではなく、自分自身の問題として自分に結びつけて考えていかなくては根本の解決にはならない、ということがよく

わかりました。また新聞発表等の表向きのことだけではなく、このようなフォーラム等で真の、そして生の声を聞いていくことの重要性を感じました。これからも頑張ってください。」
「これも激励です。次の方。

六、「この社会が民主主義というならば国も自治体も人々がより幸せに過ごすための道具です。その目的のために皆でルール、法律、条例を作り、その目的のために限定的に一部の権利が制限されることもあります。しかしこの社会は民主主義ではないようです。国は道具ではなく、最初に国があつて人々の一部は例えば国籍を理由として排除されます。国籍が必要であるとすればそれは単に社会に参加するための便宜的なものにすぎないはずなのに、現実には国籍はそれ以上の排外的な意味を持つていると思います。最近の反動的な動きは恐ろしい。国籍に排外的な意味が本当になくなるならば、外国のようないままでの国籍を取得したある民族、例えば日系人といふことも考えられるけれど、それは今はまだです。」

こういうご感想が来ております。これは先ほど国籍という問題について問題提起された方と、先ほどのお二人のご感想に重ね合わせて考えるべきかと思いました。次の方。

七、「演劇を専門にされている方々ではないということですが、舞台の構成といい演技といい、なかなか見せるものになっていたと感心しました。」
「という大変なお誉めの言葉をいただいております。

八、「今日はありがとうございました。私は今、韓国語の勉強をしている五十歳の主婦です。今まで

韓国朝鮮の方々のことをよく知りませんでしたが、何かとこのような機会があれば出席させていただいている。そして韓国朝鮮の文化に触れる勉強をいたしております。そのことがお互いの理解を深めることになると思います。会社員の私ですが、周りの人たちは私がこのようなことに歩き回っていることを顔を歪めて嫌がります。まだまだ根強いところがあります。韓国へ一人で旅行に行って歴史の勉強をして本当に良かったと思います。ユ・グワーンサンの勇氣ある行動に日本人として拍手を送ります。」

このユ・グワーンサンというのは一九一九年に日本の植民地支配下に入った後、九年目にして独立運動が起きました。三月一日、昨日ですね。三・一独立運動と申しますけれども、百万人の人々が独立万歳と叫んで、朝鮮半島全土で平和的なデモ行進や集会をやりました。それに対し総督府は軍隊と警察でもって弾圧し数千の人々が犠牲になりました。ユ・グワーンサンさんという人はまだ十六歳の少女だったのですけれども、その独立万歳というマンセー、マンセーという独立宣言文をもって行動に立ち上がった人です。捕らえられて虐殺されましたけれども、韓国でも北朝鮮でも朝鮮民族のジャンヌ・ダルクとして今でも語り伝えられている人であります。

それから次の方。

九、「人権とは生きる勇気の葛藤か」と思います。私は寝る前にいつも祖国を思い出します。朝が来ます。一日の無事を願い、生活と自分と社会の人々との出会いを楽しく考えます。仕事を終えて心の痛みなどと涙をこぼします。でも幸福を考え直します。仕事と言葉が通じ合うところがあります。日本の中でも同じではない。世界の人々が日本国には……？」（応援していますかな？ 支援していますかな？ ちょっとわかりません。）国家と行政のあり方はその国の同権と思うし、人権の面では絶対にピラまさ、主張しものを言える自分達をつくり、アピールの声を大きくし、堂々と国際結婚

して明るく焦らず心を強くして頑張ってください。日本政治、自民党、偏見は終わりますからね。」
「これも若い世代への激励の言葉で、在日の方からのお便りだと思います。

十、「自分がこれまで感じた」とや、自分はない他の人々の感じ方をありのまま演じ表現していく
さつて勉強になりました。自分が在日韓国人として生まれ、あまりにも知らないことが多いのでこれから
もつといろんなことを知りたいと思います。その第一歩として始めているのはウリマル（私たちの言
葉ですね）を勉強しています。今の気持ちは変わるかも知れませんが、まず人間として生ある限りどう
あるべきか、自分らしさを失わずに人種にとらわれず人類レベルで考えられる人、そのような人間にな
ることを目指して交遊関係を築いていきたいと思います。」

これも在日の方のご感想です。これから後はご感想、ご意見めいたものが入り交じってありますので、
お二人にご意見をいただきながら進めたいと思います。

十一、「大変良くできました。面白かったです。最近僕は、韓国人らしく日本人から尊敬されるよう
に生きなさいとある人から言われました。（これを書いていたいている方は在日の方ですね）その人
はその人で悪気があって言っているのではないでしきょうが、尊敬される韓国人にならなければ世の中
を変えられない」と大変だと思ひます。納得がいきません。僕もこれから悩み続けます。皆んな頑
張ってチユセヨ。（頑張ってくださいということですね）」

こういう感想が来ているのですが、金愛純さん、あなたはこのようない経験があつたかなかつたかわから
りませんが、もしあなただがこのような言葉を一世、あるいは一世の方から投げられたらどのように思
ますか。

愛純 尊敬されるように生きなさいというか、私の親が小さい頃にお医者さんとか弁護士になつて欲しいというようなことをいつも言つっていました。ここにも書いてあるように、自分の親としては尊敬される韓国人というか、偉い人にならなかつたら世の中を変えられないんだという気持ちがとても強かつたと思います。私は小さい時からそれは変、納得がいかないというか、韓国人だからお医者さんや弁護士にならなければいけないというのがとても大きかったし、この人の気持ちがものすごくわかります。

仲尾 そうですね。私もこんなことを聞いたことがあります。京都市の公務員になられた在日の方です。初めて現業部門に就職されました。すると日本人の上司が、あなたは初めての韓国人だから頑張ってくださいよ、ということを折りあるごとに言われたというのですね。そうすると何か自分は特別に周りの人よりも頑張らなくてはいけないのか、周りの日本人よりも特別に頑張らなくてはいけないのかといふような気持ちがして非常に辛かったです、ということを率直に言われたことがあります。そういうことを含めて光志さん、どうですか。

光志 書いてもらつた方とは違うのですが、僕もお祖母ちゃんとかには韓国人なのだから日本人より勉強を頑張らなければいけない、というようなことをよく言わされました。でも韓国人だから何々しなさいというのは、やはりおかしいなというのは小さい頃から思つていました。昔、仲尾先生が言われた方のような経験がありました。大学に入つて初めてアルバイトをしたのですが、その時は民族名でそのバイト先に行っていました。その時お皿を割つてしまつて怒られた時に、僕個人が怒られたのではなくて在日朝鮮人のキム君が失敗した、という印象を受けるような怒られ方をしました。一般的の、いわゆる日

本人が仕事やアルバイトで失敗するのと、僕達が失敗するのとでは何か違うようなという経験が過去にありました。

仲尾 やはり辛かったです。いろんなご感想の中にも頑張ってくださいと心から応援してくださいつている方、あるいは善意でそういう書いていただいている方もあるし、それはそれで率直に受け止められると思うんです。でも韓国人だからよけい頑張りなさいというのはやはり辛いですね。仕事でも勉強でもあるいはスポーツでも、自分なりに頑張らなくてはと思っているのは良い。けれども、ともかくも頑張りなさいと言わると、それが特別のプレッシャーでないにしても、そのように思われることが普通の我々の体験で日常的にあると思うのですね。それを韓国人だから朝鮮人だから在日だからよけい頑張らなくてはいけないということになると、今お二人が言われたような感想もあると思うのです。そういう点で韓国人だという民族の違いが頑張らねばならないという義務になつてしまふと、ちょっとこれは変ですよね。だから言う人が日本人であつても在日であつても、そのように感じてしまうのかも知れません。そういう点でやはりこれはマジヨリティーである日本人がほとんど気が付いていない問題かとも思います。それから在日の方でも一世の方々、あるいは二世の方々の今までのいろんな苦難の歴史を考えれば、子どもや孫にうんと頑張って欲しいという率直な気持ちがあること、これも間違いないですけれどね。それが韓国人だからよけい頑張らなくてはいけないということになると、やはりプレッシャーだという、そういう二人のご感想だと思います。そういうことによろしいですか。では次にいきます。

十二、「大変良く出来た劇で感動しました。皆さんに再度拍手を送りたい気持ちです。私は公務員で

すが今後、地元の方々の前でも発表していただければよいと思っていますが、そのような予定は考えておられますか。」

「ということです。これはお二人が決められることではないと思いますが、お気持ちをそれぞれ一言ずつおっしゃってください。

愛純　このように劇にして普段思っていることを主張し表現出来ることはとてもありがたいと思うので、皆と話しあってこういうことをやっていけたらいいなと思ってています。

仲尾　今日の催しがあるということでこのドラマを構成し出演していただいたわけですが、この取り組みの経過、どうしてこのようなことが出来たのか、その中の問題も含めて、金光志さん、少しお話し下さい。

光志　この劇は今日の国際交流会館の発表のために作成したのではなくて、去年の十一月頃に僕たちの団体で文化祭があった時にした劇を基本にして、悪かった所を変えたりもつと楽器を入れよう等とパワーアップして出来たのが今回の劇です。先ほどのアンケートに答えますと、今回ここで出来たのもいつも僕等が思っていることを主張するとても良い機会でしたし、いろんな所から声を掛けられればしたいのですが、予定が合えばという感じがします。

仲尾　はい、ありがとうございました。そういうことだそうです。せっかくこういう素晴らしい構成がまとまっていますから、引き続きいろんな所で上演したり、あるいはまた筋立てを少し改良して良い

ものを続けてください。だからやはり伝えていくことが大事ですね。皆さん方の後輩にもどんどん呼びかけて続くようにしていただければいいなと、私も思います。

次の方のご感想を読みます。

十三、「一時、日本が朝鮮を支配していた事実があることからそれが頭に残つており、日本人より社会的に下でなくてはならないと思つてゐる部分があるのではないか。」

これが第一番目のご感想です。これはよく言われることであります。私が聞いたかなり年配のある日本人がこんなことを言つておられました。その方はもう七十歳代の方です。ですから戦前の在日の人々の暮らしがどんなものだったか、あるいはどういう関わりだったのかという少年時代、青年時代の記憶がある方ですね。戦争前あるいは戦争中には朝鮮人は非常に小さくなっていたのに、四五年八月十五日を境にして急に威張り出した、という表現をその方はしておられました。でもそれは威張り出したというよりは普通に対等ということで、とにかく戦後のあの一時期、日本人も含めて日本社会に住んでいる者は皆大変な時代に生きていた。その中で在日の人たちが同じように一生懸命生きておられた。その姿が何か急に威張ってしまったという印象を受けておられました。そういう印象はやはり今の七十歳以上の方には少なからずあると思うのですね。例えば石原都知事の三国人発言もそのような背景があるかと思います。私も石原知事よりは多少若いですけれど、昔のことを考えてみるとこんな情景がありました。あの頃、つまり四五年から四八、九年頃にかけて戦後の混乱期でした。在日の方は四五年に二百三十万人おられました。そのうちの三分の二、百三十万人ないし四十万人がすぐさま帰国されました。これは当然のことですね。強制的に連行されてきたような方々も一九四〇年代以降數十万人おられましたから、とるものもとりあえず帰ろう、ということで帰られました。ところがまだ子どもが小さいとか病人がい

るとか年寄りがいるとか、そういう家庭の事情で少し先を見てみようとか、あるいは帰るにも持ち出しお金の額が制限されている、交通事情が大変混乱していて下関まで行き着けない、行つたけれども船がないので帰つて来たというような方も含めて、約六十万人が一九四六年、戦後の丸一年目の時に残つておられました。調査によりますと、その方々全員もいすれ近いうちに帰るという意志を持っておられました。ところがその後帰られなくなつて一世、二世、三世と世代を重ねて来ておられるのが今日の在日の方々であります。

もう少しあなたに延ばしてという方々は生活をどうするか、それまでは例えば京都の近くで言いますとウトロの軍用飛行場、京都軍用飛行場で働いておられました。八月十五日を境にして会社も日本人も一人もいなくなつた。そのまま飯場で生活を続けざるを得ないということになつたのですね。仕事はない、家族を食わせられない。そこで屑拾いをしたりあるいは荷車引きをしたり馬車引きをしたり古物商をしたりして、自分達の口に入る毎日のお米だけでもとりあえず何とか稼がなければいけないということになりました。それから闇市というのがありました。闇といふのはあらゆる物資が配給統制經濟のもとでお米は一日二合一斤と決められておりそれではとても足りませんので、農家へ買い出しに行ってそれを持つて帰つて闇市場で売るということです。こういうことを日本人も朝鮮人もやらざるを得なくてやつておりました。そういう闇をしないで餓死してしまつた東京地裁の判事もいたくらいなのですね。そういう時代でありますから、在日の人達もあととあらゆる出来る仕事をやって何とか命を繋いで、そして古い飯場を修理しながら住まいを見つけるという生活を続けておられました。その時、在日の人々に對してマスコミや政府はどういう扱いをしていましたか。まず占領軍総司令部は旧植民地出身者、台湾朝鮮半島出身者は解放された国民であると、これはボツダム宣言ではつきりそうたわれておりますが、独立を与えるべきであるということでありました。一方でその人たちは旧敵国民である、つまり大日

本帝国の臣民であったと、そういう両義性を持つという定義づけをしたのです。それを日本のマスコミが第三国人という表現で取り上げました。それが政治家の中にも入っていった。そして代議士の国会発言の中でも第三国人だというような発言が出てきました。それはどういう意味合いで言われたのかといふと、吉田茂という戦後の第一代の、厳密には第一代ではないですが、戦後政治を長い間取り仕切った総理大臣がおります。彼が朝鮮人は日本にはいる、一刻も早く全員強制送還すべきだというようなことをマッカーサー司令部に言いに行っていることすら残っております。そういう時代に、第三国人という言葉が決してプラスイメージではなくてマイナスイメージ、つまり日本に残っていたら困る、邪魔者だという意味合いで言われていたわけですね。石原さんは私より三つくらい上ですから、敗戦の時は国民学校六年生か中学校一年生だったと思うのですがそういう雰囲気をよく知っているわけです。そういう意味で、後で弁解していましたけれど、第三国人という発言は明らかに彼の頭の中では外国人一般ではなくて在日であると、かつての在日の姿が脳裏に焼きついているのであんな発言が出たのではないかと思います。それがこの方のご意見にほぼピッタリ合うのではないかと思います。つまり同じではない、社会的に下でなくてはならないと思っている部分があるのではないか。それは今、申し上げましたような日本人の発言や石原さんの発言の中に出てくると私も思います。この方のおっしゃっている中でもう一つの問題があると思います。

十四、「最近確かに不良外国人が目立つが、日本に長い間住んでおり、日本社会に溶け込んでいる朝鮮人と同一レベルで見ることとは不適である。」

こういうご指摘です。このご質問の中に二つの意味があると思うのです。まず、最近確かに不良外国人が目立つということですが、皆さんもテレビや新聞報道で外国人の犯罪を時々見たり聞いたりされま

すね。一時、外国人の報道が非常に増えたという報道もありました。ところが厳密に統計を追って日本人の犯罪率と日本に住んでいる外国人の犯罪率を比べると、外国人の犯罪率が高いということはない。ただ、今外国人登録をしている人だけで百五十五万人です。十年前の一九九〇年には百万人でした。ですから十年間に登録外国人だけをとっても五十%増えています。その比率に応じて外国人の犯罪が増えていることは確かですが、警察庁の発表によりましても統計上日本人よりもパーセンテージが高いということは一つもありません。ただ最近の問題としては、いわゆるニューカマーといわれる人々、つまりアジア、南米から来た人々がおります。そういう人々は言葉の問題、習慣の問題でいっぺんに外国人だとわかるわけですね。ですから強盗に入った、どうも外国人らしい、それは言葉でわかるわけです。かたことの外国語をしゃべっていた、昨日の東京の事件でもそのようなことが報じられていましたが、それはわかつてしまふわけです。それをマスコミがそのまま報道しますから、あー、また外国人が強盗をしたと、そこの部分がとりわけ目立つてしまふわけですね。それは仕方のないことかも知れませんが、先ほど申しましたように今、外国人の犯罪が日本人より特別に増えているということではありません。ある南米から来た日系人が言つておりましたが、私は南米から来た、日系人だ、日本人の血を引いていり、日本に暮らしている間は恥ずかしくない日系人として生きなければならない、そういう気持ちで生きていると。決して日本社会に迷惑をかけるために来たのではないということは百も承知で、それはほとんど皆んな同じ気持ちを持っているのではないかと言つておられました。中にはどうしても犯罪に走ってしまう、あるいは日本の中にも初めからマフィアやヤクザがおりますように、そういう目的で来る人もいないことはないと思いますが、大多数の外国人は不良外国人と呼ばれるような存在ではない、ということを少しこの方に申し上げたいと思います。

もう一つは、「日本に長い間住んでおり、日本社会に溶け込んでいる朝鮮人と同一レベルで論じるべ

きではない」、これは大変善意でおっしゃっていると思うのです。確かに在日の人々は日本社会に溶け込んでおられますけれど、では在日の人々が問題がなくて在日以外の外国人が問題があるのかと考えますと、これはまた一方的な行き過ぎだと思うのですね。日本人の中にも犯罪を犯す人もあれば、在日の中にも犯罪を犯す人もいます。同じようにそれ以外の外国籍の方で犯罪を犯してしまった人もいます。そういう点で、同一レベルで論じることは出来ないということはわからなくはないのですが、その辺りで区分けをされていることに少し抵抗感を感じるのですが、お二人はどうでしょうか。

愛純 昔から住んできた在日朝鮮人とニューカマーの人を区分けする問題について、あまり考えたことがなくてうまい答えが見つからないのですが…。姉が東京に就職が決まって、今週の月曜日に住まいを探しに行って入居拒否をされたのですね。その時に、最近犯罪を犯す外国人が多いのでお断わりしていますというようなことを言われたのです。これは自分の考えがおかしいのかも知れないのですが、違うというところは自分の中に少しあったりしますし、はつきりした答えはないです。

仲尾 ちょっととこれは答えにくいと思いますね。光志さんはどうですか。

光志 ニューカマーの人と僕達オールドカマーというか在日では歴史性が違うというのがあります。人権や権利の面では同等に保障るべきだと思いますけれど、僕たちの歴史性が反映されるよう、権利で区別をつけろというのではなく名称とかでニューカマーとオールドカマーの歴史性がわかるようにはしてもらいたいです。

仲尾　はい、ありがとうございました。問題は二つ程あると思うのですね。一つは在日の方々はもう三世ですから、子々孫々日本に永住されるということがはつきりしているわけです。そして言葉も生まれた時から日本語で育って来ておられる、朝鮮語はあくまで外国語として勉強しなければならないと、こういうことです。永住外国人としての権利をきちんと認めて欲しいということが一つあるわけです。ところが先ほどの入居差別の例ですが、これは区別なしにふりかかって来ます。つまりアパートやマンションに入居しようと思うと、まず住民票を出しなさい、日本人の保証人を探しなさい、大体この二つの条件を不動産屋さんや大家さんは要求します。すると在日韓国朝鮮人の方は外国人登録ですから住民票が出せません。そこでまず壁にぶつかる。さらに日本人の保証人、これも簡単に見つかるようで見つからない。特にニューカマーの人はそうですね。そういうことで権利の侵害ということでは同じようにふりかかって来る。こういう二つの面があると思います。

おそらくお一人ともその辺のところを区分けして言いたかったのかも知れませんね。では最後の方の質問というか感想に入ります。

十五、「演劇は核心をついた寸劇になつていてよく理解出来ました。そしてほとんどは投げかけられた諸問題に同意出来ましたが、外国人の権利制限を全て差別の問題とすることは理解できません。ヨーロッパならばいざ知らず、アジア、とりわけ韓国、朝鮮、中国で外国籍の人と同じ権利を与えているのでしょうか。日本だけが劣っているようには思えません。二十世紀の時代の帰化と二十一世紀の時代の帰化は問題が違うのではないでしょうか。」

こういうご感想です。帰化の問題は少し後におきまして、「アジア、韓国、朝鮮、中国で外国籍の人と同じ権利を与えているのでしょうか」という質問ですが、これは例えば在日の人が日本で地方参政

権を得るという問題について言いますと、韓国ではキム・デジュン政権になつてから韓国に在住する永住外国人については地方参政権を与えるという決定をしております。つまり相互主義ですね。そういう考え方を貫いておられます。ヨーロッパでも実はその相互主義があればいいという問題でもないのです。例えば旧東ドイツ、今のドイツでは外国籍の地方参政権がありまして、東ドイツに在住している日本人が地方議員に立候補したことがあります。日本はドイツ人、旧東ドイツ人に対して地方参政権を与えていたかというとそうではないでしょ。ですから必ずしも相互主義であればいいという問題でもありません。現に北欧諸国やオランダでは外国人の地方参政権を認めておりますが、日本の方はオランダ人やスエーデン人に地方参政権を認めているかというとそうではないですね。ですからその辺りについては歴史的な経緯、あるいは地方自治に対する考え方、あるいは憲法上の規定といろんなものがありますので、ある国でこうだから同じようにという相互主義だけではいけない面もあると思います。さらには例えばアメリカでは永住する人々に対してほとんど無条件で市民権を認めておりますね。市民権の中には当然、国政選挙権を含めた選挙権があるわけです。そういう所と日本のように国籍によって一切の選挙権を認めていないという違いがありますので、これもアジアだけではなくて欧米を含めて一概に言える問題ではないのだと思います。

それから公務員就任権についても同じことが言えます。

私の感想としては、日本が在日を中心とした外国籍の方々について決定的に保障していない権利、あるいは欠けている権利が二つあると思います。

一つは戦後補償ですね。日本の軍隊に入つて軍人、軍属としてあの戦争中に戦場に行つた朝鮮半島、台湾出身の方がたくさん、たくさんおられました。中には亡くなられた方もたくさんおられます。そして戦犯に問われた方もおられます。重い障害を持って帰つて来られた方もおられ

ます。その方々については補償らしい補償が今まで全然されておりませんでした。昨年末の国会でわずかの給付金を出すということがやっと決まりましたが、日本人の軍人、軍属に対して支払われていた恩給法や戦後補償法、十三の法律によって保障されている金額と比べたら微々たるものですね。そういう点でいわゆる従軍慰安婦の方々の問題を含めて戦後補償裁判はまだ続いておりますが、これは決定的に欠けている問題だと思います。

もう一つは本名を名乗る権利が保障されていないということです。名前が二つある、そして本当の名前がそう簡単に使える社会ではないということ。学校でもそうです。子ども達の多くは日本の学校へ行っていますが、本名で通学している子ども達は二割もないと聞いております。お二人は今まで名前の問題についてはどのように過ごして來たでしょうか。

愛純 私は生まれた時から金愛純の名前だけで來ました。

仲尾 そうですか。光志さんはどうですか。

光志 僕は、親が民族とかに積極的な関心がない人として、大学の一年生の時まで日本名の金城コウジの名前で学校に行っていました。今、所属している団体で自分のことを勉強したり在日の歴史等を学んで、大学一年生の時に民族名を名乗ることに決めました。

仲尾 はい。お二人とも経験は違いますけれど、実は大多数の方が金光志さんのような経験のようですね。大学へ入った時点でという方もおられます。ところが就職の時点になるとまた元へ戻らざるを得

ないということも聞いています。これは高卒の場合も同じですけれどね。つまり会社が採用する、けれども会社では日本名でいってくれ、そうしないと社内の融和がとれないというようなことを言う会社が今でもあります。それから本人の方もこれから日本人が大多数の会社に入つて、自分が例えれば本名の金光志でいくということに自信が持てなくなつて来る。だから通称名、日本名があつたのだからそれでいこうかというふうにされる方もあります。つまり本当の名前を名乗れないという雰囲気の社会、これは非常に珍しいと思います。例えば日系人の方々、フジモリ大統領を思い出してください。日本の民族名で大統領になつています。アメリカへ行つてもメキシコへ行つても南米へ行つても、日本名を捨ててスミスとかブッシュという名前に変えなければならなかつたという経験は、日本から出て行つた日系の人々は一人も体験していない、強制されていないと思うのですね。ところが日本社会の中だけで、しかもそれが朝鮮半島や台湾出身者に限つて民族名を通用させることが出来ないと逆に言つた方が良いかも知れません。そういう点で大きな違い、これは法律の問題ではありませんが、そういう社会であると言う認識が一つ必要ではないかと思います。

最後にこの方が言つておられました「二十世紀の時代の帰化と二十一世紀の時代の帰化は問題が違うのではないかでしょか」という質問というか疑問ですが、言っておられる意味が正確にはわかりませんが、これもお二人に帰化についてのお考えをお聞きしようか。光志さんからお願ひします。

光志 僕は国籍は必要ない、国籍で自分が不利益を蒙るようだつたら特に国籍には拘らないと思つてます。僕は大学を卒業した後は消防士をめざしているのですが、日本のほとんどの所では日本国籍がなければ消防士になれない、警察官になれないということがあって、これからどうしようかと悩んでい

るところです。帰化して日本国籍を取得出来たら、出来るかどうかは微妙かも知れませんが、日本国籍を取得したら公務員になりやすくなるのですが、日本国籍になるのは自分の中でもとても不安なところがありますし、国籍に拘っていないうやうで拘っているところもあるのだなど自分で思います。

仲尾 ありがとうございました。ではどうぞ。

愛純 もう一つこの質問の意味がよくわからないのですが、帰化について言うと、うちの家族の中で帰化についての話が時々出たりします。帰化するのが良い悪いではなくて、帰化しないと生きにくいというのがおかしいと私は思います。

仲尾 はい、ありがとうございました。この問題には帰化ということを法律論として考える以前の問題があると思うのですね。つまり今の在日の方々、一九四五年に二百万おられた方々は全て大日本帝国臣民であります。つまり日本国籍があつたわけですね。しかももつとさかのぼりますと一九一〇年の韓国併合以前は当時の大韓帝国の国民であります。それが併合という一方的な事実の前に本人の意志を無視して変えられたことがあります。それから今の方々が日本国籍でなくなつた時期は、一九五二年のサンフランシスコ条約が発効する寸前です。あの時に日本政府は法務局の民事局長通達というのを出してしまって、旧植民地出身者は国籍を喪失するものとするという通達を出したのですね。ですから法律によって決められたものではなく、ただそういう一片の通達で日本国籍がなくなるということをいわば強制されたことがあります。その結果としていろんな国籍条項が出てきました。公務員になれないというだけではなく、市営住宅や公団住宅などの公営住宅に入れないと、融資も受けられない、教育三

法による児童手当でも受けられない、国民年金にも加入できない、そういうさまざまな生活の基本にわたる不利益を生じさせられて来たわけですね。その過程でもし同じ権利が欲しかつたら日本国籍を取つたらしいじゃないかという意見が出て来ました。今もそれはあります。今、地方参政権の問題が国会で審議中でありますけれど、自民党の一部の議員の中から同じような意見が出ています。日本国籍を取れば全部解消するのではないかと。それはそうです。しかし今、帰化の条件は非常に厳しい。これもそうです。手続きが非常にやっかいで時間もかかる。それを簡素化すればいいではないかという意見も出て来ています。けれども今申しましたように日本国籍を与え、奪いという歴史はどうちらの側がやってきたのかというと、今の韓国朝鮮籍、あるいは中国籍の方々が望んでやつてきたのではなくて、結果としていずれも強制されてきたという歴史がありますね。しかもその結果としての不利益を押しつけられている。だから国籍を変えることによって全てが解決するというのは問題のすりかえだという気持ちを当の在日の方々が一様に持つておられるることは確かです。ですから法律論として帰化条件をゆるめたり簡素化したりあるいは時間がかかるないようにする、そういう問題ではないのですね。帰化ということについてそういう問題があるということを、少しお考えいただければありがたいと思います。

それから光志さんが消防士のことを言わされました。今、地方公務員の国籍条項撤廃の動きが非常に多く進んでおります。政令指定都市でも大多数の都市が一般事務職、一般技術職を中心として撤廃に踏み切っています。ただし、劇中にもありましたように制限付きです。管理職になれないとかの制限があります。消防士については神戸市の場合はOKなのですね。ところが京都市はまだ国籍条項撤廃に踏み切っておりません。今、京都市の場合は一般事務職、一般技術職、学校事務職と消防職に国籍条項があります。ですから今ままだと金光志さんは京都市の公務員試験を受験出来ないということになります。もし仮に近い将来撤廃された時に消防職が入っているかどうかはまだわかりません。消防職は何で撤廃の

中に入らないのか、光志さん、どう思いますか。

光志 よくわからないのですが、火事、火災の現場に行った時に、住宅等に入ることが出来るということが法律に触れるということを聞いたことがあるのですが…。

仲尾 はい、その通りなのです。つまり消火にあたっては自分の家ではない他人の私有財産の所に入り込んで消火する必要があります。場合によっては窓ガラスを割ったり扉を叩き壊したり、あるいは大震災になると延焼を防ぐために家そのものを取り壊してしまってやらねばなりません。それは公権力の行使だというのですね。公権力の行使の範囲を巡って解釈の違いがいろいろある。あるいは運用の仕方がさまざまに違っている。ですから同じ政令指定都市という自治体でも神戸市のようにOKしている自治体もあれば、OKではない所もあるのです。そのところが問題なのです。しかし公権力の行使というのは、例えば区役所に行って外国人登録の受け付けをする、あるいは住民登録の受け付けをするというものは京都市長なら京都市長の権限でもって一般の職員が代行しているわけでしょう。ですから公権力の行使なのですね。公権力の行使でない職種というものは一つもない。ただ、今のように強制力を物理的に働くとか、あるいは許可、認可などに直接携わるのは駄目だという解釈をしている自治体が多いわけです。そのところはどのように考えたらいいのか。私の考えを申しますと、これは就職の機会均等ということを考えるならば、出来るだけ受益者の利益に帰すべきである、つまり国籍が違っていても差し支えのない公務であれば、ハンコを押すことであろうと消火作業であろうと、あるいは許認可業務であろうと、公務員になりたいという受益者の希望に応えて門戸を広げるのが良いのではないかと思います。この辺りについてはいろいろご意見もあるかと思いますが、とりあえず現状は

そういうことなのです。

以上でたくさんいただきましたご質問、ご感想を全て読み上げました。皆さん方も、こういう意見の人もあるのかといろんなご感想をお持ちだと思います。このように感想を皆さんにご紹介し、意見の多様性を知っていたらしくということは私も含めて大変有益だと思うのです。つまり手を挙げて発言するというのになかなか勇気も要りますし、時間も十分ではございません。ところがこうしてまとめて書いていただくというのは、書いていただいた方々ご自身も自分の意見を整理できるし、聞く方はこういう意見を持っている方もいらっしゃる、ああ、ああいう見方もあるのだなということで、意見の多様性、考え方の違い、そういうものを知ることが出来るのですね。それがまたその人の一つの事柄に対する思いを深めることにもなるし、知識も深めることになる。意見に対して、反対なら反対の立場をもう一度確認する、賛成に変わったのなら自分の間違いをそこで正すことが出来る、そういういろんな効用があると思うので、全部紹介をさせていただいております。今後もこの形式を続けたいと思いますので、次回以降ご参加いただけの方もぜひともご感想でもご意見でも結構ですからどんどんお寄せください。

少し時間が超過しましたけれど、このお二人をはじめ、演劇を構成そして演出、出演してくださった方々、裏方の方を含めてもう一度感謝の拍手を送りたいと思います。どうもありがとうございました。

司会 ありがとうございました。この連続フォーラム『チョゴリときもの』は皆さんに在日のことをより深く理解していただきために開催しております。本日は初めて演劇というものを取り入れまして皆さんにお見せしましたけれども、皆さんにとっていかがでしたでしょうか。また演劇以外でも皆さんにわかりやすいそして接しやすいものがあれば、毎回コーディネーターをお願いしている仲尾先生にアドバイスをいただきながら、新しい企画に取り組んでいきたいと思っております。

次回の案内をさせていただきます。次回は三月十六日金曜日午後二時から予定しております。『子どもに教えること』というテーマで、京都市内にある朝鮮系の民族学校、そして韓国系の中・高等学校、そして京都市立中学校で教えておられる三人の先生をお招きしまして、学校現場での思いなどについてお話をいただきます。

またのご来場を心よりお待ちしております。どうもありがとうございました。

第三回 『子どもに教えること』

パネリスト

李 明氏
金 愛氏

(京都韓國中高等学校教諭)
(京都朝鮮第一初級学校教諭)

安藤るりこ氏
土岐 文行氏

(京都市立嘉樂中学校教諭)
(京都市立嘉樂中学校教諭)

コーディネーター
仲尾

宏氏

(京都造形芸術大学教授)

11001年3月16日実施

第二回『子どもに教えること』

第一部

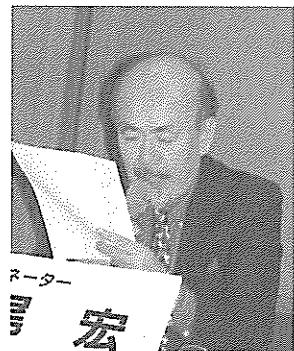
司会 大変お待たせしました。それでは連続フォーラム『チョゴリときもの』の第三回目。『子どもに教えること』について始めたいと思います。本日はいつもよりパネリストの方が多く、四人の方に来ていただいております。それぞれの学校の先生においでいただいて、それぞれの立場についてお話しitたいと思います。それでは本日のパネリストの方をご紹介させていただきます。

まず京都韓国中高等学校から李 明（イ・ミヨン）先生に来ていただいております。続きまして京都朝鮮第一初級学校から全京愛（チヨン・ギヨンエ）先生に来ていただいております。そして京都市立嘉樂中学校から安藤るりこ先生に来ていただいております。同じく京都市立嘉樂中学校から土岐文行先生に来ていただいております。それでは進行の方、同じく仲尾宏先生にコーディネーターをお願いしております。

では先生、よろしくお願ひいたします。

仲尾 皆さんこんにちは。今日は幸いといいますか非常に春らしくなってまいりました。今年のテーマは『統一と和解をめざす祖国——在日は今』ということで、今日の天気のようにこれから朝鮮半島が統一と和解に向けて和やかな日々が続くということを心より期待して、今回のフォーラムに臨みたいと思ひます。

今日、このようにたくさんの方々に来ていただいにはそれなりの理由がございます。ご存じ



仲尾 宏氏

の方も多いと思いますが、京都には韓国学園、朝鮮学園と二つの学校法人である民族学校が所在しております。学校数は実は朝鮮学園の方は複数で多いのですが、ともかく一つの民族学園がある。それから今、約三万六千人の韓国籍または朝鮮籍の方が住んでおられます。そのうちの学齢期の子どもさんの数は、その三万六千という数からご判断いただきましたら相当数の子ども達が小学校、中学校、あるいは高等学校で学んでいるということが想像できると思います。その内の約八割が京都の公立、あるいは私立の学校に進学しているという実情がござります。その原因については、パネリストの方々からなぜそうなったのかということについてのお話もあるかと思います。今、お手元に民族学校関連年表（資料1）を掲げさせていただいております。ちょっとそれをご覧いただけますでしょうか。これは戦後の京都を中心とした民族学校の関連年表で、非常に大きっぽなものですが私なりにまとめてみたものです。

まず四五年、日本の敗戦は植民地出身の方々にとっては解放でした。その後からいはずれは祖国に帰るのだという思いで各地に国語講習所というものができました。この国語はもちろん朝鮮語であります。四六年九月には京都朝鮮人教育会が設立されまして、これが今日の京都韓国学園の母体になります。そして翌年には京都朝鮮中学校、現在の韓国学校が設立され、九月に京都府知事の認可を受けました。

このように順調なすべり出しを見せたかに見える民族学校ですが、四八年、四九年の項目を見ていただくとおわかりのように、アメリカ占領軍はこの民族学校が占領目的に違反する、共産主義教育をする恐れがあるということで強行閉鎖し、約六千人の多数の人々が投獄され軍事裁判で有罪とされるということがおこっております。また大阪では集会の時にキム・テイル君という少年が死亡するという痛まし

民族学校と交渉問題年表（京都を中心に）

西暦年	月	おもな事項
1945	9	解放直後から各地に国語講習所できる。46年に3年制に編成。
46	9	京都朝鮮人教育会設立（京都韓国学園の起源）
47	5	京都朝鮮中学校（現韓国学校）設立、9月に京都府知事認可。
48	1	文部省通達、朝鮮人学校の閉鎖を求める。4月、米占領軍、阪神地区に非常事態宣言、武装警官を慰留して強行閉鎖、大阪で朝鮮人の子死亡、多数の投獄と軍事裁判で有罪。
49	9	朝鮮人連盟等に解散命令、建物等没収。10月閣議決定で朝連系学校を廃校、無認可校には解散または2週間以内の認可申請を要求。大阪の一学園3校のみ認可。
		各地で自主学校存続（44校、京都も）朝鮮人の子は日本の学校に就学義務ありとする
52	4	サンフランシスコ条約発効に伴い朝鮮人の子どもは校長の許可により、日本の学校への就学を認める方針表明、翌年、国内法遵守を条件として義務教育就学を認める。
53	5	京都朝鮮学園、はじめて学校法人として認可される。（第一初級学校はの前身は46年に発足。第2は65年、第3は67年、舞鶴は70年創立）
56	4	東京に朝鮮大学校創立、68年、美濃部知事により各種学校として認可。
58	4	学校法人京都韓国学園設立、京都韓国中学校開校。
62	2	神奈川朝高生、日本人高校生により殺害さる。この間、朝高生に対する暴行、武装警官隊の朝鮮学校乱入事件多発。
63	4	京都韓国高校併設開校。
65	12	文部次官通達「朝鮮人のみを収容する教育施設の取り扱いについて」→各種学校認可う否定。この年、日韓基本条約調印。在日韓国人の25年在留資格を協定で認める。
72	4	大阪市教委、「学校教育指針」にはじめて在日外国人教育の項目を記載。前年から教師たちにより「在日朝鮮人子弟の教育を考える会」結成。83年「全朝教」に発展改組
84	12	大阪で民族教育の保障を求めるシンポ開催→86年民族教育促進協議会に発展改組。
85	3	韓国学園東山区本多山に移転。この間環境問題を理由に日本人の移転反対運動熾烈。
89	10～	「パチンコ疑惑」を契機に朝高生に対する暴行事件多発。98年の「ミサイル」時も。
90	11	京都府高体連、全国大会予選を誰ねない府内総体への朝高の参加を認可。
92	3	京都市教委「京都市立学校外國人教育方針」主として在日韓国・朝鮮人に対する民族差別をなくす教育の推進についてこれにより、市立学校と民族学校の交流が公認される
93	4	朝鮮初級学校の教科書改定、中級部は94年、高級部は95年から新教科書使用。
94	4～	チマチョゴリ暴行事件多発。7月インターハイに朝高生初出場。10月京都市議会「外国人学校に対する処遇の根本的な是正と拡充を求める意見書」採択。J.R道学定期券差別撤廃。この頃より京都府内の公立大学・短大が民族学校卒業生の受験資格を認める。
95	2	日本政府、阪神大震災で被害を受けた外国人学校を災害救助法の指定対象とする決定。
96	3	中体連一97年度から外国人生徒の参加を認める決定。
97	7	京大に民族学校卒業生の受験資格を認める運動展開。一部の大学院で認める。
98	5	日弁連が国立大学受験資格と寄付金の助成等について勧告書を政府に提出。
		国連規約人権委員会最終見解で日本政府に対して民族学校の未承認等、在日の人権に関する報告書を採択。

[参考] 高賀佑『国際化時代の民族教育』東方出版 1996年ほか。

い事故もおきました。

そして四九年には朝鮮人連盟が解散させられると同時に民族学校の建物を没収し、閣議決定で朝連系の学校を廃校し、そして二週間以内に認可申請をしたいものはしる、という非常な強硬策をとったわけであります。そのために全国の多くの民族学校が閉鎖に追い込まれました。朝鮮人の子ども達は日本の中学校に行けという命令が文部省から出されたわけであります。京都の場合ももちろんそういうことになりました。けれども行政との話し合いで何とか存続したいということで、形としては存続いたしました。ところが五二年になるとまた日本政府の方針が変わります。サンフランシスコ条約で日本が独立を回復した時に、朝鮮人の子どもは就学義務がない、と一八〇度方針が変わりまして、学校長の許可によつて日本の学校への就学を認めるということに変わり、日本の国内法遵守を条件として義務教育への就学を認めるということに変わりました。

五三年五月には京都朝鮮学園が学校法人として初めて認可されるということになります。五六六年四月には東京に朝鮮大学校が創立されて、美濃部知事によって各種学校として認可される。五八年には学校法人京都韓国学園が設立されて京都韓國中学校が開校される。こういう波乱に満ちた動きが四五年から六十年にかけておこって来たわけであります。そういう意味では民族学校は本当に波乱に満ち、挫折と栄光を共に味わいながら在日の方々の自らの力だけで維持されて来たというところがございます。

一方、日本の学校に入った在日の子ども達については、当時は外国人としての、つまり朝鮮人、韓国人としての教育を行うということはどこの学校も教育委員会も全然とらなかつた。大阪でも京都でもそうですがクラスの半分、三分の一くらいが在日の子どもであるという学校もいくつかあつたわけですが、そういう子も達の民族的な背景についての理解が全くないままに、日本人の子どもと同じように教えるということだけでいたわけですね。それでは問題があると、この在日の子ども達をどうするのだ、

ということで、在日の子ども達の教育を真剣に考えなければいけないということが七十年代に学校現場の先生達の中から出ました。そして七二年の四月に、大阪市教委が初めて学校教育方針の中で在日外国人教育の項目を記載するということになりました。京都の場合はちょっと遅れまして九二年の三月ですが、京都市教委が京都市立学校教育方針というものを出しました。その前には試行段階があつたわけですが、主として在日韓国朝鮮人に対する民族差別をなくす教育の実施についてという方針が出され、これにより市立の学校と民族学校の交流も公認されるということになり、やっとさまざま取り組みが行われるようになってきたわけであります。

この間、八三年には韓国学園が東山区の本多山という現在地に移転をしましたが、韓国学園に来てもらつたら環境破壊で困るという理由で、地域の日本人や一部の政党政治家が強硬に反対するということがあつて、この移転自体が非常に難航したというようなこともございます。それから年表のあちこちにありますけれど、この民族学校に行つてている子ども達への暴行事件が多発しているということがあります。朝鮮半島で何か大きな動きがあると、必ずといっていいほど朝鮮人は帰れとか子どもに対する暴行が相次いで起こっているということも見逃してはならない事実であります。

こういう波乱に満ちた民族学校であるわけですが、今、民族学校は一つは経済的な点で大変な苦難の様相があります。というのは学校教育法の第一条に定める学校ではなく、各種学校として認可されていますから国の補助金がゼロのわけですね。日本の第一条校、つまり学校教育法に定める学校であれば国の補助が出来ます。それがないので経済的に大変苦しい。それで京都府ならびに京都市では他の私立学校並みに補助されておりますけれど、それは自治体のできる範囲のことですから金額的には知っているのですね。そういう点で経済的に大変苦境であるということ。

もう一つは国立大学に入學するための受験資格がないことがあります。私立や公立の大学は六

割から七割近くがもう受験資格を認めているのですが、国立大学の門戸は非常に固い。しかし大学院になりますと京都大学並びに東京大学などで、一部の大学院が受験資格を認めるというように変わっていますけれど、この点についても国として非常にガードが固いということがあります。

こういった問題につきましては日弁連、日本弁護士会連合会や国連の人権規約委員会で、日本の民族学校の差別的な処遇については改めるべきであるということを度々討論し、提案がなされるまでになつておられるということが、ごくかいつまんだ民族学校の歴史であります。

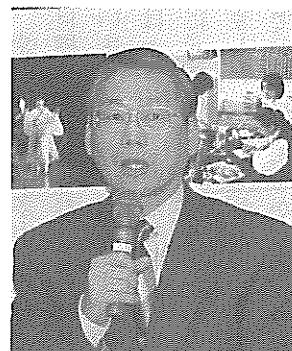
今日はそういう意味で三つの学校から来ていただいております。それぞれの資料も準備していただいているのですが、今、私がさつと申し上げましたようなこの五十数年間の背景をちょっとだけ頭の底に置いていただきてお話を聞いていただけるとありがたいと思います。

今日はまず韓国学園の李明さん、それから朝鮮第一初級学校、初級学校というのは日本でいう小学校にあたりますが全京愛さん、それから京都の市立学校につきましては嘉楽中学校の土岐文行さん、安藤るりこさんのお二人に来ていただいております。今から十五分くらいずつ李明さん、全京愛さんにお話しいただきまして、土岐さん、安藤さんにはそれぞれの実践報告ということでお二人合わせて二〇分くらいでとりあえずお話を聞いて、そしてその後、皆さん方からの質疑、ご意見を承いその後に四人の方に補足していただこうと思います。

それではまず韓国学園の李明さんからお願ひします。

李 最近どうも韓国学園という呼び名の方が通りがよくなつておりますけれど、京都の京都韓国中高等学校、各種学校で一条校でないということで書類上は中学までで、校を使わないというような、まだそんな対応をされているのです。何を子どもに教えるのかという内容なのですが、子どもに教えるより

も自分が勉強しなければならないことがたくさんあります。



李 明氏

実は私は民族学校の卒業生ではありません。ずっと地方で高校、大学まで日本の学校であり、民族教育なるものは実は家庭の訓育くらいのものとして、祖母や父親あるいは母親から受けただけです。クゴ、クゴというのは韓国語のことなのですがあまり上手ではありませんし、発音もあまり良くはありません。しかしながら民族教育にとってやはり大きな柱は言葉だろうというふうに思います。私どもの学校は小学校がありませんので、語学の面からいうと大変なハンディキャップを負っているなと思います。個人的なことで申しわけないのですが、実は九八年に韓国の教育部に提出する研究課題がありました。韓国系の学校は日本に四校しかないのですが、東京と京都、大阪は建国と金剛で大阪の二校は一条校になっています。その三校は全部小学校があります。幼稚園もありますね。京都だけ中・高校で小学校があります。ですから一番大事なところで語学教育というか民族の魂と言つてもいいのかもしれません。それを受け継がせる言葉が保障できていない部分があり、ちょっとあかんなというふうに思います。神戸に中華同文という中国人の方の学校がありますが、そこは幼稚園、小学校、中学校までがあって高等学校がないのですね。一回、聞き行つたことがあるのですが、要するに日本の学校に送るというふうな発言のされ方をしておりました。横浜には昔高等学校があったようですが、今は高等学校はないということなのです。ですから幼、小、中の間にかなりの時間、中国語をやっています。そして中学にあがつたら数学等も中国語になおした教材で授業をしているということでした。ということは僕等も反省しないではならないな、もう少し語学に熱心に対応すべきだということです。

しかし実は民族学校に対する保護者のニーズが段々少なくなつて来ております。先ほど仲尾先生か

らお話をありましたけれども、一つにはやはり進学ということを念頭におきますと、国立の大学が一番良いと思っておられるわけですよ。これはもう日本に生まれた人間ですからどうもそういうのが刷り込まれていて、東大以下国立の学校がヒエラルキーの如くあり、その頂点にたどり着くための大変な労力を子どもに強いるというのは日本の方と同じです。京都などの場合ですと私立の学校に早い段階から入れようということで、家庭教師だとか塾に必死になつて通わせますけれど、それは在日も京都の人間もほぼ同じようなパターンをとっています。ですから民族学校がそれを担えないということになりますと、つまり学力が低いということになると子どもを送らないという傾向を持ち始めるのです。特に六五年に韓日協約が結ばれてから、在日は永住あるいは定住ということをはつきり出してきます。もちろん総連系の人たちは本国に帰るということを前提にした教育を打ち出して来られていました。しかし韓国系、特に京都の場合は七十年あたりからはつきりと永住、定住の方針で教育をするということが続くのですね。これはあちこちで出されたので見ていただいた方もおられるかと思うのですが、共生を目指してという資料は先ほど先生のお話をありましたのでとばしまして、ナンバー2の方を見ていただいたらと思います。

北白川から本多山に移行する過程の中で、もう十五、六年経つわけですが特に本多山に来てから教育目標を変えました。もうはつきりとですね。ここに教育目標が書いてあります、三つです。略して言いますが自尊、知恵、共生ということをうたつていて、読んでいただいたらおわかりになると思います。はつきりとした形で教育目標をえてやつてきました。ただ韓国中高等学校は先ほどお話をあったように元々は本国へ帰る子どものためのクゴ講習所、韓国語あるいは歴史を学ばせる所という趣旨で始まりました。しかし帰るのをやめるということで、新しい場所に来て新しく、新しい時代を念頭に置いた形での教育を、しかし民族教育はやめないということです。ですから一方では受験をさせるための努力も

すると。しかし一方では個々の子どもの学力を伸ばすことによって、ひょっとすると自信を持つような形での進学ということもあるかも知りませんね。人様から誉められればやはりある程度自信がつくという部分もありますし、学校の勉強だけが勉強ではなくて、本来は自分で勉強しながら自信を持って生きて行くということが一番大事だらうと思うのですが。

そこで韓国人の育成ということも大事ですが、自分たちのルーツだと言葉や文化を大切にして誇りある韓国人であるとともに良き国際市民というような内容を実際には教え始めていっています。仲尾先生たちが京都市に国際化大綱を出されましたか、日本籍市民と外国籍市民というようなことをどこで教えるかと言いますと、ナンバー3の方を見てください。

中学校の教育課程表をご覧になれば日本の公立の学校とあんまり変わりません。ただ違う点は民族教科というのが出ております。国語というのはここでは韓国語なのですが、国社というのは韓国の社会ですね。それから在日韓国人史だとか伝統器楽、その次にテコンドーと書いてあります。シドニー・オリンピックで種目に入り、日本の岡本依子さんが三位に入りました。余談ですがある方も私どもの学校で練習をされておりました。彼女のコーチが全日本のコーチなのですけれど、それが実はうちの学校の職員です。自慢げにしゃべって自分がメダルを取ったわけではないのですけれど、身近にそういう人がいると何人であっても嬉しいというのがやはりありますね。そのテコンドー、これは日本の学校ではほとんどうらない教科なのですがこれをやって、後の社会科から日本語まで、日本語というものは日本では国語でしょうが、決まった時間数の中でやりくりしながらそういうふうにやっております。

中学校から日本の高等学校へ行かせるということがずっと長かったのですが、ここ数年来、方針転換をしました。短い期間せつかく育ててようやく目鼻がつきそいになると、出来の良い子から外へ出てしまふのですね。そうすると後の高等学校へは、ほとんどの子が日本の中学校から入つて来るというよう

なことでした。やはり最後は大学へ入れないと駄目ではないかと、自分達の手で大学へ入れるべきだと。ところが先ほど言いましたように各種学校ですので、六割くらいの私立の大きな所や三十数校の公立には行けるのですが、国立が直接受験させないという形なのです。ですから大検も受けさせるというような形でやってきました。後、何年か、来年が結果の出る勝負の年だろうと思います。子どもに教えることと言った時に、子ども達にはいろんな情報を提供する。それも日本の社会で育っていますので、日本の側から発信された情報が全面的に正しいという部分を、違うよという時があります。それを時々言います。それが社会科なのか、在日韓国人史の時なのか、教えるという形になります。

今日の『統一と和解をめざす祖国』ということなのですが、具体的には在日は勉強もしなければとうこともあります。日本人との関係でいうと同じ土俵で何かやってみたいということでスポーツを選びました。それが硬式の野球でした。テニスなどは以前からやっていたのですが、硬式の野球で全国に出てみたいということがあります。まだ弱いのですがそれを去年、一昨年かな、始めました。

学校の中身ですが子どもに教えることの中で、やはり基本は自分の出自をはっきり確認させるという作業を行事の指導などでやっています。例えばチエサというのがありますね、日本で言う旧暦の八月十五日がそうですが、あるいはソルナル、旧正月。そういう時には民族行事として実際に学校でチエサをやります。祭事、法事です。それからサデジョルというのが韓国にはあるのですが、四大節、サミルチヨル、カンボクチヨル、チエホンジヨル、ケチョンヂヨルです。三・一節、光復節、解放の日が光復節ですね。その際には式典に参加するということで意識を促すという形になっています。

持ち時間が余りないので、実は統一、在日が主体的になつていくためにということで、昨年度の文化祭で子ども達が主題も副題も勝手に自分たちで決めて『ワンコリアを僕らの手で 在日が統一のかけ橋』というテーマで文化祭を行いました。その際に自分たちが本当に何をやっているのだろうという

ことで、よく考えたら自分たちの同胞にも話もしたことがない人たちがいる、ということで総連の学校との交流をしようということになりました。年表を見ていたら二〇〇〇年の十月です。文化祭にチヨソンハッキョの声楽部の生徒に出場してもらい、そして一緒に歌を歌うということをやりました。それが私たちのワンコリアの道の歩み始めということになると思います。ただ学校で基本になるべき点はやはり勉強させることだらうと思っていますので、嫌だらうと思いますが少し無理強いして勉強はさせる。それからクラブですね。野球だとテニスだと、少し水準を上げていって対抗できるような形にしていこうということです。

特に『統一と和解をめざす』というような部分につきましては、本国が主体だというのは多分どうしようもない部分があると思うのですね、在日ですから。しかし在日のことについては本国ではなくて在日本がやつていこうと、主体性は在日が持つべきだということで子ども達が次の主人公になっていく作業ということだらうと思います。東京あたりは国民教育をやりますが、私どもは民族教育をやる。つまり国籍のある教育というのはニューカマーの人達にとってはわかりやすいかも知れないのですが、僕等にとってみれば少しわかりにくい状況になっているのも事実ですので。

それからやはり民族教育そのものが大きな曲がり角に、というよりももう曲がってしまったのかも知れないのですが、本当は昔のようにクゴとか歴史だけでやれるという状況ではない。特に人権の問題も含めて共通で考えられるような要素はやはり僕等も考えます。つまり国民国家の枠だけでこれからはやれないでしょ。京都市などではわざわざ国際化大綱の中で日本籍市民というようなことまでおっしゃつていただき、外国籍市民というふうなことになっている限り、市民社会へ転換していくために、主体的に担う外国人として住民としてという意識を子ども達に持たせるような教育をしていきたいと思っています。そのためには本国にも文句を言う。

補助金に関しては日本国政府としては知らん顔をしています。言葉は悪いですが京都府の方が渋いです。京都市の方がまだ出していただいていると思いますがあまり出ません。京都府は返事は良いのですがほとんど出て来ません。それで私どもは韓国政府が頼りなのです。ですから韓国政府にいくつかもの要望を出しています。やはり韓国政府自身にとつても国籍を持っているのは在日だけですから。中国にいる二百万人程の朝鮮族の人は中国国籍ですかね。でも民族的なことを言えば向こうの方がかなり質の高いものを持つていてるのかも知れません。アメリカにいる人達に限つて言えばほとんどが市民権を取つてゐる人達と考えていいでしようし、ロシアもそうですね。カザフスタン、ウズベキスタンなどの中央アジアに連れて行かれた朝鮮人、カレンスキーの人達も国籍の面から言いますと今はカザフ・ウズベク共和国の国籍を取つてゐるというような状況ですね。ですから韓国の国籍を拘つて持つてゐるのは朝鮮籍も含めて六四万弱の在日だらうと思ひます。そういう人達の意識を持たすことが日本の社会にとって、多文化共生にとって実は必要な部分というふうに私は思つています。

本当はもつともつと話したかったのですが、話が長いので代わります。

仲尾 どうもありがとうございました。先ほど李明さんが言われた中で一つだけご説明させていただきます。東京の韓国学校はビジネスマンの家族の方、いわゆるニューカマーが多いのですね。ですから京都のように永住されている特別在留資格を持つたいわゆる在日の方が中心の学校とかなり性格が変わつてきている。そういうことで国民教育、民族教育というような言葉の使い分けをされたと思います。それだけ補足させていただきます。

それでは全京愛さん、お願ひします。



全 京愛氏

全 アンニョンハシムニカ、はじめまして。私は京都朝鮮第一初級学校で二十五年間教諭生活をしながら子ども達と接してきました。この場を借りて子どもたちのお話、姿をわかつていただければと思いましてお話をさせていただきます。

我が第一初級学校は南北区、西区、伏見、南山城の四地域から集まつて初級部一二二名、そして幼稚班が三十名です。今までに約三五〇〇名が卒業した五五年の歴史を持つ学校です。教育内容としては朝鮮語を主にして朝鮮人として育つて行き、祖国の歴史と地理、また日本の歴史を学びながら日本の社会で在日朝鮮人として生きていく人材を育てることです。

今日私がこの場所で皆さんにお話ししたいなと思うのは今日のテーマである統一問題、これに関するいくつかのエピソードをお話しした方が良いのではないかということで、三點ほどお話をさせていただきたいと思います。

一つは昨年、二〇〇〇年の六月十五日にありました南北首脳会談のこと、そして二つ目は七月二十九日に西京極グラウンドでワンコリアサッカーフェスティバルがありました時のこと、そして三つ目に二十世紀最後の十二月三十一日に都メッセでありますカウントダウンの時のことをお話したいと思います。

皆さんよくご存じですけれど六月十五日に歴史的な瞬間を迎えるました。その日は、三階で子ども達にテレビのニュースを見せたのですけれど、その一瞬、テレビの画面を見た途端、子ども達は自然に大きな拍手を送って、「先生、統一したの、統一するの」という声があちらこちらで聞こえました。チャイムが鳴りましたので皆んな教室で勉強しましょうと言うと「先生、勉強せずにテレビを見せてください」

という言葉も出て、本当にごく自然に子ども達自身が統一問題を受け入れていて感じました。そしてその日学校内では統一旗を出してきて、そこに全校生の名前を記入して皆さんでそれを飾つておいたのです。そういう感じで、統一が出来るよという気持ちが教育の中で子ども達の身についているというシンが一つありました。

そして七月二十九日のワンコリアサッカーフェスティバルでは、韓国の友達を迎えて統一チームとして日本の学校の子ども達と親善試合をしました。その時も初めて顔を合わせる韓国の友達と話をしたり一緒に食事もしたりする中で、言葉が通じるということで今まで身近にいたような、いつも一緒に生活しているような感じで子ども達が過ごせました。南朝鮮、韓国の方から来た友達が「君、好きな食べ物なに?」と質問し、その時に子ども達の中から自然と「キムチ!」と言う声が返ったそうです。本当に今まで一緒に生活していた子どものように、韓國のお友達と過ごせたという場面がありました。

皆さんのお手元にある作文なのですが、その時に参加した六年のチン・リヨンギ君のものです。その日がちょうどこの子のお誕生日だったのですが、今までのお誕生日と違って本当に素直な気持ちをこの作文にまとめましたので読んでいただければいいと思います。この中でこの子が綴っているのは日本の友達には日本語で、そして朝鮮の友達には朝鮮語で通訳が出来ましたという、本当に心と心の懸け橋が出来たということを正直に書いた作文です。そしてこの子もそうですし、そこに参加した友達も日本の子ども達と一緒に輪になつて踊つたり騒いだりする中で、本当に統一というものは目の前に近づいているのだなという瞬間を迎えたというのがその時の流れで、子ども達の中では強く残っています。

そして十二月三十一日に行われたカウントダウンに子ども達も参加しました。日本の方達はじめそこに集まつた方達全員が一つの輪になつて、統一を願つて作詞作曲された歌を歌う中で、子ども達も本当に大きな声で統一を願い国は一つだという気持ちを込めて大きな声で歌う。その姿を見ていて、学校で

学んでいる子どもたちの姿は生き生きしているなと感じましたし、本当に祖国はいつも一つだという気持ちが自然と子ども達の身体の中に生きていると思いました。

そしてもう一つのエピソードです。夏休みにお父さん、お母さんと一緒に平壌に遊びに行って来た子、そして済州島に遊びに行って来た子ども達が、二学期が始まってお互いにどこどこへ行って来たよと会話ををしているのですが、平壌に行った子も済州島へ行った子も朝鮮語が通じたよ、朝鮮語で話せたよ、わかったよと一年、二年の子がしゃべっていました。自分達がちゃんと朝鮮語をしゃべれるということがすごく嬉しかった、どこに行っても朝鮮語をしゃべって通じたということがとても嬉しかったと話す場面を見た時に、私はとても嬉しく思いました。私達の財産というのがこれではないか。先ほども李明先生がおっしゃいましたが、本当に私達に大切なことは自分の国の言葉がちゃんとしゃべれるということとで、私達が学校で教えている教育内容の一番の財産ですし、これが本当に子ども達に小さい時から教えていくべきことではないかと感じました。

またやはり私達は日本に住んでいますし、日本の方々とも交流を深めています。特に第一初級の近くにあります東和小学校、竹田小学校、南浜小学校、板橋小学校、そしてちょっと離れているのですが南山城にある伊勢田小学校の子ども達と交流を深めています。特に板橋小学校の先生達は今年チャンゴを習いたいということで、私が行って一緒にチャンゴを練習したりアリランの歌に合わせて演奏したりして深めていっています。

昨年度から京都市にある梅津小学校、松尾小学校、東和小学校、南浜小学校、そして北の方にあります鷹峰小学校、楽只小学校、この六つの小学校と京都朝鮮第一初級、第二、第三初級の子ども達が梅津小学校に集まりまして友愛スクエアという交流の場を広めています。今年で二回目なのですが、お互いの文化を習い民族の遊びをしてみたりとか、朝鮮のトックという料理をオモニ達に作ってもらって一緒

に食べたりして楽しいひと時を過ごすのです。今年も参加したのですが、最後にはそこに集まつた三百名程が一つの輪になつて朝鮮の統一レッシャの歌に合わせて踊りを踊つて親善を深めました。そういうこともこれからずっと続けて、いろんな方々の輪を広めていく一つとしてやっています。

そして私もそうですが学生達、一世、二世、三世、四世の時代になつています。だけど私達は代が代わつても統一問題というのは必ず実現していくかなくては駄目だと常日頃考えていますし、子ども達もそういう気持ちちは自然と自分たちの身体に入つてていると思います。

今年、学芸会で童話の白雪姫を年中さんの園児が朝鮮語でしました。その他、小学生達が朝鮮の民謡とかディズニーの小さな世界とか日本の歌も歌つて父兄の方々や日本の学校の先生達、子ども達に見ていただきました。そういう学芸一つ、あるいは歌を一曲教えることを通じても、朝鮮語でも日本語でも自然と出来ますよと。そういう気持ちでいろんな方々と付き合つていけるような子ども達に育てるといふことでいろいろ取り組んでいます。今年の白雪姫の朝鮮版はとても好評でした。ビデオにおさめていますので後で見ていただければと思います。

喧嘩もしますし大きな声で泣いたり笑つたりしますけれども、未来に羽ばたく子ども達は毎日生き生きと楽しく学校生活を送っています。子ども達がこのように学校生活を送れるのも、やはり代が代わつても若い先生達の熱意と最後まで子ども達に責任を持つていくという姿勢が、学校の中で持たれているからです。またやはりそれを支えていただいている父兄の方々の縁の下の力で学校も守られています。ワンコリアサッカーフェスティバルを成功させるのにもいろんな面で守つていただいていますように、子ども達に教えていくというのは父兄の方々と私達が一致団結していくことだと思います。祖国のみならず国際舞台に羽ばたいていく二十一世紀の主人公は学生達だと思いますので、そういう面で子どもから学ぶという姿勢を忘れずに教えていきたいと思います。この子達こそ私たちの財産であるし、私達が

守っていいくべきものです。それこそ二十一世紀に羽ばたいて、大きな力をいろんな面で活用出来るようにしていくことだと思っています。これからも続けて子ども達の中に入り、子ども達に学んでいくという姿勢をいつまでも忘れずにいろんなことを教えていかなければ駄目だなと思っています。以上です。

仲尾 ありがとうございました。それではその次、嘉楽中学校のお二人ですが、持ち時間二十分以内で中身の分担その他はおまかせしますので、どちらからでもお話を始めてください。

土岐 嘉楽中学校の土岐と申します。よろしくお願いします。座つて報告させていただきます。

土岐文行氏
土岐文行氏
人権を基盤に据えた総合的な学習について嘉楽ヒューマンウイーグ

と呼んでいるのですが、KHWと略させていただいて話を進めていきます。その前に本校にはジャマイカ籍、朝鮮籍、韓国籍の外国籍の生徒およびダブルの生徒が十三名おります。今年度から戸籍上の外国籍生徒のみならず、生徒との関わりや家庭訪問などを通じて見えてきたダブルの生徒をも巻き込んだ取り組みにしていこうと確認しています。取り組みを通じて今年は、子どもが言ったのですが、私のお祖父ちゃんは昔は朝鮮人やったと訴える生徒も出て来ました。本校における外国人教育の研修などを通じて一人ひとりが意識を持ち、子ども達に接してくれている結果かなと思っています。

今回報告させていただきますこのKHWという総合的な学習についても、十三名の生徒達を巻き込んで取り組みにしていこうということを四月の段階で教職員で確認しました。今回『統一と和解をめざす



祖国——在日は今』というテーマをいただきましたが、昨年の六月十五日以降、学校の取り組みに何か変化がありましたかと仲尾先生に聞かれて答えにとても窮する部分がありました。朝鮮文化と言った場合、共和国の文化を指しているわけではなく韓国、共和国の文化ともを指して朝鮮文化と僕らは使つて来たつもりですし、在日韓国朝鮮人といった呼び方を数年前より在日コリアンという呼び方に変えております。そんな感じで共和国と韓国をわけた形では全然考へていらないというのが今の状況です。もちろん生徒とか保護者のいろんな考えがあると思いますので、その部分は十分配慮して対処していくつもりではいます。

例えは毎年、朝鮮中級学校との交流があり、その他うちの学校は同和地区を含む学校であります、その同和地区の生徒達と第三初級学校との交流もあります。そういう部分に関しては交流前にそれぞれの担任が家庭訪問をし、取り組みの趣旨とか目的を説明して理解をもらえるような形で、当たり前の配慮なのですがそういうことはしております。授業においても、同じ民族が分断され二つの国が存在するのだという客観的な事実の部分は伝えているのですが、それ以外、特に人権に関する学習については韓国とか共和国をわけてという形では全然進めておりません。

ということで今回KHWで行つた具体的な取り組みの方をこれから安藤に報告してもらいます。

安藤 それでは本校の総合的な学習というKHWの時間に取り組んだことについてお話させていただきます。

私が担当しているのは一年生で、まず一学期に出会う学習として、KHWの課程の中で同和問題と外国籍市民の人権に関する問題、養護育成、ジェンダーフリーという四領域を各二時間ずつ全員が学習しました。そして二学期にその四領域の中から個々の興味関心に基づいて生徒自身が選択して、このKHW

Wの取り組みが始まります。その選択の方法については後で資料をご覧ください。ここでは時間の関係で割愛させていただきます。



安藤 るりこ

安藤るりこ氏

今回の総合的な学習での狙いというのは戦前、戦中、戦後の日朝関係、在日コリアンの置かれてきた、また置かれている立場を正しく捉えるためのアプローチとして朝鮮文化に触れ、在日コリアンに出会わせる。それからチャンゴやチヨゴリなど、華やかな朝鮮文化に出会わせその素晴らしさを体験させるということもありますけれども、総合的な学習としての狙いの先頭に来るのは自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、より良く問題を解決する資質や能力を育てる。それから学び方やものの考え方を身につけ、問題解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む姿勢を育て自己の生き方を考えるようにするというようなことも考えております。

学習の詳しい内容に入る前に、担当しました一年生の学習に関して選択するまでの外国籍生徒、またダブルの生徒の状況について簡単に触れておきたいと思います。

一学期に、先ほど申しました出会いの一時間が終わった後に、学年の教師で協力して外国籍生徒およびダブルの生徒と個々に話をする機会を持ちました。

一名は民族名を日本語読みで登校している生徒ですけれど、自分の民族名にマイナス指向の考え方をしていない部分はあるのですが、両親が仕事上使用されている通名、日本名の方には複雑な思いを持っていることを話してくれました。友達から何々君は外国人なのというような質問をされたら非常に困る、自分も日本名だつたらそういう質問をされなくともいいのになという思いを聞きました。また彼の中には同時に、堂々と生きていって欲しいと考えている両親の思いをやはり自分も肯定できるという部

分が入り交じっているように感じました。彼とは何度か話をした結果、迷いながらも本講座を選択し、後で詳しく述べますが実際に学習が始まると非常に積極的に参加する姿が見られました。

三名は日本名で登校していますがその中の一名は小学校時代に非常に辛い経験をしたようで、詳しくは語ってくれないのでですが、当初は私たちの働き掛けに対して強く拒むような姿勢が見られました。でも少し話をする中で、どうしようかなという本人の心の揺れを感じることが出来ました。でも彼女は結局、今回はこの講座を選択しませんでした。総合学習の最後に発表会があるので、選択した生徒たちが前向きな学習をしたということをその子に感じられるようなものにして、それをその生徒の第一步にしようというように話し合いました。

あと二名について、それからダブルの生徒についても自分のことをある程度は知っているのですが、これまで詳しく学習したこともないし、特に意識をしていないような様子で、働き掛けによってこの講座を選択しました。

以上のように外国籍生徒三名とダブルの生徒一名の計四名を含む、学年でいうと三六名がこの講座を選択しました。ではその詳しい内容に入りたいと思います。十九時間の学習の概要と簡単な計画については資料の2の方にあります。

一日目の二時間は出会いのステップという位置付けで、生徒達が朝鮮のさまざまな文化に触れ体験しながら身近に朝鮮があることを感じらるるとともに、またこちらからこんな学習をしていくこうというよううにその内容を紹介しました。資料3の方にその時に使ったプリントが付けてあります。朝鮮語での挨拶の仕方、ハングルを使って自分の名前を書いてみようとか、あと朝鮮ゴマのペインとかチエギチエギの体験、またパチチョゴリやチマチヨゴリの紹介、そして今回の学習の中心となります伝統の中で使わってきたチャンゴ、ブク、ケンガリ、チンなどの楽器の紹介、最後には皆でアリランを歌つたりして、

二時間の中で非常に浅く広く欲張ったのですが、さまざまなことをこれから体験して朝鮮文化に触れて親しんでいこうという気持ちになるように学習を進めました。

次の時間からは本格的にチャンゴやプクの体験に入つていきました。今回の学習の中で私たちは出来るだけ在日コリアンの方と生徒達が出会える機会を持つていこうと考えていました。この回には朝鮮文化研究会の七人の大学生が講師として学校の方に来てくれました。この時間は、認識して活動に移していくステップという位置付けで学習を進めました。はじめに大学生の七人がサムルノリを演奏してくれて、その後グループごとにわかれてチャンゴやプクの演奏の仕方と基本的なリズムを教えてもらうというふうに学習を進めました。資料4はその時に使つた基本的なリズムの楽譜になつておりますのでまたご覧ください。この学習の中では相手が大学生ということもあり年令が非常に近いので、生徒達はすぐになじんで一生懸命に練習して、またいろいろと話もしたようでした。前の時間に覚えたアリランの歌に合わせるリズムを教えてもらつて一緒に歌つたりするような姿も見られました。

それではこの時間の活動の様子をビデオでご覧ください。

この活動で生徒達が書いた感想文集を資料の一番最後にまとめて載せてあります。今回十九時間の取り組みの中で、生徒達には機会があることになるべく感想を書かせるように、その時に感じたことを残していく様にしてきました。非常に資料が多くなつてしましましたが、生徒全員の感想を載せさせていただいております。また読んでいただけたらと思います。この学習の中でのチャンゴやプクに挑戦しようという感想の中からビデオと同時にいくつか紹介させていただきたいと思います。

「チャンゴとプクとチンとケンガリ四つの楽器、一つずつが何か現わしていることを聞いた。音にもそういうイメージがあつて四つで演奏するとすごく迫力があった。日本の楽器とはまた全然違つてそれ

ぞれの良さがあるのだなと思った。」

「弾いたり叩いたりしてみるといろんな音が出て面白かった。でもリズムをとるのが結構難しくて大変でした。朝鮮の人達が丁寧に教えてくれはって楽しかったです。教えてくれてはるのを聞いていると、自分の国の楽器やからいろんな人に教えてあげたいという気持ちがすごく感じられました。良かったです。」

ピティオ

このように全体的に前向きな感想が多く、もっとチャンゴやパクの練習をしたい、上手くなりたいといふような気持ちが感じられました。先に述べた民族名を日本語読みで登校している生徒は、この学習が終わってから大学生達が片付けをしている部屋に一人で入って来て、ずいぶん長い間彼らと話していました。大した話はしていないというようなことを言っていましたが、非常に人なつこい笑顔で嬉しそうに話していたように見えました。彼にとつては初めて身近に接する民族名を名乗る人だったそうです。またダブルの生徒の方も普段はあまりダブルであることを話したりしないのですが、この学習の終わりに自分の母親も韓国の出身なので、母親の国の楽器であるチャンゴが出来て良かつたというふうに話しました。

次の六時間は、活動をし、また考えを深めていくステップと位置付けて学習を進めました。東九条マダンの代表をされているパク・シルさんに講師として来ていただきました。午前中一時間ほどチャンゴを練習して、パク・シルさんからのお話を聞きました。ここではこの十九時間の学習の重要な狙いであ

る戦前、戦中、戦後の日朝関係、在日コリアンの置かれてきた、置かれている立場を正しく捉えるという点についても触れていただきたいと思っていました。一年生なのでいきなり詳しい歴史や現代の問題にまでというわけにはいきませんけれども、名前に関することとか民族楽器との出会いとかまた東九条マダンを始めるに至った過程等についてわかりやすく話をしてくださったので、これまでにはチャンゴやプクを元気に叩いて賑やかに学習をしていた生徒達ですが、パク・シルさんの話を真剣に聞き入るような様子が見られました。その後一緒にパク・シルさんの作られた三年峠という歌を教えてもらってチャンゴやプクとピアノと歌で演奏しました。この時の感想をいくつか紹介させてください。

「日本人と朝鮮人は同じ人間であるけどまだまだ朝鮮人への差別は多い。皆が共に暮らせたらいいな。」

「日本人も在日コリアンの人ももつと仲良くしなければというパクさんの思いがよく伝わって来た。考えてみたら昔、私たち日本人は朝鮮人の人達にひどいことをして來たのだという反省をしなければいけないと思う。」

「日本の文化と朝鮮の文化、どちらも違う文化をお互いに持っている。それならお互いのことをよく勉強し交流を何度もして関係を深めれば、いつかきっと差別はなくなると思う。」
というような感想が見られました。

ビデオ

この日の午後からは初めてチャンゴとプクを身体につけて体育館で練習を始めました。今回の学習では三六人分のチャンゴやプクのほとんどを東九条マダンの方からお借りしていたのですが、先ほどのパク・シルさんのお話で少しずつ楽器を集めていった思いを詳しく知つたせいか、この時から生徒達はとても大切に楽器を扱うようになりました。生徒達がますますチャンゴやプクの練習に夢中になつていて、その中でも民族名を日本語読みで通学している外国籍生徒がチャンゴやプクの中心であるケンガリをしたいと私に言つて来ました。生徒のそんな変容を感じて二人で話し合つて、私達の方からチャンゴやプクの演奏を東九条の老人ホームへ発表しに行って、在日一世の方に聞いてもらわないかということを提案しました。子ども達も大変興味を持ったので、それに向けて練習をしていくことになりました。ケンガリをすることになつた生徒も友達と一緒に、ほとんど毎日昼休みにケンガリとかチャンゴ、プクを練習しに来るようになりました。

その後二十二日までは発表に向けての練習をずっととしていくことになります。

二十二日は班ごとに事前に調べて老人ホームの方へ集合しました。この日は発信のステップという位置付けで学習を進めました。発表前には生徒達はとても緊張していましたけれども、お年寄りの方達の温かい手拍子に励まされて何とか発表を終えることが出来ました。中には生徒達の演奏するアリランに合わせて身体を動かすお年寄りもおられました。帰りにはまた来てや、ありがとう等ととても温かい声をかけていた大いに、生徒達は大変疲れた様子でしたがやはり達成感と充実感に満ちていたように思います。またこの日は車椅子の老人等を自分から押したり、声をかけたりする様子も見られて大変良かったなと思っております。

ではその発表の様子をビデオでご覧ください。

この時の発表を終えて、後日生徒達が書いた感想をいくつか読ませていただきます。

「僕はあまり上手くないので皆んなのを見ながら演奏したから下を向いていたけれど、お爺さんお婆さんの手拍子が音でわかった。リズムをはずした手拍子もいくつかあつたけどとても嬉しかったし、中には手を使って踊っている人もいた。僕はそういうのを見たり聞いたりしてお陰で少し緊張がほぐれた気がして嬉しかったです。」

「チャンゴとプクを叩いて松崎さんと杉本さんがこれから演奏しますと言った時はムッチャ緊張したけど、演奏している時は手を叩いたりうなづきながら聞いてくれはってすごく嬉しかった。お婆ちゃん達が演奏していた途中に泣いてはったりした時は、私の演奏がお婆ちゃんの心に響いていたような気がしてすごく嬉しかった。だから気持ち良くなれど、その分一生懸命叩けたから満足しました。またこういうことが出来たらいいなと思いました。もうこれで終わりになることがちょっと嫌です。もっとやりたいな。」

というような感想がありました。

こんなふうに時間が足りない状況でずっと学習を進めて来ましたので、最後の、学年での学習発表会は準備をする時間がほとんどありませんでした。でも自分達が知ったことを紹介して、何よりも演奏をして皆に聞いてもらおうというようなことになりました。発表会の様子をまた流させていただきます。最初に少し触れましたが、自分が外国籍であることをなかなか受け止め切れていない生徒もいま

したので、発表ではただ演奏するだけではなくて、聞いている側にも掛け声等で参加してもらつて楽しい発表になるよう工夫しました。発表だけを見る生徒には、十九時間かけて学習を重ねて来た生徒と同様の理解とか感動というのは十分には伝えなかつたとは思いますが、民族や国籍等が異なる人がいるのは当然で、多文化社会は豊かで楽しいものだということを感じて欲しいと思いました。実際にこの発表会の様子を見ている中では、選択した生徒たちが楽しく学習したことを感じて、これから前向きに外国籍市民の人権に関する問題を学習していくこうというような入口には立つてくれたのではないかというふうに感じています。

ビデオ

発表の最初に、狙いの中で自ら課題を見つけて学び考えより良く問題を解決する資質や能力を育てるということを述べましたけれども、ご覧の通りまだ一年生ですので人権に関する問題ということでは学習があまり深まっていない子どもも多いです。限られた時間で自ら考えて課題を見つけて学んでいくといふことはなかなか難しかつたのも事実で、ある程度教師の方で学習の方向性を提示していきながら、子ども達の様子に従つて進めていくという形を私たちはとりました。一年生のKHWの時間で前向きに学習に取り組んで充実感を感じさせ、二年生からはより主体的に学習に向かい、最終的には三年生で自らの課題を見つけて取り組んでいける力を育てていけたらと考えています。

非常に時間を超えてすみません。これで発表を終わらせていただきます。

仲尾 ビジュアル、音声を使って大変素晴らしい報告をしていただきました。私の方から特に付け加

えることはございません。これからまた皆さんのお質問、感想などを中心に後半のセッションに向かいたいと思います。では鄭昌根（チヨン・チャングン）さんお願ひします。

司会 ありがとうございます。それではただ今より休憩に入ります。休憩の間に皆さんのお手元にあります質問用紙にご記入いただきまして、この机の上の質問箱に入れておいてください。約十五分くらい休憩が入りますので、第二部が始まる五分くらい前までにお入れください。あの時計で三十分くらいに開催させていただきます。よろしくお願いします。

第一部

質疑応答

仲尾 例によって紹介させていただきまして、質問についてはそれぞれの方にお答えいただこうと思います。まず第一番目の方。

一、「それぞれの学校でいろいろな取り組み方で民族文化に対するアプローチがなされているのを聞いて、画一的な学校教育にも多様性が取り入れられて来たのだと嬉しく思います。このそれぞれの取り組みを一つの取り組みに出来るようなイベントが市レベル、府レベル、国レベルで行われるようになるといいですね。」

というようなご感想です。京都市につきましては毎年、民族文化に触れる集いということで京都市レベルで京都市教育委員会が中心になって催しをやっていらっしゃいます。そういう意味でもっとこのよ

うなことが京都市だけではなくて広がっていくと本当に良いと思います。一番目の方の感想です。

二、「私は今五十才になりますが、私が幼い頃は朝鮮文化に触れる機会は本当に少なく学校で体験出来る」とも皆無でした。「」十年前から生まれて初めてキムチ以外の朝鮮の食文化に触れる」とによつて、つまり食べる機会を得て自分の朝鮮の人々に対する意識までが大きく変わったことに驚きます。こんなに美味しい食べ物を食べてはるんやるということから始まって、朝鮮の人々との個人的な付き合いまで始まりました。それを考えると嘉楽中学校の取り組みは素晴らしい敬意を表します。」

こういう感想です。確かにこの頃はもうキムチだけではなくて、居酒屋へ行つてもチゲ鍋というのが定番になっていますね。チゲというのは鍋ということですから言葉としてはおかしなことなのですが、とにかくチゲという言葉が日本語に入つてきました。ではその次へいきましょう。

三、「嘉楽中学校の両先生へ。素晴らしい学習の発表」」苦労さまでした。」

次は質問で一点あります。」の一点の質問は嘉楽中学校の土岐先生に答えていただきましょう。まず一点目。

四、「外国籍の子どもにとり、保護者の考え方もあるでしょうが民族学校で学習させるのとどちらが理想的だと思われますか。」

これはいつも問われる質問ですが、日本の学校の先生としてのお立場でお答えください。在日の方の思いとは重なる部分も重ならない部分も両方あると思いますが、そういうことを含めてお話しただけたらと思います。一番目。

五、「ダブルという言い方は少し気になるのですが。」
ということです。これについても土岐さんからお答えください。

土岐 どちらで学習させるのが理想的ですかと問われても、わかりませんと僕は答えます。実際問題九割以上の在日韓国朝鮮人の子ども、在日コリアンの子どもが日本の学校へ通っているという現状を考えると、少なくとも公立学校できちんと受け皿を作つておかなくてはいけないということは言えると思います。ただ嘉楽中学校でもそれが十分に出来ているかと言えば出来ていない部分もたくさんありますので、今後もっともっと考えていかなくてはいけないと思います。そんな部分ではどういうふうにしていったらいいのかなというのは、例えば中級学校の先生や韓国学園の先生等と交流しながら見えて来るものもあるのと違うかなと思っています。ですからとりあえず僕らは入ってきた在日の子どもをきちんと受け止められて、その子の個性がきちんと伸ばせる環境づくりを大切にしたいなと思うので、どちらが理想かということに関してはなかなか答えが出せない部分です。

もう一つダブルという言い方なのですが、以前はハーフという言い方、その前は混血という言い方をしていましたが、それ代わる言葉がなかなか見当たらないというように思います。例えば障害者の問題でも障害と言るのはいかがなものかなと思いまし、けれども代わる言葉がなかなか見つからない感じで、僕自身もダブルに代わる良い言葉があれば教えていただきたいなと思います。

仲尾 はい、ありがとうございました。確かに今言わされたように混血、ハーフ、ダブルというように

言い方が変わつて来て います。ということは混血という言葉、あるいはハーフという言葉についてこだわりのある人があつて、それでもっと良い言葉がないかということでダブルという言い方になつて来ているのが時間的な経過だと思います。私自身もダブルという言葉が果たしていいかどうかわかりません。本当に皆で考えていくべきことでしょうね。その中で最も妥当な言葉が生まれて来るというように思います。それではその次の方のご質問が重なつてありますのでいきます。

六、「良いお話をありがとうございます」といました。韓国学園の李先生がおっしゃる自分たちの手で大学に入れたいといつ気持ち、わかるように思います。各種学校という扱いのため大検を受けざるを得ないということのようですが、その辺をもう少し詳しく伺えませんか。また大阪の韓国学校は一条校ということですがその違いは何ですか。日本の法律のせいで各種学校になつているということで、やはり申し訳なく思います。」

こういうご質問です。やはり李明先生に今の三点についてお答えいただくのが良いかと思いますので、よろしくお願ひします。

李　　はい。日本の文部科学省の外国人学校に対する対応と言いますか、日本政府のこれまでの民族学校に対する対応の結果と言う方が良いのだろうと思ひます。大阪の建国は初期の段階で一学園三学校で一条校の申請が降りたのですね。ですから閉鎖命令が出た後に一条校として残つたのは建国だけです。金剛はしばらくして小学校だけ一条校の扱いになりますけれど、これも八三年かそこらに一条校をとります。その際に韓国という名前は使つておりません。ですから白頭学園、建国幼・小・中・高等学校だとか金剛という形で、つまり日本の学校教育法の一条校にあたるものですから日本の学校という分類で

す。どこが違うのかと言わされたら名前、韓国なり朝鮮なりが使えないというのが一点あります。それからやはり、これまで日本政府 자체が管理下に置くということを念頭に置いて来た部分だらうと思います。正直な話、試験は同じなのですから受けて点数が良ければ通したらいではないかと僕は思っているのです。制度上の制約をつけておいて最初から仲間外れにするというようなやり方はもう止めて、やはり点数の取れる子は何人でも取れますし出来ない子は出来ないわけです。試験ですから競争だと言うのであれば、同じ試験問題をやらせて点数の高い方から入れるのだつたら入れたら良いし、もっと性格の良い子を入れるという方法を取るのであれば、そういう方法に変えながら入れていつたら良いのではないかと思うのです。制度上の制約で受験の機会を与えないというやり方はどう考へても認められない部分だらうと思います。

それから大検をなぜ受けるのかということなのですが、要するに私どもの学校、それから朝鮮学校も各種学校からは直接に国立や一部の公立の大学を受験出来ない。私立の短大等でも文部省の指導を受けて受験機会を与えないということがずっとあつたわけですね。それぞれの学校の裁量で受験資格を決めたら出来る部分もやらないで横並びでやる。もちろん政府からお金が出ているのでその辺のこともあるのかも知れませんが、もう少し自主的に自分達の学校教育を面白いものに変えていたら、いろんな人間が来て受験したら良いのではないかと僕は思っているのです。そのためにはどういう子どもを欲しいのかということを前もって言つておいて、何人であつてもテストを受けさせる。日本語でテストをしていわゆるわけで、日本語が出来なければ試験に通らないのですから。そういう意味合いでは不公平というか、アンフェアな部分はやはり批判されると思いますね。別にグローバルスタンダード云々の話ではないけれども、日本人達だけで通用する部分が必要な時もあると思います。あると思うけれども日本の大学に行きたいなど、外国人が積極的に日本に来れるような体制づくりを日本側がもっと考へなればなら

ない。ちょっとと言葉は悪いのですが、主権者の日本人達がもう少しはっきりと意志表示をしていただくほうがいいのではないでしょうか。よく考えたら法律というのは自分たちが勝手に作ったわけですか、作つた方が変えたらいいのですよ。不都合な点は、変えて別にどうということはないのではないかでしょか。試験ですから受けける時に高等学校の卒業資格がいるというのは、今の段階ではある程度は仕方ないので、では大検を受けさせると。うまいことなど言つたら言葉が悪いのですが、うちは受けようという子は一年生で通っています。クラブと重なつて受験出来なくて合格していないのであって、全教科に一年生で通っている子が何人もいるわけですよ。逆に言えばそのくらい通らないと国立は無理だろうと思いますね。あまり言い始めると批判的になるという気がしますが。ただ大検が本年度から二度受験機会を与えるというふうになるそうですが、いつするのかよくわかりません。いつもは夏、一度だけだったのですね。それも昨年度から何をおっしゃったのかと言うと、民族学校の在籍者でも受けられると。ということはそれ以前は民族学校の小・中を卒業した子どもは受けるチャンス自体もなかった。ですから民族学校へ来て一生懸命勉強した子が、良く勉強が出来るから京大へ行かせましょうと言つても、大検の受験チャンスさえも与えなかつたのですよ。それを去年の段階から外して、本年度ですね、朝鮮の学校にいようと民族学校にいる子どもも受験出来るということになりました。

仲尾 ありがとうございました。今のお話に少しだけ付け加えさせていただきます。まず一条校になるためにはカリキュラムが文部省の方針に従つて作られなければいけない。だから例えば学校で勉強する教科のすべてを日本語で教育しなければいけないということになつてしまします。もう一つは教員免許ですね。教職課程をとった日本の教員免許のある教員でなければ教師になれない。ところが日本の教育系大学を卒業した日本人の、あるいは在日の方でもいいのですが、学生が民族学校に就職出来るかと

言えば、韓国語・朝鮮語が出来なくては言語の教育が出来ないでしょう。これは実際にそういう点で無理なのですね。

もう一つの条件は一学年に最低三クラスがあることという規模の問題があります。そういうことを認めれば一条校になり得るのですが、そういうことになってしまふと今李明さんがおっしゃったように民族学校ではなくなってしまうという実態があるわけです。しかし民族学校を通そうとすれば国からの補助は一円もないですから、大変経済的に苦しいというジレンマが今、全ての民族学校を襲っていると言つてよいかと思います。

それから大検の受験資格で私が本当におかしいと思うのは、今日日本の国内に六万数千人の留学生がいるわけです。留学生応募の条件とは何かと言いますと、要するに十二年間の教育を受けて来たことという、これだけなのです。ですからアフリカの高校であろうとヨーロッパの高校であろうと中国の高校であろうと小学校から十二年間、卒業してそれを履修したという卒業証明書があれば皆んな日本の大学を受験しているのですね。ところが日本の国内にあり十二年間の教育課程がある民族学校だけが排除されているという奇妙なことになっている。ですからその点では日本の国際化というのは大変金んだ面があると思います。留学生と言えば大いに国際化のシンボルだから頑張ろうということになるのだけれど、そういう点があるかと思います。はいどうぞ。

李 実は合格しても十八才を越えない受験資格が生じないと裏側に書いてあるのですよ。ですから例えれば十五で大検に合格しても、満十八にならないと大学の受験資格が生じないと合格証の裏に書いてあるのです。十五で通つたら、十五で大学を受験させたらよいと思うのですけれどね。もちろんそういう傾向になると思います。飛び級だの何だのという形で出来るだけ期間を短くして、昔のように変わる

のかも知れませんけれど、十五で通った子が十五で大学受験が出来るような方向で話をしなければいけないなというふうに思っていますけれどね。

仲尾 今の方のご質問はもう一点あるので、これは嘉楽中学校の安藤先生に答えていただこうと思います。

七、「嘉楽中学の子ども達の話は感動しました。子ども達が次の社会を築いていくことで、やはり教育は大切なと思いました。自分達で朝鮮の樂器を大切にして、演奏を頑張って、得るものは大きかったと思います。一方で日本人の生徒で朝鮮に対する印象などの変化についてのフォローについてあまり話していただけませんでしたので、在日の子が変わると同様に日本人の子も変わらなくてはと思いますので、出来ればその辺のお話を聞いていただけたらと思います。」

この方が書いておられるように、これは先ほどのお話の中では必ずしも触れていたく時間がなかつたと思いますので、日本人の子ども達がこのKHWの教育を受けてどのように変わつていったかということを、安藤先生お願いします。

安藤 はい。資料の最後の感想はもちろん在日の生徒もそうでない日本国籍の生徒の分も全て載せてありますので、それもまた読んでいただいたらと思います。私自身が感じているものとしては一番は、簡単な言葉ですが彼らにとって近い存在になつたということかなと思っています。それは一つは国の場所という点で最も近い国であり、昔から良い面も悪い面も含めて歴史の中でもさまざまな関係を持つてきました国であると思いますので、そういった自分達に関わりの深い国がとても近い存在になつたということ

が一つ。それから自分達のすぐそばに、あるいは自分達の仲間の中にそういう韓国籍や朝鮮籍を持つ子ども達、あるいはジャマイカ籍を持つ仲間達がいるのだということを実感しているのではないかなということです。

五年前になりますが、その当時もそれなりに三年間学習をして来た三年生が、ちょっときっかけがあつて仲間の中にも在日の仲間がいるのだよという話をした時に、えつ、ウソ、という返事が返つて来て、自分は何をして来たのかということを非常に感じて反省したことを見えております。そういう部分というのはなくなつたのではないかなと思っています。やはりただ話すだけではなくて、身近にいる人達と関わり合いを持てたということはとても大きかったのではないかなど。もちろん民族名を日本語読みで通つている生徒がいますので、その部分でも周りに与える影響はとても大きかったと思います。

あともう一つはやはり今の子ども達を見ていて、外国と言うとアメリカでありイギリスでありという歐米諸国がポンとイメージとして入つて来ると思うのです。そういう部分では自分達の一番近い国に目を向けていけるチャンスがあつたと思うし、アジアについての意識も持つていける第一歩になつたのではないかなど感じています。

仲尾　はい、ありがとうございました。あと二つご感想がありますのでご紹介させていただきます。

八、「私は数年前まで京都市内の私学で教師をしていたこともあって、今日のテーマは特に関心がありました。人権教育の担当者にもなりました。在日コリアンの生徒が学校で本名を用いるのか、それとも通名を用いるのか知る必要があつて入学前に家庭訪問をしたことも覚えてます。その当時は朝鮮学校や韓国学校と交流すること等考えも及ばなかつたのですが、今日の報告を聞いて、もし交流していた

「また人権教育にも深まりが出来ただろうと思ひます。嘉栄中学校の取り組みは本当にすごいと感服します。日本の学校でそれだけの取り組みが出来るという到達点に感服しているのです。これからも人権教育のリーダーとして頑張ってください。今日は本当にありがとうございました。カムサハムニダ。」と書いてあります。

確かに私も今日のような実践は素晴らしいと思います。先ほど控室でお一人にお話を聞き、私がこういう取り組みをすることについて、管理職の校長先生や教頭先生を含めていろんな意見が出てもめなかつたのかという質問をしましたら、全然問題はなかったということなのですね。ですからこれはやはりそういう学校ごとの先生方、管理職の方々を含めた意識だと思います。幸いなことに教育委員会の方では先ほど紹介しましたような外国人教育方針が出ています。それで在日の子どもがいる、いないに拘らずきちんととした取り組みを学校でやろうということが、京都市の小学校、中学校、高等学校でやろうと思えば一応やれるということになっていることが非常に大きいと思いますね。京都府について言うと、京都市以外の所でそういう指針を出している所はありません。ですから取り組もうとしてもそれは現場の先生がかなり努力をしないと出来ないと出来ないということになるので、そういう点では大阪や京都等の在日コリアンの方の多住地域での教育委員会の指導性というのは大変大事だと改めて思いました。
もう一つご感想をいただいています。

九、「今日も」の会に参加できて本当にありがたいでした。韓国中学校の李先生のお話、そして朝鮮第一初級学校の全先生のお話、さらに休憩の時のビデオの子どもだけの元気な劇や歌にうたれたものがたくさんありました。嘉栄中学校のこの学習の試みは深い感動を覚えました。ここまでやれるということを知り、どの学校でもせひとも同じような試みにチャレンジして欲しいと切に願います。生徒達の感

想文の中にも心を通じた喜びがいくつもありました。もっともっと交流を重ねていけば、深めていけば必ず差別も偏見もなくなるという感想を、また新しい勇気をもらいました。ぜひそういう社会が来ることを信じて出来ることから始めていきたいと思います。以上、ここまで導いて来てくださったスタッフの皆さん、講師を引き受けてくださった方々に心より御礼を申し上げます。これからもどうぞよろしくお願ひいたします。」

こういう感想です。

先ほどから非常に詳しい実践報告があったのですが、私の方から李明先生、全先生に嘉楽中学校の取り組みを見られた感想を一言ずつ、あるいはこれからのご希望、ご期待を含めてお話ししただけれどと思ひます。今度は全先生からいきましょうか。一言お願ひいたします。

全 私たち は学校の中でチャンゴとか アフリカ とか ケンガリとかいうのは、主に学芸会とか子どもたちに自然と教えられるのです。 すけれど嘉楽中学の方でああいうふうに取り組んでおられるということは、本当に先生達の努力がそのまま子ども達に伝わっていると感じました。

もう一つはいつも思うのですが、音楽というのはどの国と言わずにその国々の楽器を聞くと、子ども達もそうですが身体が自然に動くのですね。本当に嬉しいという気持ちがその場ですぐ入りますので、特に日本の学校でそういうふうに取り組んでおられるということに対しても自身も学ぶべきことが多いです。またこのようにお隣り同士の文化を広げていくことに対しては、とても大切なことをしておられますし、大変だと思います。私もこれからはもっと幅広くたくさん外に出ていろいろな先生と交流を持ち、日本の学校で取り組んでおられることを学びながら、子ども達に教えていくために自分がもつと勉強しなければ駄目だなということを今日参加して感じました。

仲尾　はい、ありがとうございました。では李明先生、お願ひします。

李　日本の公教育というのは日本人を作る所だというふうに思つておりますし、そのために在日の子どもを民族学校に寄越してくださいといふことを四六時中言つてゐるのですが、圧倒的多数の在日は日本の学校を選択しております。日本の子ども達も含めて体験は大変良いなと思います。しかし、僕は別にナショナリストイックに物を言おうとしているのではないのですけれど、日本の子どもが日本人であるということをもう少しあつさり打ち出した方が違い性がはつきりわかると思うのですね。外国のことを行つてゐるんだよと言うのであれば、まず日本の子達には日本のことについてもう少しやつていただいた方がいいかなと。そして朝鮮はこうなんだとか、アメリカはこうなんだとか、その辺の違い性みたいなものをはつきりしていただきないと、うちなどは引っ張り出される可能性があるのですが、総合學習の時にすごいのをやつてゐるのだけれど、全部来はるんですね。皆んな朝鮮、韓国をやつたらそれでその場が終わってしまう。本当はそうではないのですね。正直な話、学校なんて通過地点ですよ。ちょっと辛口になつてしまふせんけれど、社会に出て行つた時に日本の子が自立した日本人になつて、どこへ行つて暮らしてもいいように作った方が良いのではないかなというように僕は思つています。

自虐史観で云々の教科書の問題にしても、黙つてゐるから言つてゐるのでしょうか。文句があつたら言つたら良いのですよ。そして自分達が次の世代に教えなければならないことはこれとこれだと言つただつたら、大きな声で言つたら良いのです。その代わり周辺の国ではそれは間違つてゐるということは言います。第一、文部省が検定しておきながら政府は関係ないという発言はどう考へてもおかしいですよ。外の人間から聞いたら違うでしょう、日本の政府が検定しているわけでしょう。検閲はしていな

いかも知れないけれど、修正までせよということは検定しているわけですよ。それを知りませんという形では話が通じません。さらには先ほど申し上げましたけれど、もうすでにヨーロッパで大実験が行われているように国民国家というのは今後は廃棄すべきような状況にあると思いますので、やはり子ども達が誇りある日本人としてある程度意識をして、市民社会への転換を図るためにもやはり民族性、自分の出自、オリジンを確認して、その子が選択する生き方をしたら良いというふうに思っております。

ちょっと長つたらしくなりましたが。

仲尾　はい、ありがとうございました。いろいろ貴重なご示唆をいただきました。今李明先生がおっしゃったことを敷衍して一言だけ付け加えさせていただきますと、私は例えば日本人が日本の言語、つまり日本語、国語を勉強する、あるいは日本の社会や歴史を勉強する、これは狭い意味での日本人の民族教育だと思うのですね。それ以外に、グローバル社会に突入している今日には普遍的な市民教育がやはり学校教育の課題だと思うのです。人権問題もそうです。環境問題もそうです。そういうことがバランス良く教育されないといけないと、李明先生は実はそういうことをおっしゃっているのではないかと私はなりに解釈します。それがしかも普遍的な市民教育というからには、近隣の民族あるいは国際的なスタンダードに照らして誰もが納得出来るような、世界中の誰から見ても当然のことではないかというスタンダードがなければいけないと思うのですね。やはりそのどちらも欠くことは出来ないと思います。これは韓国学園、朝鮮学園でなさっている民族教育の場合も同じことだと思うのですね。共通性と違いというものをお互いにちゃんと区別した上での共生、つまり違いを認めながら生きていく教育、そういうことが出来る子ども達を育していく、これがこれから課題ではないかということを改めて痛感いたしました。

時間が少し過ぎましたけれども、今日は大変素晴らしい報告を聞いていただきましたので、これで終わらせいただきます。

司会 本日は子どもに教えることについてお話をいただきました。次回は来週三月二十三日、同じくこの場所で午後二時から『祖國を思う』ということをテーマとしまして、在日の高齢者の方をお招きしてお話をいただきます。

第四回 『祖国を思う』

パネリスト

皇甫

王氏

(在日一世)

吳

鳴夢氏

(在日一世)

コーディネーター

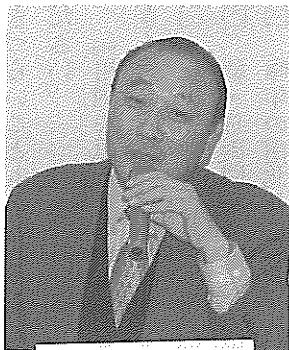
仲尾

宏氏

(京都造形芸術大学教授)

二〇〇一年三月二十三日実施

第四回 『祖国を思う』



吳 鳴夢氏



皇甫 壬氏

吳 ただ今紹介にあずかりましたオ・ミヨンモンです。はじめに、今日の集いに招かれお話する機会を与えてくださった、京都市国際交流協会関係者の方々に感謝の意を表したいと思います。

『和解をめざす祖国——在日は今』というテーマの中で『祖国を思う』をお話するようとのことです。が、勉強不足な私には私なりの経験談しかお話出来ませんのでご了承ください。又ここにお集りの皆さんにはそれぞれ政治的な信条と立場の違いもある事でしょうから、お聞

きづらいこともあると思われますが、こういう考え方を持つてゐる人もいるのだなということでお聞きください。

『祖国を思う』という概念には色々の角度からのとらえかたがあります。今日は私なりの解釈で、大きく次の四つに分けてお話したいと思います。

- (一) 私の生きてきた道と祖国訪問
- (二) 朝・日両国間の歴史認識問題について
- (三) 昨年の南北首脳会談、六・一五宣言をどう受け止めたか
- (四) 私の祖国統一の願い

一、私の生きてきた道と祖国訪問について

私が祖国を語るとき、自分の生きてきた道を振り返ることが重要だと思っています。なぜなら在日の高齢者でありながら、日本で生まれ育ち、祖国を訪問したごく僅かの期間だけしか祖国に滞在していいからです。ですから必然的に在日の視点から祖国を見て考えるのです。

私は『祖国を思う』というテーマをもらったので祖国とはいつたいたい何なのかと問い合わせたし再認識するために、広辞苑を出して「祖国」という単語を引いてみました。

広辞苑では——祖国とは「祖先以来住み、来た國・自分の生まれた國、國民が生まれたもとの國」となっています。

また故郷とは「生まれ育った土地、ふるさと」となっています。

「民族」という概念にはいろいろありますが、一般的には文化的伝統を共有することによって歴史的

に形成された同族意識を持つ集団とされています。また人々の集団における血統、言語、文化、心理状態の共通性などと色々の定義もありますが、特に言語の共有性が重要視され、また宗教や生活形態も民族的な伝統になることもあります。民族がかならず一定の地域に住むとはかぎらず複数の民族が住む社会が多いのです。（ちなみに昔はスター・リンの民族の定義には地理的な共通性もありました。）このような民族という「定義」を、朝鮮語を話せない在日朝鮮人に対してはめると複雑な問題が生じるのです。

今日、私たちが住む世界、地球村では国別に主権をもっていますが、グローバルな視点から見れば多民族多文化共生の時代です。ややこしい複雑なことをくどく解説しなくとも、私は当然朝鮮民族で、祖国は朝鮮です。

— 在日朝鮮人の現状について —

ご承知のことだと思いますが：

現在、在日朝鮮人で朝鮮半島生まれの一世は数パーセントしか残っていません。周知の如く二十年くらい前までは、日本での外国人問題イコール朝鮮人問題でした。現在、在日朝鮮人（韓国籍を含む、以下同じ）は約五四万人位で外国人全体の四十パーセントしかなりません。ここ数年前から毎年一万人前後が帰化しており、帰化申請が始まった一九五二年四月から現在まで二十万人以上が日本人に帰化しています。

これまで帰化した人の子や孫、また国際結婚をした子どもを含めると優に五十万以上の朝鮮人の血を継いだ人たちが日本国籍を取得していると思われます。

しかし案外彼らは、民族と国籍は連動しないと中国やロシア、アメリカ在住朝鮮人と同じような感覚

でいるのかもしませんが、それは解りません。それで広辞苑に書かれた祖国の概念の複合的な意味合いが解るような気がします。

ひと昔前までは在日朝鮮人どうしが初顔合わせする場合、先ず名前と本籍を名乗りました。そのときは「金海金家の：星州の李家、密陽の朴の誰それと言つてから故郷は慶尚南道、全羅北道、濟州道どこどこの郡」と名乗りました。（ちなみに朝鮮王朝の王は全州の李です）

今では二世や三世は故郷を名乗るとき祖父母や父母の生まれ育ったところを名乗つてゐるようですが、それすらも答えられない人が数多く居るようです。これは誠に残念なことです。日本に居る在日朝鮮人の大多数は朝鮮半島の南部の出身で北半部の地に故郷を持つてゐる人は僅か二、三パーセントに過ぎません。

在日朝鮮人は祖国が分断されているため祖国を政治的な踏み絵にされる場合があります。「朝鮮民主主義人民共和国」が祖国か「大韓民国」が祖国か、二者択一なのです。私の場合は朝鮮半島約二三万平方キロメートルの地が祖国の地だと思っており、政治的には朝鮮民主主義人民共和国を支持しています。ちなみに私の両親は共に慶尚南道の出身ですが、朝鮮半島の北と南（韓国）に従兄弟たちがいます。

—生い立ち—

私は高校生のころ詩集を読むのが好きでした。石川啄木の詩に「朝鮮の地図を墨でくろぐるとぬる…」というくだりがあります。正確でないかもしませんが多分「日韓併合」されたとき朝鮮人が主権を失つた植民地人の悲哀を自分の想いとして読まれたのでしょうか。また日本がそのようなことをしてはいけないと自戒しているとも理解できます。

私の父親は、昭和のはじめに日本にきました。六人兄弟で一人だけソダン（書堂）で勉強させてもら

い、日本に勉強にきたのですが、仕送りもない条件のもとですぐ日雇い人夫にならざるをえませんでした。両親は日本で結婚しました。ですから私は在日一世になります。

どのような大政治家、学者、大富豪もみな裸で生まれてきます。人はみな自分の親を選ぶことはできません。私は朝鮮民族の血を受継いで「日本人」として生まれたのです。この日本人には「」がついていますが。「いわしが魚か、朝鮮人が人間か」と朝鮮人が蔑視されたように、生まれたときから奴隸のように疎んじられました。中学生のころ「アンクルートムスケビン」を読んで泣いたのも自分の境遇をだぶらせたかもしません。

市バスに乗ると「差別をなくそう」と言う小さなステッカーが貼られています。差別にも色々あります。が、ここでは民族差別について少し話したいと思います。

またかといわれるかも知れませんが、植民地時代、朝鮮人に対する蔑視、虐待、差別は計りしれないものがあります。今でも朝鮮民主主義人民共和国や韓国、海外に住む朝鮮人にハン（恨み）として残っています。これを払拭するには相当の時間がかかると思います。

いまさら過去を語って何になると言われるかも知れませんが、これは日本に住んで祖国を語ろうとするとき、避けて通れないのです。これは不毛ではないのです。二十一世紀に生きる若者や子どもたちのために歴史的な教訓として語らなければならないと思っています。

朝鮮では日帝三十六年と言いますが、外交権を奪われたときから数えると植民地四十年になります。その間、日本帝国主義は土地の略奪、皇民化政策、創氏改名、強制連行、従軍慰安婦問題、関東大震災時の数千人に及ぶ虐殺、三・一独立運動時の殺戮、独立運動家にたいする弾圧、文化財の略奪等々朝鮮民族として堪えがたい苦痛を強いました。

私の体験した所謂日帝時代は約十一年間でした。その時の私の経験を少しお話させていただきます。

私が創氏改名をさせられたのは国民学校三年生の時でした。進路をえさに教師が創氏改名をせまりました。（京都では…三中…三高…京都帝大が今でいうエリートコース）そして私も日本姓を付けられ鬼畜米英を信じ、少年航空兵にあこがれる皇國少年になりました。

しかし抑圧のあるところからはず反抗が生じるもので。私は国民学校五年生の時、とあることから幼い心ながら自分がどのような立場におかれているかを知るようになりました。

奉安殿（天皇陛下と皇后陛下の御真影が奉られている）の掃除をしながら、私たちが「神風は吹くの嘘だ」とひそひそ話をしていると湯浅という教師がきて「おまえたち不逞朝鮮人がいるから日本が戦争にまけるのだ」といつて朝鮮人生徒を立たせ朝鮮人同士を殴らせたのです。伯父が福知山の飛行場建設に強制徴用され建設（兵庫の川西航空が疎開）が終われば秘密保持のため殺されるとの噂が飛び現地を脱走したのです。これにたいし憲兵の執拗な追求があり、国民学校五年生であった私は首実検に現地に連れていかれました。日本の敗戦二日後、学校で緊急招集がありました。これは五十数年たった今でもきのうの事のように記憶しています。行動に集まつた生徒の前で校長は「日本は戦争にまけ朝鮮、満州、台湾、樺太、千島を失うが、きみたちが大人になつたら取り戻してくれ…」と言って泣いていました。

今考えるとこれが一部日本人の歪められた歴史認識の原点であり恐ろしい気がします。ちなみに校長の話を聞いて「フィリピンに連れていかれる」と泣く朝鮮人の少年もいました。

四五日前から連載されている朝日新聞の「イルム」という欄に十三年前に亡くなつた俳優の松田優作さんや日本のスポーツ芸能界で活躍している在日朝鮮人の悩みや生きざまが描かれていました。読んでいて自分の幼い頃をダブらせ刃物で胸が突き刺される思いがしました。民族差別は今も続いているのです。

私は朝鮮人の先輩とともに、良心的な日本人教師の中には私に思想、階級的な覚醒で大きな影響を与

えた人もいました。私は朝鮮戦争がおこり、朝鮮人としてめざめていきました。自分の人生を祖国の統一と人民のために捧げようと思い永年朝鮮総聯の活動家として働きました。ところがある日、突然の不幸が私を襲いました。再起不能といわれた交通事故に遭って永年病床に臥せていましたが、幸いにも右腕一本が不自由ですが、今でも奉仕精神は健在です。私事で恐縮ですがこれが現在の私です。

次にこういう経過から私が祖国に行つたときのお話をしたいと思います。

朝鮮半島に行つたことのない在日朝鮮人は、祖国を観念的にしか捉えられません。とくに三世四世になるほどその傾向が強いし、祖国に無関心な人も少なからずいます。祖国観の喪失です。これが先ほど述べた帰化につながっています。これには差別が根強く残っている日本で有利に生きていこうとする在日本朝鮮人の願望が少なからず働いています。観念的にしか見ることの出来なかつた私が祖国に行けるという知らせを受けた私は、ずっと興奮していました。

私は一九七四年九月に共和国創建二十六周年記念祝賀団の一員としてはじめて祖国の土を踏む事になりました。非常に榮誉なことでした。当時文世光事件（朴正熙大統領の暗殺未遂事件、大統領の陸夫人が死亡）があつた直後で情勢は非常に緊張していました。

当時は共和国へ行くのにまだ中国経由の航空便は開かれておらず、私たちは東京—ハバロフスク—モスクワ—イルツーク経由でピヨンヤンに入りました。ソ連で泊まつたおかげでレーニン廟、クレムリン、モスクワ大学などを見学することができました。

私が最初に祖国を目にしたのは飛行機から観たアムノッカン（鳴綠江）でした。今日、共和国は食料難にあえいでいますが当時機上からはじめてみる祖国は黄金の稲穂がうねっていました。涙で顔がくしゃくしゃになりました。…稻作…工場労働者の顔、建物など、そこには素朴な美しさがありました。一ヶ

月間緊張し、行く先々で泣いていました。

金日成主席の接見も受けました。

主席は「ここは祖国だ。ゆっくり休んでいきなさい：アメリカの挑発が止まないし、アフリカ諸国に援助しなければならないから…人民にまだまだ満足な生活を保障していません。私の責任は重く、私はもっと働くねばなりません…」と言っておられました。この言葉を聞いた私たちは深い感動に包まれました。

約十五年ぶりに逢った従兄弟たちはふけて見え痩せていましたが、「今、祖国は緊張しているが祖国の山河は美しいよ」と語っていました。

私がはじめて見た祖国は美しかったし、人々も親切でした。しかし、美しさのなかに祖国は外圧により相当な緊張を強いられているなと思って帰途につきました。

現在の共和国のおかれている状態を考えると、隔世の感があります。社会主义国の崩壊が共和国に及ぼした影響が如何に大きかったかよく解るような気がします。

二、朝・日間の歴史認識の問題について

まず祖国の統一に深くかかわる朝・日国交正常化問題について少しだけ述べさせていただきます。

日本の朝鮮に対する植民地支配が終わって五十数年たつ現在でも未だ克服しなければならない過去が清算されていません。

朝鮮人は被害者の立場から歴史を語るし、日本は加害者の立場で歴史を反省し清算しなければなりません。

ご承知のように現在朝鮮民主主義人民共和国と日本の間には国交が正常化されていません。昨年六月の南北の首脳会談以後、共和国ではG7の内、米国、日本、フランスをのぞく四ヶ国を含めEU十六国中十三ヶ国と国交を結びました。これで共和国は一五三ヶ国と国交を結んだことになります。しかるに一番近い朝・日間の国交はまだ結ばれていません。

国交正常化するには、正しい歴史認識をもたなければならぬと思います。これは韓国との関係においても見直さなければならない問題だと思います。朝鮮と日本との間に歴史認識に大きな隔たりがあります。これが国交正常化をさまたげているのです。

問題点は相互に関連していますが、次の四つに集約されるのではないかと思います。

- (一) 一九〇五年の日韓保護条約の「合法性」問題
- (二) 一九六五年の日韓条約の基本問題—朝鮮が分断されたなりの条約締結であり、かつまた、屈辱的なものであり、「条約はもう無効」だというあいまいなけじめです。
- (三) 植民地支配における所業のけじめ、清算、謝罪されていないのです。これは南北共に同じです。
- (四) 日本の歴史教育の問題です。

(一)、(二)、(三)、(四)は関連しているので、ここでは日本歴史教科書の問題にかぎり、お話をしたいと思います。私は教科書の専門家でないし、日本マスコミで報道されている範囲内の私の見解であり、これは決して日本の内政に干渉しようとするものではないということをお断わりしておきます。

なぜ歴史認識の問題を取り上げるかと言えば、朝鮮や中国がかかわる過去の出来事において、共通の正しい歴史認識をもつことが朝鮮の平和統一に寄与し、二十一世紀のアジアの平和と繁栄に係る問題だからです。

世代が変わるにつれ、在日朝鮮人が何故日本に居るのかを知らない日本学校の先生もいます。こうし

た先生方に教えを受ける子どもたちはどうなるのでしょうか。国際化が叫ばれて久しいのにこのような状態が続いています。

私は日本人の中に、公正な歴史認識をされている学者や研究者、政治家もおられ、また現在の共和国の苦境を知り人道支援し、在日朝鮮人の権利擁護のため、朝鮮の統一のために惜しみない支援をしてくださっている諸先生や政治家もおられることを充分に承知しており、私は感謝の気持ちでいっぱいです。

しかしここで私は、歪められた歴史認識についてあえて述べさせていただきます。

なぜなら日本の有力政治家の妄言が後を絶たないからです。遠くは久保田、奥田妄言、最近では石原都知事の「第三国人」発言、野呂田氏の「大東亜戦争はアジアの解放戦争だった」発言等々、政治家たちの誤った歴史認識の発言はあとを絶ちません。

またごく最近では「新しい歴史教科書をつくる会」（西尾幹一電気通信大学教授）が二〇〇一年度版中学校教科書に一三七ヶ所の修正をえた教科書が教科書用図書検定審査会で正式に採択される見込みだといわれています。

懸念されるのは「つくる会」が戦前の植民地支配を東洋民族解放のための「聖戦」であつたと強弁していることです。これにたいし日本のマスコミにもいろいろ見解の差がみられ、この背後に何がひそんでいるのか恐ろしい気がします。過剰反応かもしませんが先ほど日本の敗戦時に小学校の校長の言った言葉に通じなければと、私は強い杞憂がよぎります。

一九八二年の教科書問題の再来であります。最近一連の教科書問題の動きは、日本が村山元首相の談話から後退しているようにみえます。現在の国際ルールで侵略戦争は悪であり、してはいけないのです。教科書で書くべきことは歴史の真実であり再び過ちをおこしてはならない決意なのです。

日本がアジアの人々と平和に暮らそうとすれば歴史認識の歪みを正さなければならないと思います。

日本の一部では「いつまで謝罪と補償を要求されるのか」という声もあります。

「韓国併合・植民地化は日本の安全のために合法的だった：でなければ朝鮮はロシアの植民地になつていた」「…アジアでの戦争は大国の覇権の中でしかたない戦争であった」と詭弁を弄するのを止めなければなりません。

朝鮮人の一部や日本人の中に「おまえたちはなぜ国を取られるような事をして、ほざいているのか」という詰問もあります。朝鮮の諺に「出来ないもの何でも先祖のせい」という言葉がありますが、私たちなりに、国の近代化に取り組んでいなかつた朝鮮が日本の侵略を許した当時の朝鮮支配層の愚行に教訓を得なければなりません。

しかしこれは朝・日関係解決の基本問題ではないのです。日本は日清戦争以来伊藤博文が王宮を軍隊でとりかこみ韓国の皇帝を脅迫して保護条約を結ばせ、三浦悟郎が朝鮮王朝の王妃である閔妃殺害事件をはじめ、朝鮮で行ってきた数々の事柄の非を率直に認め謝罪し、それに対する補償をしなければならないと思います。

朝鮮にたいする日本の過去の清算は朝鮮民族にたいするけじめであり、朝鮮の統一の出発点にもなりうる重要な問題であります。またこれはアジアの平和しいては世界平和に通ずる道だと思います。

現在の歪められた歴史認識が在日朝鮮人の、諸々の差別に繋がっています。随分改善されつつありますが、税金を払っているのに民族学校の教育助成は公正になされていません。就職差別、住居、市、府當は入居出来るようになつたが一般での差別はまだ残つており高齢者無年金者にたいする差別等があります。

この問題はここで止めておきたいと思います。

三、六・一五宣言をどう受け止めたかお話をしたいと思います。

私の『祖国を思う』というタイトルの中で統一問題を抜きにして語ることはできません。

二〇〇〇年六月十五日は朝鮮民族にとって記念すべき日でした。キム・ジョンイル総書記とキム・テジュン大統領の歴史的な会見と南北の共同宣言は七五〇〇万内外の朝鮮人を感激の堀にまきこみました。私は昨年六月十三日、午前の金大中大統領が出発するときからまる三日間テレビにくぎづけになりました。大多数の朝鮮人は私と全く同じ気持ちであったと思います。

これは私の人生の中で最大級の感動を呼び起こした事件でした。順安飛行場での両首脳の握手に私はこみあげる涙を止めることができませんでした。この場面を見て泣かなかつた朝鮮人はごく一部の反統一勢力を除き、居なかつたといつても過言ではないでしょう。

朝鮮民族は十九世紀末から一〇〇余年間、日本、清国、ロシア、アメリカといった大国の覇権争いに巻き込まれ、二十世紀の前半は日本の植民地に転落し、ありとあらゆる苦渋をなめさせられました。二十世紀の「後半」から現在まで国土が分断され苦難の道を歩んでいます。

半世紀以上も分断を強いられた南北の首脳が「北と南は国の統一問題をその主人であるわが民族同士でお互いに力を合わせ、自主的に解決していく」と宣言しました。

この宣言は十九世紀末から大国に少なからず主体性を奪われてきた朝鮮民族が自主独立宣言したこと内外に高らかにうたつた意味を持っているのです。

以後、南北の和解は糾余曲折しながら統一に向けて進んでいます。京義線の連結という統一に向かって大動脈の連結をはじめ離散家族の再会、経済協力、開城地区の工業団地の設定、シドニーオリンピックの共同入場行進等々、南北の交流が盛んになり、確実に統一に向かって進んでいるようです。

共和国の核開発疑惑、ミサイル問題等々も、趙明録さんの訪米とオルブライトさんの訪朝で朝鮮半島の平和定着が前進しかけました。しかし今後を注意深く見守らなければなりませんが、ブッシュ大統領の出現は情勢を不透明にさせ、朝米関係を一時的に後退させているようにみえます。

ブッシュ政権の「ならず者」発言や、米本土防衛ミサイル計画（NMD）を持ち出したことは非常に残念なことです。共和国やイラン、イラクを想定してのことなのでしょう。

ここで一言だけ言っておきたいことは、統一の問題は共和国と南（韓国）の問題ですが、平和定着の問題はアメリカと共和国が確固とした約束をしなければ出来ないということです。朝米関係の諸問題の解決なくして眞の統一は出来ません。朝鮮戦争停戦の当事者は共和国とアメリカであるということを申しのべておきます。

六・一五宣言以後、在日社会においても朝鮮総聯、韓国民団の共同の集まりがもたれており、京都では大晦日に青年たちを中心にもやこメッセでカウントダウン二一を開催しました。

韓国の少年たちと朝鮮初級学校のサッカーの試合も行われました。大阪で行われる世界卓球選手権大会には南北統一チームで参加する朗報ももたらされていますし、明後日二十五日には大阪で朝鮮総聯、大韓民団はじめ在日の各団体が集まって数万人規模のハナ・マトウリ（ワンコリアフェスティバル）が開催される予定です。ワンコリアは着実に進んでいます。

民主主義の日本です。言論の自由が保障されているとはいえマスメディアが朝鮮の平和統一を妨害し、共和国や韓国、朝鮮総聯にたいする中傷誹謗を加熱させ世論を誤導することはやめてほしいと思います。これはまた朝鮮の反統一勢力にも言えることです。

良識ある日本の皆さんにお願いしたいことは、ワンコリアのために以前にまして今後とも変わらぬ声援をお願いします。

四、最後に私の心情を綴った詩を朗読させていただき、お話をわります。

詩「統一よ早くこい」

オ・ソホ

アボジ（父さん）が生まれた

チヨガジップ（朝鮮の伝統的な家屋）の前に

夏から秋にかけて

白いムグンファ（ムクゲ）の

花が咲くそうです。

アオジは子供のころ

洛東江のほとりで

友達と石合戦をしました

オモニ（母さん）は子供のころ

庭に咲く 鳳仙花の花びらで

つめを赤く染めました

オモニは友だちと 南海の浜辺で

小さな貝殻を拾いました。

五月のマンギヨンデ（峰の名前）には
チンドルレ（つつじの花）が咲き乱れていました
白頭山の山麓で
ブルーベリーの赤い実をつみました

普賢寺の石塔のそばに

紫スミレがそっと

咲いていました

九龍渓の岩が 夕日に吠え

宝石を散りばめたように

輝いていました

四月の春 パゴダ公園や

慶州佛国寺の庭に

何の花が咲くのでしょうか

私はそれを知らないのです

ハンナ山のみかん畠や

梨花女子大の片隅にも

色とりどりの綺麗な花が

咲くのでしょうか

でも私はそれを

観る事が出来ません

雄大なアムノツ江が

ゆうゆうと曲がりくねっていました

冬のリミヨンヌで

美しい氷柱をみました

デドン江の柳の花が舞う遊歩道に

若いカップルが歩いていました

ハン江の畔でも

若者が恋を語るのでしょう

日本に来た鶴やへらさきは

海を渡り山を越えて

母国の北や南の地へ

自由に飛んでいきます

アボジ・オモニが遊んだ故郷へも

飛んでいく事でしょう

しかし私は飛ぶことが

できないのです

京都の東山に萬寿寺があります

そこには祖国統一を願いながら

黄泉のくにへ旅立った

ハン（恨）多き人々が眠っています

アボジ・オモニもそのひとりです

アボジは強制連行され

九死に一生でした

オモニに口癖は

「統一すれば故郷に帰る」でした

ふたりは異国之地で言葉も解らず

蔑視と差別のなかで

一生を送りました

そして二度と生まれ故郷の土を

踏むことはありませんでした

日本生まれの わが命は

はや古希に向け進んでいます

アボジ・オモニは統一されたら

故郷の地に埋めてくれと言いました

一度みたいのです

アボジの生まれたところを
オモニの遊んだ浜辺に
行ってみたいのです

「核疑惑」「ミサイル疑惑騒動」

外勢よ干渉をやめなさい

麗しい三千里山河を

殺人マシンの 埠堀にしたのは誰ですか
なぜ貴方たちは 脊かし 苦しめるのですか
忘れないでください

決して殺戮は 許さないということを

統一よ なぜ遅いのですか

お前が来なければ

私たちの ハン（恨）が いやせないのです

ご静聴ありがとうございました。

五〇〇〇年の 歴史をもつ
七〇〇〇万の はらからは
平和と統一を 願っているのです
いかなるものが 統一を遮ろうとも
われわれの 手で

かららず 統一するのです

分断の苦しみよ

その暗闇の 幕をおろし

統一の光明を 開けなさい

一九九九年十二月（創作）

あとがき

昨年、朝鮮半島（韓半島）は世紀の歴史に残る感動を私達に見てくれた。

分断から五十年を経て、世界の注目を集めた南北首脳会談、そして五十年間、生死の確認さえできな
いまま別れ離れになつてゐる南北の離散家族の出会い…。

朝鮮半島（韓半島）は、統一への願望が最高に高まり、その慶びや希望に包まれていた。
そして朝鮮半島（韓半島）の歴史に深い関わりをもつ日本。

日本に住む在日…。

当時の感動や希望は、特別な歴史を持つ在日にとつて他の誰よりも熱い思いがあつただろう。

今回の「チョゴリときもの」のテーマは、将来を考える青年として、和解に向かう情勢変化を前にす
る教育者として、そして在日歴史を体で受けてきた一世や二世の、その熱い思いであつた。

三世達が自ら描いた演劇では、彼らの願望や期待の思いがそのまま胸に伝わってきた。以前よりもつ
と在日の思いを深く理解したいと思つた。

※日本で言う“朝鮮半島”は、韓国では“韓半島”という表現をしております。

二〇〇一年三月二十三日（金）開催の「祖国を思う」については、主催側の不注意により、パネリストの皇甫士様のお話が掲載できませんでした。関係者の皆様に深くお詫び申し上げます。

アジアの風文庫 17

「チョゴリときもの」

在日韓国・朝鮮人～豊かな共生の時代に向けて～

2002年3月31日 第1刷発行

編集・発行 財団法人 京都市国際交流協会

〒606-8536 京都市左京区粟田口鳥居町2の1

TEL. 075-752-3010

印刷 明比印刷工芸株

表紙の写真 京都市国際交流会館1階交流ロビー



＊ 財団法人 京都市国際交流協会
KYOTO CITY INTERNATIONAL FOUNDATION